

北青木遺跡第8次発掘調査報告書

－阪神電気鉄道本線住吉・芦屋間連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－



2018
神戸市教育委員会

北青木遺跡第8次発掘調査報告書

2018

神戸市教育委員会

序

本書は、阪神電鉄本線住吉一芦屋間における連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査の成果について報告するものです。

快適な都市空間の創造をめざして進められている本事業により、阪神電鉄本線における高架化率は95%になり、より安全で快適な交通機関として、ますます地域の足としての需要が増すことでしょう。

また高架化による道路での渋滞解消などは、円滑な移動を可能とし、生活環境に変化をもたらします。本事業が地域にとってより良い結果をもたらすことが望されます。

これに伴い実施された発掘調査では、地域の遺産＝財産ともいえる貴重な発見が相次ぎました。銅鐸の出土、弥生時代の祭祀空間の検出は、この地域が当時から非常に重要な役割をもつ土地であったことの証であります。北青木遺跡の解明は、神戸の歴史を考える上でも非常に重要な役割を果たすものです。

とはいっても付近には未だ知られていない歴史的な情報が、良好な状態で地中に遺構・遺物として多く遺されているものと思われます。新たな発見に期待しつつ、これらの発掘調査の成果が、地域の歴史認識として活かされることを願っております。

最後に、現地における発掘調査事業の円滑な推進ならびに調査成果の報告の機会を頂きました事業主、関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

2018年3月
神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は神戸市東灘区北青木1～2丁目、深江北町5丁目に所在する北青木遺跡における第8次となる埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は阪神電気鉄道本線住吉・芦屋間連続立体交差事業に伴うもので、阪神電気鉄道株式会社より委託を受けた神戸市教育委員会が調査主体として実施した。
3. 現地での調査は平成28年4月11日～8月9日まで実施し、調査区の底地面積は計960m²、遺構検出面数を乗じたべ調査面積は1,430m²であった。平成29年度は、神戸市西区の神戸市埋蔵文化財センターにおいて出土土器ならびに図面・写真の整理、金属製品・木製品の保存処理を行い、発掘調査報告書の作成を行った。
4. 本事業に関する発掘調査及び整理業務は下記の調査組織によって実施した。

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

黒崎直 大阪府立弥生文化博物館館長
菱田哲郎 京都府立大学教授

教育委員会事務局

平成28年度（現地調査）

教育長 雪村 新之助
社会教育部長 東野 展也
文化財課長 千種 浩
担当課長 安田 滉
埋蔵文化財係長 前田 佳久
文化財課担当係長 斎木 嶽
" 松林 宏典
事務担当学芸員 山口 英正
調査担当学芸員 浅谷 誠吾
" 藤井 太郎
" 阿部 功

平成29年度（遺物整理・報告書作成）

教育長 雪村 新之助
社会教育部長 東野 展也
文化財課長 千種 浩
担当課長 安田 滉
埋蔵文化財係長 前田 佳久
文化財課担当係長 松林 宏典
" 中村 大介（保存科学担当）
事務担当学芸員 山口 英正
遺物整理担当学芸員 谷 正俊
報告書作成担当学芸員 藤井 太郎
" 阿部 功

5. 本書の編集は藤井・阿部が行った。執筆については第1章を藤井、第2章は調査担当者が概要を記したものを藤井が編集、第2章第2節（3）の動物遺存体の項は、生物学的調査については、丸山真史氏（東海大学海洋学部）に依頼し、結果を丸山氏と中村が執筆した。第4章第1・2節は藤井、第3節は阿部が執筆した。
6. 出土有機物の年代測定を株式会社古環境研究所、木製品の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。
7. 発掘調査現場において増田富士雄氏（同志社大学理工学部）から地質について有益なご助言を頂き、また出土土器については、元神戸市教育委員会文化財課 黒田恭正氏、関西大学大学院文学研究科非常勤講師 森岡秀人氏から、出土木製品の加工痕については、公益財団法人竹中大工道具館 植村昌子氏よりそれぞれ有益なご助言を頂きました。記して、深謝いたします。
8. 現地での遺構、遺物出土状況などの写真撮影は各調査担当者が行った。遺物写真撮影は、杉本和樹氏（西大寺フォト）が埋蔵文化財センターにおいて行った。
9. 本書に使用した方位・座標は世界測地系第V系座標、標高は東京湾平均海面（T.P.）で表示した。
10. 本書に記載した遺跡の位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「西宮」を、調査地点の位置図は、神戸市住宅都市局発行の2,500分の1地形図「青木」を使用した。
11. 発掘調査の実施、整理作業及び本書の刊行に際しては、事業主である神戸市住宅都市局と阪神電気鉄道株式会社、清水建設株式会社に多大なるご協力をいただいた。

目 次

序

例言

目次

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過—連続立体交差事業の概要と北青木遺跡について	1
(1) 阪神電鉄住吉・芦屋間の連続立体交差事業の概要	1
(2) 北青木遺跡の地理的・歴史的環境	3
(3) 北青木遺跡における既往の調査について	4
第2節 第7次調査にみる調査地の様相	6
(1) 基本層序と調査地の地質分類	6
(2) 遺構分布の特徴、出土遺物の特色	7

第2章 発掘調査の成果

第1節 第8次調査の概要	8
第2節 第8次調査の成果	9
(1) 各調査区の検出遺構と遺物	9
(2) その他の出土遺物	59
(3) 第8次調査出土の動物遺存体	65

第3章 自然科学分析

第1節 北青木遺跡第8次調査出土の木質遺物の樹種同定(株)パレオ・ラボ 黒沼保子	68
第2節 北青木遺跡第8次調査出土有機物の年代測定(株)古環境研究所	71

第4章 まとめ

第1節 第8次調査の成果	73
第2節 弥生時代の祭祀・葬送空間について	76
第3節 北青木遺跡周辺における遺跡の動向	84

写真図版

報告書抄録

図版目次

第1回 北青木遺跡位置図	1	第46回 B54-A 調査区 平面図	35
第2回 北青木遺跡と周辺の遺跡	2	第47回 B54-B 調査区 平面図	36
第3回 調査地区位置図	3	第48回 B54-C 調査区 平面図	36
第4回 調査地及び既往調査地位置図	4	第49回 B55-A 調査区 平面図	37
第5回 高架工事の施工順序と発掘調査関係図	5	第50回 B55-B 調査区 平面図	38
第6回 土層柱状図	6	第51回 B55-B 調査区 出土土器	38
第7回 調査区配置図	7	第52回 B55-B 調査区 SK106 平・断面図	38
第8回 B46調査区 平面図	10	第53回 B56-A 調査区 第2段横面 平面図	39
第9回 B46調査区 SD02南辺中央部 断面図	11	第54回 B56-A 調査区 第1・3段横面 平面図	40
第10回 B46調査区 SD02出土土器	11	第55回 B56-A 調査区 第1段横面 遺構出土土器	40
第11回 B47調査区 平面図	12	第56回 B56-A 調査区 被熱部	41
第12回 B47調査区・B47西調査区 全体平面図	12	SP117・SK119・SK120 平・断面図	
第13回 B47調査区 方形周溝墓 平・断面図	13	第57回 B56-A 調査区 第2・3段横面 棚出遺構	42
第14回 B47調査区 ST205 平面図及び ST205・206断面図	13	及び 繋地層出土土器	
第15回 B47調査区 SD201 平・断面図	14	第58回 B56-A 調査区 浜堤形成砂出土土器	42
第16回 B47調査区 SD201 出土土器	15	第59回 B56-B 調査区 平面図	43
第17回 B47調査区 ST205 木棺材	16	第60回 B56-B 調査区 出土土器	44
第18回 B48-A 調査区 西トレンチ 平・断面図	17	第61回 B56-A・B56-B・B57-A 調査区 出土 金属製品	44
第19回 B48-A 調査区 SX01 平・断面図	17	第62回 B57-A 調査区 平面図	45
第20回 B48-B 調査区 SX01出土土器	17	第63回 B57-A 調査区 烧石・焼土・炭化物出土遺構	46
第21回 B48-B 調査区 湾最終埋立検出状況平面図	18	平・断面図	
第22回 B48-B 調査区 平面図	19	第64回 B57-A 調査区 遺構出土土器	46
第23回 B48-B 調査区 SD301 遺物出土状況 平・断面図	19	第65回 B57-A 調査区 遺物包含層出土遺物	47
第24回 B48-B 調査区 出土土器	19	第66回 B57-B 調査区 平面図	48
第25回 B49-A 調査区 平面図	20	第67回 B58-B 調査区 平面図	49
第26回 B49-B 調査区 平・断面図	21	第68回 B58-A 調査区 SD101出土土器	49
第27回 B49-B 調査区 出土土器	22	第69回 B58-B 調査区 平面図	50
第28回 B49-B 調査区 出土木製品	22	第70回 B58-B 調査区 SE101 平・断面図	50
第29回 B50-A 調査区 平面図	23	第71回 B58-B 調査区 出土土器	51
第30回 B50-B 調査区 平面図	23	第72回 B59-A 調査区 平面図及び出土土器	52
第31回 B50-C 調査区 平面図	24	第73回 B59-B 調査区 平面図及び出土土器	53
第32回 B50-C 調査区 SD01 平・断面図及び出土土器	25	第74回 B59-B 調査区 SE101 平・断面図	54
第33回 B50-C 調査区 SX01 平・断面図及び出土土器	26	第75回 B60調査区 平面図	54
第34回 B51調査区 平面図	27	第76回 出土石製品 (1)	59
第35回 B51調査区 SK302 平・断面図及び出土土器	27	第77回 出土石製品 (2)	60
第36回 B51調査区 SK302 平・断面図及び出土土器	28	第78回 出土漁具	62
第37回 B52調査区 平面図	29	第79回 動物遺存体出土 調査区位置図	65
第38回 B52調査区 SK104 平・断面図	30	第80回 历年較正曲線図 (历年較正の結果)	72
第39回 B52調査区 SK105 平・断面図	30	第81回 時代・時期判明した遺構・遺物の分布範囲図	75
第40回 B52調査区 SK106 平・断面図	30	第82回 既生時代前期～中期前半 遺物出土状況図	77
第41回 B52調査区 出土土器	31	第83回 既生時代中期後半 遺物出土状況図	78
第42回 B53-A 調査区 平面図	32	第84回 既生時代後期～前期 遺物出土状況図	78
第43回 B53-A 調査区 SD201～203 平・断面図	33	第85回 古墳時代初頭～前期 遺物出土状況図	78
第44回 B53-A 調査区 出土土器	33	第86回 古代の遺構・遺物分布図	78
第45回 B53-B 調査区 平面図	34	主な遺跡位置図	86

挿図写真目次

写真 1 既往調査検出遺構と遺物	5	写真 9 増田氏による地質観察の様子	42
写真 2 第7次調査の状況	7	写真 10 B58-A 調査区 近世河道の堆積状況	49
写真 3 B47調査区 SD201出土遺物	15	写真 11 B58-B 調査区 SE101 棚出状況	54
写真 4 B47調査区 ST205木棺材 検出状況	16	写真 12 第7次調査 B49-B 調査区 薄内土壘等遺物出土状況	62
写真 5 木材243号加工痕	22	写真 13 動物遺存検出状況	65
写真 6 B51調査区 SK302遺物出土状況(近景)	26	写真 14 北青木遺跡出土の動物遺存体	67
写真 7 土器24 外面吹き零れ痕と内面コゲ痕	28	写真 15 木製遺物の光学顕微鏡写真	70
写真 8 第7次調査 B53-A 調査区 SD202 バカガイ及び獸骨出土状況	32	写真 16 穿孔土器の状況	80
		写真 17 調査地と周辺	90

表目次

第1表 北青木遺跡既往調査一覧	5	第10表 出土漁具類形分類基準	63
第2表 調査区一覧表	9	第11表 その他の土製品一覧	63
第3表 B47調査区検出埋葬施設一覧(第7・8次調査)	16	第12表 出土金属製品一覧	64
第4表 出土土器観察表(1)	55	第13表 動物遺存体種名表及び出土部位一覧	66
第5表 出土土器観察表(2)	56	第14表 樹種同定結果一覧	69
第6表 出土土器観察表(3)	57	第15表 測定試料と処理方法	72
第7表 出土土器観察表(4)	58	第16表 測定結果一覧	72
第8表 出土石點品一覧	60	第17表 祭祀・葬送遺構及び供献土器一覧	80
第9表 出土漁具一覧	61		

カラー写真図版目次

- 図版 1 1. 調査地遠景 (南西上空から)
2. 第7次調査 B47調査区 方形周溝墓全景 (東から)
3. 第8次調査 B47調査区 方形周溝墓全景 (東から)

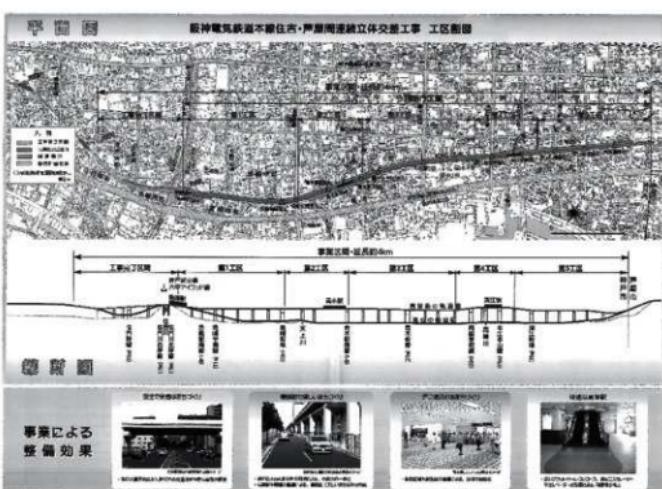
- 図版 2 1. B46・B47調査区 周溝墓出土の土器
2. B52調査区 祭祀土坑出土の供獻土器
3. B50-C・B51調査区 漢・土坑出土の供獻土器
4. B53-A～B58-B調査区 奈良～平安時代の遺物

写真図版目次

- 図版 1 1. B46調査区 SD02上層円形周溝墓 球根検出状況 (東から)
2. B46調査区 全景 方形周溝墓全景 (東から)
3. B46調査区 SD02上層断面 (東から)
- 図版 2 1. B47調査区 方形周溝墓全景 (東から)
2. B47調査区 SD201下層遺物出土状況近景 (南から)
3. B47調査区 SD201上層遺物出土状況 (南から)
4. B47調査区 SD201下層遺物出土状況 (北から)
5. B47調査区 方形周溝墓 ST205～208検出状況 (東から)
6. B47調査区 方形周溝墓 ST205木棺材検出状況 (東から)
- 図版 3 1. B48-A調査区 西トレンチ全景 (西北から)
2. B48-A調査区 SX01検出状況 (北西から)
3. B48-A調査区 SX01遺物出土状況近景 (西から)
4. B48-B調査区 全景 (東から)
5. B48-B調査区 渾の堆積と浜提模出状況 (北西から)
6. B48-B調査区 SD301上層遺物出土状況 (北から)
- 図版 4 1. B49-A調査区 全景 (漆喰検出状況) (東から)
2. B49-B調査区 全景 (東から)
3. B49-B調査区 渋・木製品出土状況 (南西から)
4. B49-B調査区 渋・土器出土状況 (西から)
5. B50-A調査区 全景 (東から)
6. B50-B調査区 全景 (漆喰検出状況) (東から)
- 図版 5 1. B50-C調査区 全景 (東から)
2. B50-C調査区 SD01遺物出土状況 (西から)
3. B50-C調査区 SD02 SK001遺物出土状況 (南西から)
4. B51調査区 全景 (西から)
5. B51調査区 SK302遺物出土状況 (南から)
6. B51調査区 SK302全景 (南から)
- 図版 6 1. B52調査区 全景 (東から)
2. B52調査区 SK104・105全景 (西から)
3. B52調査区 SK106全景 (東から)
4. B53-A調査区 全景 (西から)
5. B53-A調査区 SD202上層遺物出土状況 (南西から)
6. B53-A調査区 SD202下層断層割り状況 (南西から)
- 図版 7 1. B53-B調査区 全景 (東から)
2. B53-B調査区 全景 (東から)
3. B54-B調査区 全景 (東から)
4. B54-C調査区 全景 (東から)
- 図版 8 1. B55-A調査区 第2造横面全景 (東から)
2. B55-A調査区 牽引車下層 鉄筋検出状況 (南西から)
3. B55-A調査区 SP13磁石検出状況 (東から)
4. B55-B調査区 全景 (東から)
5. B55-B調査区 SK106遺物出土状況 (南西から)
6. B55-B調査区 SP132磁石検出状況 (南東から)
- 図版 9 1. B56-A調査区 第1造横面全景 (東から)
2. B56-A調査区 第2造横面 西端被熱部 (南から)
3. B56-A調査区 第2造横面
SK119・120検出状況 (北から)
4. B56-A調査区 第2造横面 磁石検出状況 (南から)
5. B56-A調査区 第2造横面
SK119・120遺物出土状況 (北から)
6. B56-A調査区 第2造横面
焼土塊近景 (南から)
7. B56-A調査区 第3造横面全景 (東から)
- 図版10 1. B56-B調査区 全景 (東から)
2. B56-B調査区 東半 道構築出状況 (南から)
3. B56-B調査区 SK109発出土状況 (西から)
4. B57-A調査区 全景 (西から)
5. B57-A調査区 漆横 (SP126-128など) 検出状況 (南から)
6. B57-A調査区 SP121鐵出土状況及び土層断面 (南から)
- 図版11 1. B57-B調査区 全景 (東から)
2. B58-A調査区 全景 (東から)
3. B58-B調査区 全景 (東から)
4. B59-A調査区 全景 (西から)
5. B59-B調査区 全景 (西から)
6. B60調査区 鍋・漆模様出状況 (東から)
- 図版13 1. B46調査区 出土土器
2. B47調査区 方形周溝墓出土土器
- 図版14 1. B48-A調査区 出土土器
2. B48-B調査区 出土土器
3. B49-B調査区 渋出土土器
4. B50-C調査区 SD00出土土器
- 図版15 1. B50-C調査区 SD02出土土器
2. B51調査区 SK302・SX302出土土器
- 図版16 1. B52調査区 SK104・105・106出土土器
- 図版17 1. B53-A調査区 SD202下層出土土器
2. B55-B調査区 出土土器
3. B56-A調査区 第1造横面・漆模様出土土器
4. B56-B調査区 第2造横面・漆模様 (被熱部) 出土遺物
- 図版18 1. B56-A調査区 整地跡及び浜提面出土土器
2. B56-B調査区 出土遺物
- 図版19 1. B56-B調査区 浜提面出土土器 (SX103)
2. B57-A調査区 遺物 (SK116・120・124・SX102) 出土土器
3. B57-A調査区 遺物合衆出土遺物
- 図版20 1. B58-B調査区 SD101出土土器
2. B58-B調査区 出土遺物
3. B59-B調査区 出土土器
4. B47調査区 方形周溝墓 ST205出土木棺材
- 図版21 1. B49-B調査区 渋出土 木製品
2. B52調査区 SK104出土 ウマ上肢骨
3. B53-A調査区 SD202出土 ウマ下頸骨
- 図版22 1. 第8次調査出土 鉄製品
2. 鉄製品 X線透過写真
3. 第8次調査出土 銅製品及び X 線透過写真
4. 第8次調査出土 銀漆
- 図版23 1. 第8次調査出土 石製品
2. 第8次調査出土 渔耕具 (土錐・網壺)



調査地周辺 高架前の様子
(いずれも平成16年5月撮影)



連続立体交差工事工区割図 事業による整備効果（住宅都市局 HP より）

第1章 はじめに

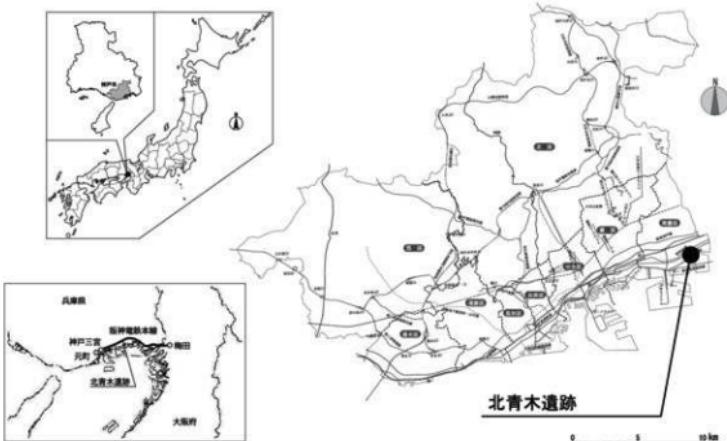
第1節 調査の経緯と経過－連続立体交差事業の概要と北青木遺跡について

(1) 阪神電鉄住吉・芦屋間の連続立体交差事業の概要

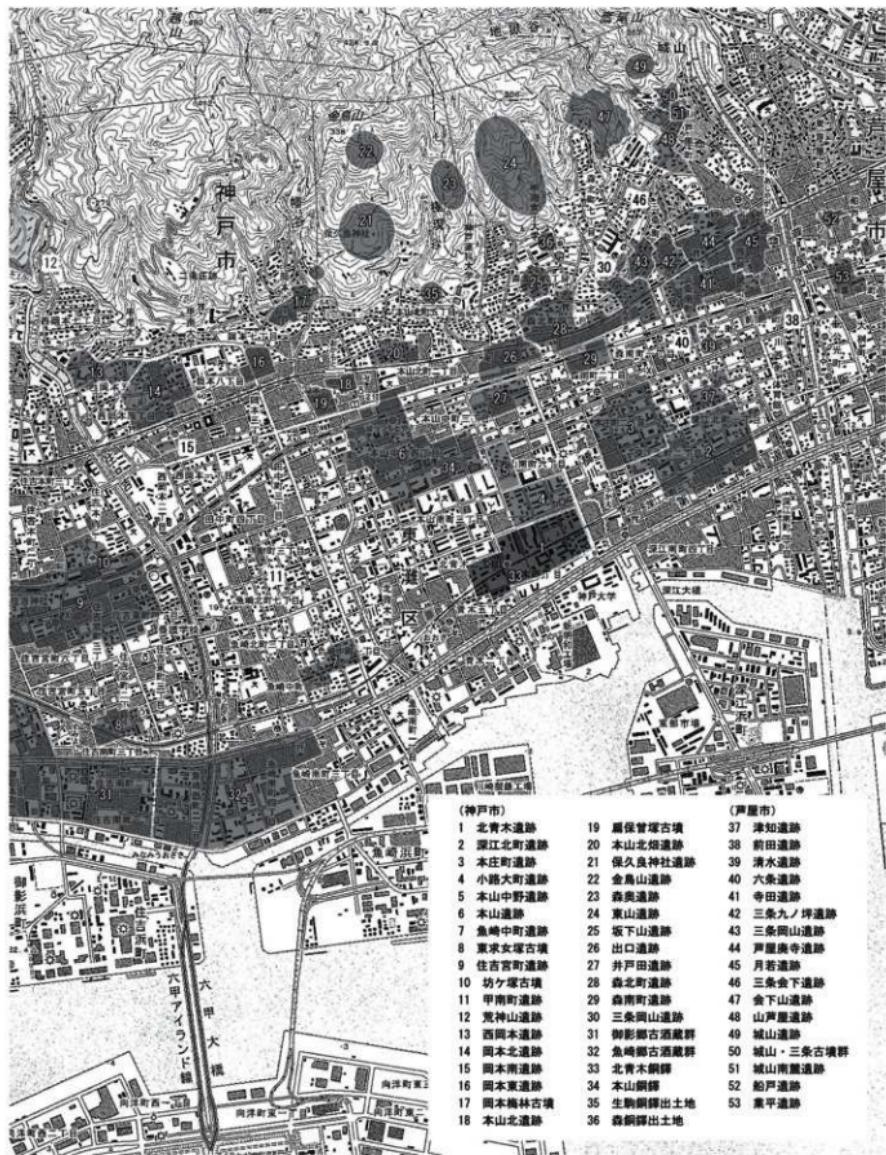
阪神電気鉄道は、明治38年（1905）に大阪（当時は出入橋）と神戸（現在の神戸三宮）を結ぶ国内最初期のインターーアーバン-interurban（都市間高速電気鉄道）として開業し、尼崎・西宮・芦屋・御影など、阪神間の海側の人口の多い集落を結び敷設され、地域に根付いた鉄道として発展してきた。

阪神電気鉄道本線住吉駅～芦屋市境間約4kmにおける連続立体交差事業は国土交通省の補助を得て、神戸市が阪神電気鉄道株式会社とともに都市計画事業として行うものである。道路との平面交差による踏切遮断で生じる、交通渋滞などの交通障害を高架化により解消、あわせて周辺道路の整備を行い、都市環境の改善を目的として実施される。11箇所の踏切の除去と33路線の交差道路、3路線の側道が整備される。鉄道事業に関しては、列車運行の面で踏切解消に伴って安全性が向上し、また新たに建設される駅舎にはホーム階へのエレベーター・エスカレーターが新設され、バリアフリー化が図られるなど、安全で快適、便利な輸送サービスが提供されるようになる。平成3年度の事業認可以降、神戸市と阪神電気鉄道株式会社により用地買収や工事が進められ、平成17年8月には住吉駅～魚崎駅間での工事が完了、平成18年11月より魚崎駅～芦屋市境間での工事が継続している。

魚崎駅～芦屋市境間の事業範囲内には、青木駅～深江駅間に北青木遺跡、深江駅～芦屋駅間に深江北町遺跡の所在が知られており、今回の工事範囲も埋蔵文化財の包蔵地に含まれる。明治時代に線路が敷設されて以降、大きな改変がないことから、地下には埋蔵文化財が良好な状況で保存されていると予測され、発掘調査期間も工事の工程に組み込まれた。平成23年度に北青木遺跡第7次調査となる下り（神戸方面）線高架橋脚部の調査が行われ、平成28年度は北側に新設される上り（大阪方面）線高架橋脚部の調査である第8次調査を実施した。



第1図 北青木遺跡位置図



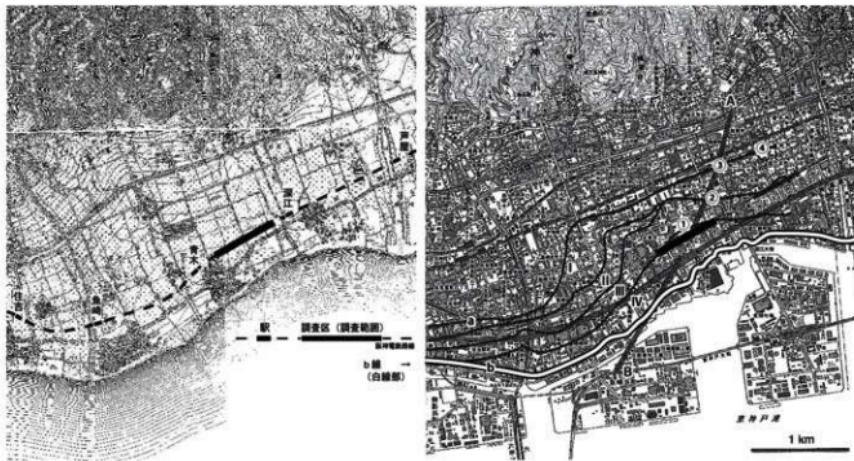
第2図 北青木遺跡と周辺の遺跡 1:25,000

歴史的環境については、北青木遺跡の位置付けに関する記述とともに
「第4章まとめ」項において詳述する。

(2) 北青木遺跡の地理的・歴史的環境

北青木遺跡は、神戸市東灘区北青木1・2丁目、青木4・5丁目、深江北町5丁目付近に所在する。神戸の市街地は北東より南西に連なる六甲山地の南麓、大阪湾岸に沿って東西に細長く形成され、東灘区は最も東側に位置する。遺跡は市境の東を流れる芦屋川と、西約4kmを南流する住吉川の、ともに六甲山から発する2つの河川のほぼ中間の海岸部に位置する。両河川は典型的な天井川を形成し、多量の土砂を六甲山地から海側へと運んでいる。遺跡の範囲は、北側は芦屋川や、芦屋川と住吉川間の小河川である高橋川や要玄寺川などが形成した大小の扇状地の扇端部から、南側は住吉川を流下した土砂が、西からの沿岸流で運ばれ形成された浜提海岸部までの範囲であり、東西約700m、南北約300mのエリア、地質的には扇状地と砂嘴（浜提）列、浜提間湿地を包括する標高2～3m付近に立地している。

第7次調査で解析された地質区分では、住吉川～芦屋川間のボーリングデータなどで復元される2本の帶状地帯のⅢ帶及びⅣ帶付近に位置する。Ⅲ帶は最高海面期(5,000～6,000年前頃)の砂嘴、Ⅳ帶は海面安定定期以降に海側に前進した砂丘と捉えられており、調査地の中央付近がⅣ帶の砂丘上、東西の調査区はⅢ帶との間の湿地状堆積との境、潮汐の影響を受けやすい場所に位置する。現在、遺跡が所在する一帯は東西方向に海側から国道43号線と阪神高速神戸線、阪神電鉄本線、国道2号線が行き交い、住宅や工場、商業地が広がり、旧景を想像することが難しいが、明治19年（1886）の仮製地形図では海岸線まではおよそ500m、南側、国道43号線から青木駅へと北西に延びる道付近が近世期の後浜付近、西国浜街道の痕跡であろう。



I帯、II帯、III帯、IV帯は上部砂疊層の頂部標高から区分した地帯。
a線は最高海面期の海岸線、b線は1886（明治19）年の海岸線。
①は北青木遺跡第3次調査地、②は小路大町遺跡、
③は本庄町遺跡、④は森南町1丁目。
A・Bはボーリングデータの両端位置。
図面引用「北青木遺跡第7次発掘調査報告書」第3章
第5節 P.107。詳細は同報告書参照のこと。

第3図 調査位置図 Scale1 : 50,000

左：陸軍測地部 明治19年製（1886）仮製地形図
右：國土地理院 25,000分の1地形図「西宮」を使用

(3) 北青木遺跡における既往の調査について

北青木遺跡では、昭和59・60年度の県営住宅建設に伴う発掘調査が兵庫県教育委員会により実施され、これが第1・2次調査である。以降、これまでに7回の発掘調査が実施され、縄文時代晚期～弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期、奈良～平安時代の遺構・遺物が確認され、中世～近世にかけての耕作痕が確認されている（第4図及び第1表）。

第1・2・4次調査は市営住宅建設などに伴う大規模な調査で、近接したこれらの調査地では連続する弥生時代前期の大規模な東西方向の溝が検出され、弥生時代前期の土器と縄文時代晚期の土器の供伴が認められた。第4次調査は南北に長い調査区で行われ、中央で堤間湿地が検出され、その北側では浜堤の一部が確認されている。浜堤上では弥生時代前期～古墳時代前期にかけての土坑やピットなどが検出され、集落域の存在が推測されている。

第5次調査以降は今回の第8次調査と同様、連続立体交差事業に伴う調査となる。鉄道高架橋建設の間の仮線路の築造に伴い、北側に側道が移設された。この側道へのライフルイン移設工事に伴う調査（北青木遺跡第5・6次調査）が平成18・20年度に実施された。

第5次調査では、調査範囲の西端の地点において土坑に埋納された銅鐸（扁平紐式四区袈裟縄文銅鐸）が出土した。複数回の埋納が想定され、銅鐸祭祀を考える上で良好な資料が得られた。また、東側に続く調査区にも浜堤が続き、胸部や底部に穿孔をもつ供献土器と考えられる弥生時代中期の土器や、弥生時代後期後半の壺棺墓2基などが検出された。第5次調査地東に続く第6次調査地でも、弥生時代前期の赤彩を施した広口壺が出土するなど、阪神電鉄本線が敷設された浜堤上には墓域や祭祀に係る遺構・遺物が多く存在するであろうことが予測された。



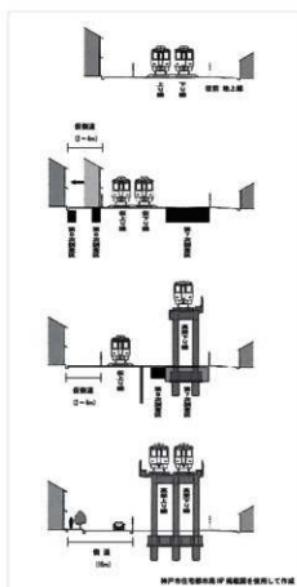
第4図 調査地及び既往調査位置図 Scale 1 : 5,000

連続立体交差事業の高架線橋脚部分本体の調査は、平成23年度に実施された第7次調査と今回の第8次調査が該当する（第5図）。

第7次調査は幅約6mの調査区35箇所の調査を行い、東西約650mにわたり、弥生時代中～後期、古代の遺構・遺物が確認され、広く遺跡の様相を知ることができた画期的な調査となった。また増田富士雄氏（同志社大学理工学部）による地質観察とそれに伴う助言は、遺跡の立地する浜堤の形成過程や堤間湿地と海水の流入による遺構面への影響など、北青木遺跡をはじめとする周辺遺跡の立地や分布、土地利用、環境の復元に大きく寄与するものとなった。

次数	調査年度	調査内容	文 献
1	昭和59年 1984	弥生時代前期 溝	1986 「北青木遺跡」 兵庫県教育委員会
2	昭和60年 1985		
3	平成3年 1991 中世：土坑 近世：水田		1994 「青木遺跡」平成3年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会（調査一覧に掲載のみ）
4	平成5年 1993 弥生前期～中期の溝・土坑・ピット		1999 「北青木遺跡第3次発掘調査報告書」 神戸市教育委員会
5	平成18年 2006 銅鐸埋納坑 弥生中・後期、古代の柱穴	2009 「北青木遺跡第5次調査」平成18年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会	
6	平成20年 2008 弥生前期～中期の溝 赤彩土器	2012 「北青木銅鐸」 神戸市教育委員会	
7	平成23年 2011 弥生中期～方形周溝墓 弥生後期の 円形周溝墓 奈良～平安の孤立柱建物	2014 「北青木遺跡第7次発掘調査報告書」 神戸市教育委員会	
8	平成28年 2016	本書	2018 「北青木遺跡第8次発掘調査報告書」 神戸市教育委員会

第1表 北青木遺跡既往調査一覧



第5図 高架工事の施工順序と発掘調査関係図



写真1 既往調査検出遺構と遺物

上2点：第5次調査 北青木銅鐸
左下：第6次調査 赤彩円形土器
右下：第7次調査 方形周溝墓 (B59-B 調査区)

第2節 第7次調査にみる調査地の様相

(1) 基本層と調査地の地質分類

第7次調査では、路線に沿って東西に長い調査区の特徴を活かして土層観察断面を設定し、堆積状況の把握が行われた。遺構面の調査終了後には下層の断割り調査を行い、増田氏により基盤層の形成過程に関する調査も行われた。調査区での遺構配置や基盤層の堆積状況によっては、南北方向の土層確認も行われた。調査地東西約650mの間の地質や地形に関するデータが得られたことは、遺跡の立地を考える上で非常に大きな成果であった。

調査地の現地表面はT.P.2.2~2.3mで、現地表面から約0.3~1.0mは阪神電鉄敷設時の造成土および搅乱土が堆積し、その下層は中世~近代にかけての暗褐色や黄褐色を呈する粘質土の耕作土が部分的に堆積する。耕作土上面の標高は、調査範囲西側のB47調査区からB57-A調査区ではT.P.1.3~1.9mを測り、B57-B調査区からB62調査区までの東側ではおよそT.P.1.0mとなる。東側ほど浜堤（砂丘）の基盤層となる砂層は低位に位置する。

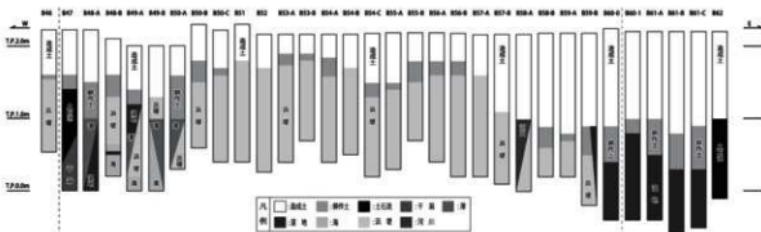
B59-B調査区からB62調査区の間では、耕作土の下で湿地堆積や土石流による堆積が検出され、湿地堆積層は暗灰色や黒褐色の粘質土で、植物遺体や生痕が確認されている。

これら湿地堆積のある調査区を除く、耕作土下層で遺構面となる浜提面を検出した調査区での、浜提面（遺構検出面）の標高は、B47調査区からB57-A調査区まではT.P.1.3~1.8m、B57-B調査区からB59-B調査区ではT.P.0.5~0.9mとなる。

B50-B調査区からB59-B調査区までは安定した浜堤面が続いている。黄灰（白）色中砂質の風性堆積で形成され、厚いところでは1.4mほどにもなる。B51調査区からB54-B調査区付近がもっとも標高が高く、同じ浜提面ではあるが、B57-B調査区からB59-B調査区にかけては徐々に低くなる様相が確認されている。

西側のB47調査区からB50-A調査区では、浜提面の一部とともに堤間湿地や海性堆積層（灰色から暗灰色砂混じり粘土）が入り組んだ状況が検出された。海水の作用を受けた濁の跡が確認されている。

第7次調査の結果より調査範囲における土地の性質は、I. 浜堤上ではあるが、濁など海の作用を受けるB47調査区からB50-A調査区、II. 安定した浜堤堆積のあるB50-B調査区からB59-A調査区、III. 海の作用を受けつつラグーンなど後背湿地の形成をみせるB59-B調査区からB60調査区以東という3地域に分類された。第8次調査地は隣接する調査地で、地質的には同じ状況である。また新たに調査を行ったB46調査区では上部砂層が検出された。



第6図 土層柱状図（第7次調査時のデータにB46調査区の検出範囲の状況を加えた）

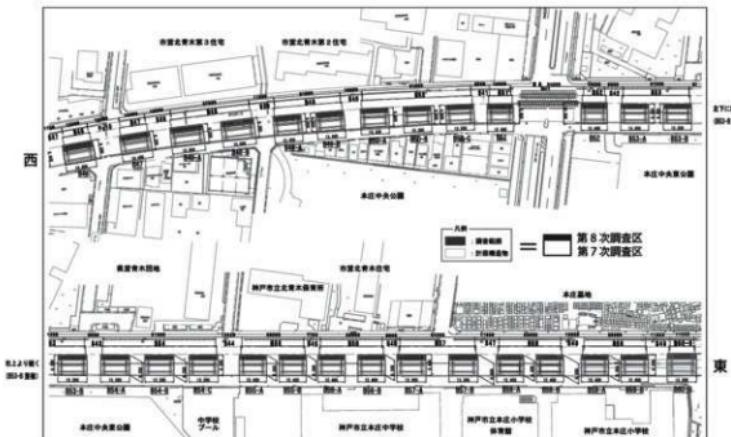
(2) 遺構分布の特徴、出土遺物の特色

第7次調査では、本庄小学校北側のB59-B調査区及び本庄中央公園西側のB47・B48-B調査区において弥生時代中期後半の方形周溝墓、本庄中央東公園北側のB51・B53-B調査区では弥生時代後期の円形周溝墓が検出された。B47調査区、B59-B調査区検出の方形周溝墓には複数の組合式木棺が良好に遺存し、弥生時代の墓制を考える上で貴重な資料を提供した。また本庄中央東公園北側のB52調査区では、底部や胴部を穿孔した弥生時代中期の土器が埋納された土坑が検出され、B54-B・C調査区などでも同様の遺構が確認された。周溝墓の検出という新たな発見とともに葬送を含めた祭祀空間の広がりが確認され、北青木遺跡の性格を追認する内容であった。また奈良～平安時代にかけての古代の遺構がB53～B58調査区で検出された。この範囲では弥生時代前期の穿孔土器などの出土も認められた。



写真2 第7次調査の状況

左上：調査地遠景
(B52付近より東方)
左下：現地説明会風景
中（上・下）：
B59-B調査区 方形周溝墓
右上：B59-B調査区
方形周溝墓出土土器



第7図 調査区配置図 (阪神電鉄提供図に記載加筆)

第2章 発掘調査の成果

第1節 第8次調査の概要

第8次調査の調査区は、第7次調査の調査区の北側に鋼矢板を挟んで隣接するもので、今回の調査区南辺鋼板は、前回調査区の北辺鋼板となる。従前の上り線部分で、平成27年12月12日の高架切り替え後に撤去された下り仮設線の位置にあたる（第5図）。

調査区の南北幅は2.5～3.0mほどで、第7次調査の調査区の1/2～1/3ほどの規模である。鋼板を打設する際の先行削孔により、遺構面が失われている部分も大きく、前回の調査で確認された土層の堆積状況を参考に掘削を行い、前回と異なる土層の堆積状況が確認された場合には必要な部分の記録作業を行った。

調査地点の呼称は前回に続き、工事に伴い橋脚に付けられた番号を使用した。また遺構番号は先の調査から引き継ぐものとし、検出面が異なる場合にもその内容から判断した。基本的には第7次調査の検出遺構面に準ずるが、今回の調査では第7次調査の第1遺構面に相当する遺構面がほとんど失われており、少量の出土遺物から判断した箇所もある。

第7次調査では、当初、B47調査区を最西端の調査区としていたが、方形周溝墓に伴う溝が検出され、西に隣接して確認トレンチを設定、溝を検出したことにより方形周溝墓の規模が判明した。このことから今回、さらに西側の工区での遺構の広がりを確認するため事業者の協力を得て試掘調査を実施した。その結果、B46橋脚部でも方形周溝墓の可能性のある溝を検出したことから、B46調査区として全面調査を実施するに至った。B46調査区以西の試掘調査の結果は、B45-C 橋脚部付近で近世の流路状の落ち込みを検出し、西側へ徐々に浜堤面が下がっていく様相を確認した。出土遺物ではなく、今回の事業範囲に限っては地形的に遺構面が形成される可能性が低くなるものと判断した。

試掘調査の結果と第7次調査の結果を踏まえ、今回調査対象となったのは27箇所の橋脚部である。第7次調査に比して4箇所減となったが、試掘調査により、西側で調査対象とする工区が1箇所増え、反対に東側の橋脚部、第7次調査において近世以降の湿地状の堆積が続く調査区5箇所で調査が不要と判断されたためである。

また新たに遺構面を検出した調査区での遺構番号の付与については、遺構面を表す3ケタの数字を当てるこなくシンプルに表現した（例：B46調査区は今回新たに掘削を行った西側の調査区であるが、検出面は1面で、検出した溝をSD01・02とした）。

調査は橋脚建設範囲に鋼板を打ち込み、その内側で実施した。掘削深度が規定より深くなる場合は支保工を設置して安全に努めた。残土・資材置場等を確保しながら、複数地点で並行して調査を行い、効率よく進めた。線路敷設時の造成土など、第1遺構面上層までをバックホーを使用して掘削、遺構検出及び掘削を人力で行なった。調査完了後は仮置きした残土を用い、細かい転圧作業を施しながら埋戻し、上面の整地作業を行った。

第7次調査に引き続き、神戸市教育委員会と事業者である阪神電気鉄道株式会社とで埋蔵文化財調査にかかる委託契約を締結した。また発掘調査の一部作業は、阪神電鉄株式会社と施工者となる特定建設工事共同企業体が作業にかかる契約を締結し、神戸市教育委員会が主体となる発掘調査に特定建設工事共同企業体が現地作業の一部を提供する形態となった。

平成28年度に現地調査（平成28年4月11日～8月9日の間実施）、平成29年度は神戸市埋蔵文化財センターにおいて出土土器・図面・写真の整理、金属製品・木製品の保存処理などの整理作業、出土品の分析を実施し、報告書の作成を行った。

第2節 第8次調査の成果

(1) 各調査区の検出遺構と遺物

27箇所の調査区について、検出遺構と出土遺物、第7次調査との関連性などを記す。

地区	面積(m ²)	面数	検出遺構・遺物	地質
B46	49.0	1	弥生 / 中期方形周溝墓・後期円形周溝墓	浜堤
B47	44.0	2	弥生中期 / 方形周溝墓（周溝・埋葬施設）	土石流・干潟
B48-A	48.9	2	弥生後期 / 落ち込み 古墳初頭 / 滝 中世？ / 耕作溝	湿地・滝
B48-B	49.6	2	弥生中期 / 方形周溝墓 古墳初頭 / 滝 平安 / 溝・ビット・耕作痕	浜堤
B49-A	44.2	1	古墳初頭 / 滝	浜堤・湿地・滝
B49-B	36.4	2	古墳初頭 / 滝 古代以降 / 耕作痕	浜堤・湿地・滝
B50-A	31.2	1	古墳初頭 / 滝	浜堤・滝
B50-B	28.6	2	古墳初頭？ / 土坑・ビット	浜堤
B50-C	32.5	1	弥生中期 / 方形周溝墓（周溝）	浜堤
B51	35.0	1	弥生中期 / 祭祀土坑	浜堤
B52	39.0	1	弥生中期 / 祭祀土坑 古代 / 溝・耕作痕	浜堤
B53-A	32.5	1	弥生中～後期 / 溝・土石流 奈良 / 溝・ウマ下顎骨	浜堤・土石流
B53-B	32.5	1	奈良～平安 / 土坑・ビット 近世 / 井戸	浜堤
B54-A	32.5	1	弥生？ / 溝 奈良～平安 / 土坑・ビット	浜堤
B54-B	32.5	1	弥生？ / 溝 奈良～平安 / ビット 近世 / 水溜め	浜堤
B54-C	32.5	1	奈良 / 溝・ビット	浜堤
B55-A	30.7	2	奈良～平安 / 土坑・ビット 中世 / 耕作溝 近世 / 水溜め	浜堤
B55-B	30.7	1	弥生前期 / 土坑 / 溝 奈良～平安 / 土坑・ビット	浜堤
B56-A	30.7	3	奈良～平安 / 土坑・ビット・炉床状遺構	浜堤
B56-B	30.7	1	古墳初頭 / 小型丸底窓 奈良～平安 / 土坑・ビット・井戸 近世 / 水溜め	浜堤
B57-A	39.0	2	奈良～平安 / 土坑・溝・ビット・焼土・炭化材	浜堤
B57-B	39.0	2	古代～中世 / 耕作溝 近世 / 耕作溝	浜堤
B58-A	30.5	1	中世 / 溝 近世 / 旧河道	浜堤
B58-B	30.5	2	弥生中期 / 土坑 奈良～平安 / 遺物包含層（洪水層）・井戸 中世 / 耕作痕	浜堤
B59-A	30.5	2	弥生中期？ / 溝状遺構 中世 / 耕作痕	浜堤
B59-B	30.5	1	奈良 / 井戸 中世 / 旧河道・潮汐痕	浜堤・湿地・滝
B60	36.4	1	近世 / 耕作痕	土石流・湿地

※ B47～B60の地質分類は第7次調査の分析結果（B46は掘削範囲の観察結果）／検出遺構・遺物欄は「時代」を省略

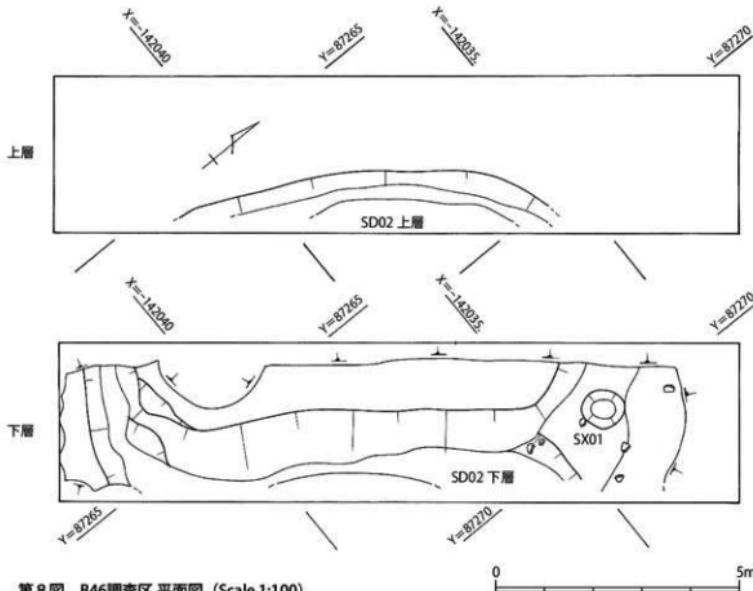
第2表 調査区一覧表

B46調査区

北側は厚さ0.3mの盛土層の下に厚さ0.1mの旧耕土層が残り、その下が浜提面である。耕土層下面で南北方向の溝SD01を検出したが、遺物は出土せず、時期は不明である。調査区南半は深さ0.6mほどが攪乱され、その下の浜提砂面で溝SD02を検出した。

SD02は最大検出幅約3.0mで、全般に暗灰褐色を基調とする細～極細砂が堆積していた。この砂の堆積はコの字状に東西の両端で北側に折れて延びており、形状から方形周溝墓を形成する溝と考えられる。ただ、最終埋土と考えた調査区の南寄りに堆積する黒灰色、暗褐色を呈する砂及び砂質土から弥生時代後期の土器が小片ではあるがまとまって出土しており、ごくわずかに古墳時代初頭頃の土器片も混じる。この堆積層を平面的にみた場合、南側に弧を描いており、検出状況からは方形周溝墓の埋没後に円形周溝墓を形成する溝を掘り込んだ痕跡と考えている。円形に巡る堆積層の深さは約0.5mで、今回の調査区内での検出長は東西約7.0mを測る。

方形周溝墓東辺の一部では、埋土中から赤色チャートの細かい破片の出土が目立った。中央部SX01付近と、埋土のうち墳丘に沿って比較的早い段階に堆積した黒灰色砂層の埋土からの出土が顕著で、墳丘上あるいは溝底に撒かれた可能性が考えられる。SX01は溝底で径0.8mの平面円形の浅い窪みとなり、小礫混じりの黒灰褐色砂質土が堆積する。周辺では搬入礫と考えられる拳大の礫が複数出土した。溝の下層埋土からの出土遺物は少量で、弥生時代中期の壺の底部と考えられる土器が出土した。



第8図 B46調査区 平面図 (Scale 1:100)

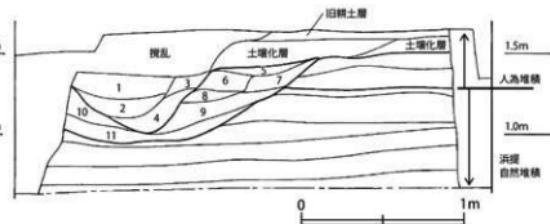
上段：上層・円形周溝墓と考える溝埋土の検出範囲
下段：下層・方形周溝墓

調査の結果、SD02は弥生時代中期後半頃に構築された方形周溝墓で、溝の埋没後、南辺の一部を切り込んで新たに円形周溝墓が構築された状況を検出したものと推測する。

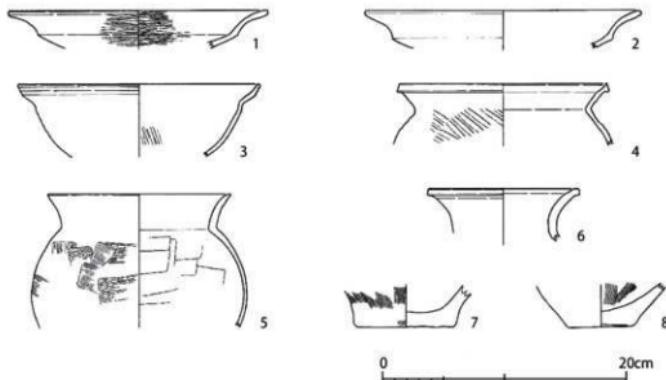
調査の最終段階で調査区の北端をトレンチで断ち割り、標高0.0m付近まで掘削したが、埋葬施設などは確認していない。浜堤を形成する自然堆積の上に、人為的に盛られた可能性のある砂が少なくとも0.4mの厚さで、3層に分層が可能な状況で堆積していた（増田氏の教示による）。方形周溝墓の墳丘部になる可能性のある砂層からは遺物の出土もなく、墳丘盛土であつたとしても、堆積した時期などは不明である。今回検出した下層の方形周溝墓の墳丘裾間の長さは東西約9.7mで、周溝の幅は東辺で最大幅約3.0mを測り、西辺下層の最深部で幅約1.0m、深さは約0.8mである。

出土遺物は南側、暗褐色系の埋土からの出土が多い。1～5が円形周溝墓、6～8が方形周溝墓からの出土である。1・2は高環の口縁部、3は鉢で、復元径はいずれも25cmほどである。4の甕には右下がりのタタキが施される。6は直口壺の口縁部、5の甕の外面はハケ、内面は板状工具によるナデ調整である。1～4は弥生時代後期、5は古墳時代初頭頃に属するものであろう。溝埋土下層出土の6は直口壺の口縁部、7・8は壺の底部と考えられ、弥生時代中期の所産と考えている。

1. 暗灰褐色細～極細砂
2. 黒灰褐色シルト混細～極細砂
3. 暗褐色極細砂
4. 淡黒灰褐色細～極細砂
5. 淡黄褐色砂質土
6. 茶褐色細～極細砂
7. 暗灰褐色砂質土
8. 暗灰褐色細～極細砂
9. 淡黒灰色細～極細砂
10. 淡褐色細～極細砂
11. 淡黑茶褐色細～極細砂



第9図 B46調査区 SD02南辺中央部 断面図 (Scale 1:30)



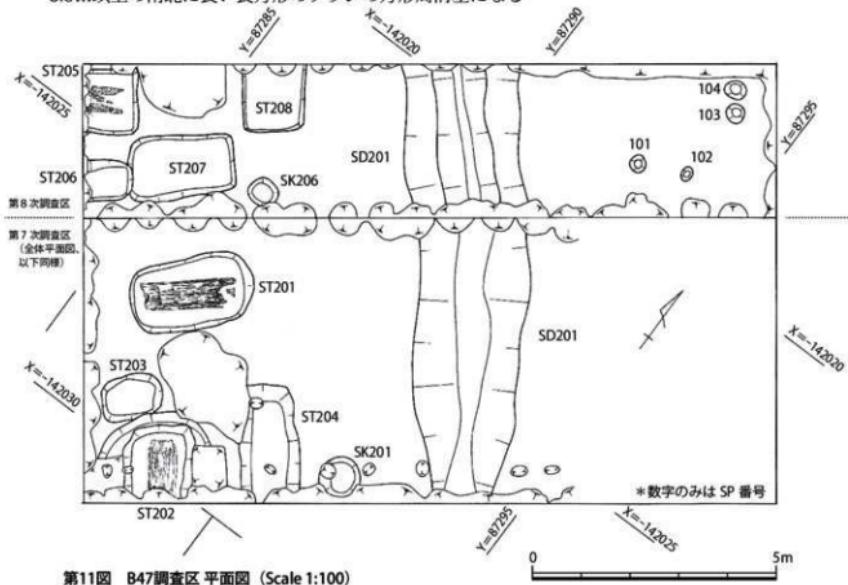
第10図 B46調査区 SD02出土土器 (Scale 1:4)

B47調査区

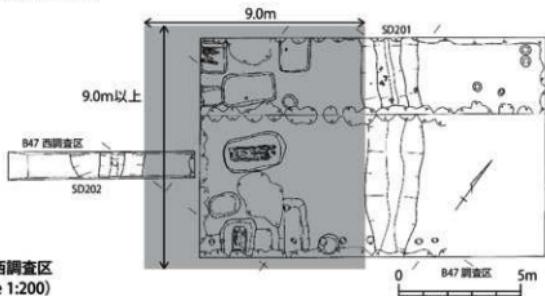
第7次調査において方形周溝墓が確認された調査区の北側に位置する。前回の調査では4基の埋葬施設と周溝墓の東の区画溝であるSD201が検出され、西側の確認トレンチでは西の区画溝SD202が検出されていた。

今回の調査区の中央で第7次調査区から続く溝SD201を検出した。このSD201を境に、西側は浜堤堆積、東側には土石流による粗砂礫層が堆積する。方形周溝墓は浜堤面から湿地へと下がり地形となる際の部分に構築されている。土石流の上面と上層耕土層面でピットを数基検出したが、出土遺物はなく明確な時期は不明である。

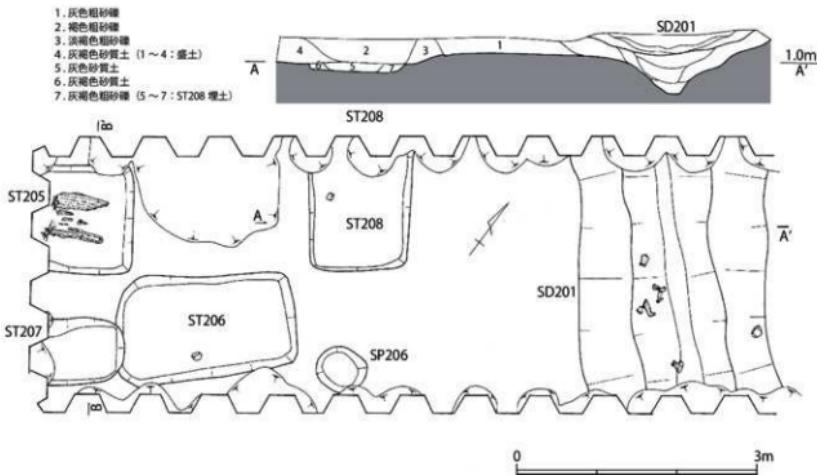
方形周溝墓の規模は、第7次調査時のトレンチ調査によって検出面墳丘裾の東西規模が9.0mと判明していた。今回の調査では北側の溝は検出されず、埋葬施設の検出状況からも南北長9.0m以上の南北に長い長方形のプランの方形周溝墓になる。



第11図 B47調査区 平面図 (Scale 1:100)



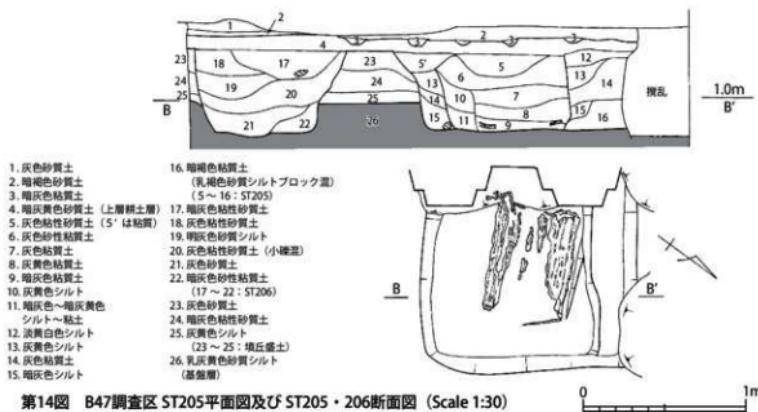
第12図 B47調査区・B47西調査区
全体平面図 (Scale 1:200)



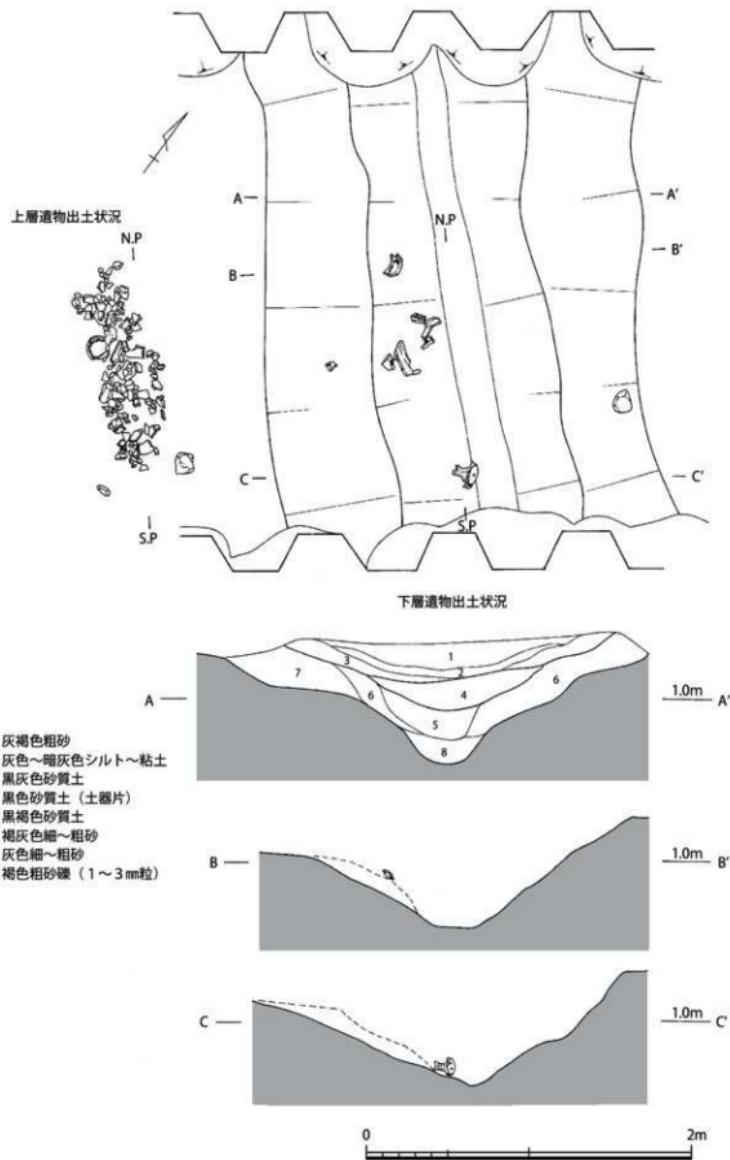
第13図 B47調査区 方形周溝墓 平・断面図 (Scale 1:60)

今回の調査範囲では4基の埋葬施設を確認した。埋葬施設の規模は、第7次調査で全体の様子がつかめるST201・203を参考にすると、ST205・206・208はST201と、ST207はST203と同規模と考えられ、前者が成人用、後者が小児用に区別可能と推定される。

木棺材が出土したST205の墓坑の幅は約1.3mで、木棺底板材の幅は0.55mであった。ST206とST207で切り合いを確認し、小児棺が成人用棺を切り込む状況を確認したが、第7次調査では小児棺と推測されるST203が成人用棺ST202に切られる。墳丘盛土が判然とせず、土坑底レベルにも大きな差はない。同一面での切り合いであるかは不明である。



第14図 B47調査区 ST205平面図及びST205・206断面図 (Scale 1:30)



第15図 B47調査区 SD201平・断面図 (Scale1:30)

SD201は幅約2.4m、深さ0.7～0.8mで南側にやや深くなる。溝の上層埋土である黒色砂質土の堆積から弥生時代後期の土器が細片となって出土し、漏斗状となった断面形状の中位～下位に堆積する粗砂中からは、弥生時代中期後半の複合土器（鉢と器台状部）1個体分が出土した。

周溝埋土中位～下位出土の9は口径19.0cm、復元高23.0cmを測り、鉢に器台状の脚部が結合した土器（複合土器）である。比較的早い段階で墳丘から落ち込み、破損したものと推測される。口縁端部の肥厚面外側に円形浮文をめぐらせ、鉢の内面に丁寧なヘラミガキを施す。鉢からの垂下部になった箇所に4条の凹線をめぐらせ、4条1単位の棒状浮文を付す。器台状脚部も丁寧にヘラミガキが施され、6条のヘラ描沈線を2段めぐらせる。脚部の透かしは4箇所であるが、内面には一度穿孔した後に塞いだ痕跡が1箇所と、もう1箇所穿孔をしかけた凹みが認められる。4孔の配置を誤ったか、あるいは6孔にしようとした痕跡かもしれない。弥生時代中期後半に属する土器である。

10・11は埋土上方より出土した甕である。ともに細かく破碎された状態で出土した。

10は口径14.0cm、器高27.0cmで、右上がりのタタキ成形である。11の内面はハケによる調整痕が顕著である。前回の調査では下層からの出土遺物に乏しく、方形周溝墓の構築時期が不明瞭であったが、中期末葉に近い時期の構築の可能性が高くなかった。

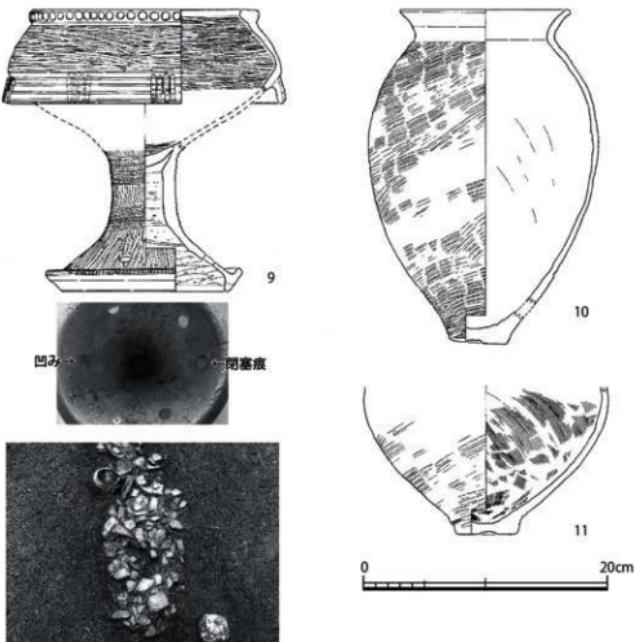


写真3 B47調査区 SD201出土遺物
上：土器9の脚部穿孔の閉塞状況
下：上層遺物出土状況

第16図 B47調査区 SD201出土土器 (Scale 1:4)

溝SD201の西側で4基の埋葬施設を検出した。ST205にのみコウヤマキを使用した木棺材が遺存し、その他の埋葬施設には木質は遺存せず、土層観察でも棺を据えた痕跡は確認しておらず、土坑墓であったと考えられる。

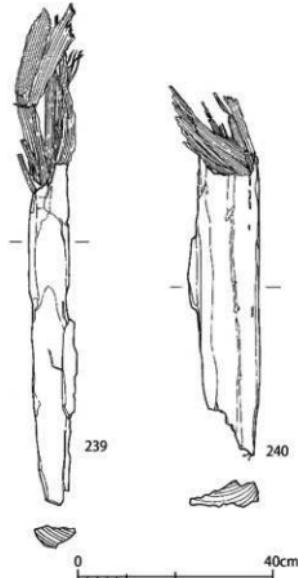
木棺墓 ST205からは底板材のみが出土したが、板材中央の腐植が進み、南北の縁部のみが残った状態であった。西側は鋼矢板打設の際の先行削孔で大きく破損しており、破損部を除く残存長は南片の遺存部が68cm、北片の遺存部が48cm、最大厚は北片中央で4cmであった。

第7次調査で検出された木棺墓はいずれも底板の小口に溝を設けて(小口)板を立てる型式(福永分類のII類—第3表引用文献参照)であったが、今回検出の木棺材はこれを検証するに足る状況ではなく、細部については不詳である。



写真4 B47調査区 ST205木棺材 検出状況

第17図 B47調査区 ST205木棺材 (Scale 1:10)



調査区	埋葬施設		時期	墓坑規模(cm)		棺規模(cm)		棺形式	棺材		調査次数
				長さ	幅	長さ	幅		北側板 南側板 東小口板 西小口板 底板	コウヤマキ コウヤマキ コウヤマキ コウヤマキ コウヤマキ	
B47	ST201	木棺墓	IV	253	145	173	48	II型	—	—	第7次調査
	ST202	木棺墓	IV	150	138	140	47	II型?	底板	コウヤマキ	
	ST203	木棺墓?	IV	130	170	100	65	不明	—	—	
	ST204	土坑墓	IV	220	118	—	—	—	—	—	
	ST205	木棺墓	IV	(125)	130	(110)	55	不明	底板(北片) 底板(南片)	コウヤマキ コウヤマキ	第8次調査
	ST206	土坑墓	IV	(100)	80	—	—	—	—	—	
	ST207	土坑墓	IV	220	120	—	—	—	—	—	
	ST208	土坑墓	IV	(160)	130	—	—	—	—	—	

*時期は周溝出土土器による判断

第3表 B47調査区検出 埋葬施設一覧 (第7・8次調査)

*型式は福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号通巻125号 1985による

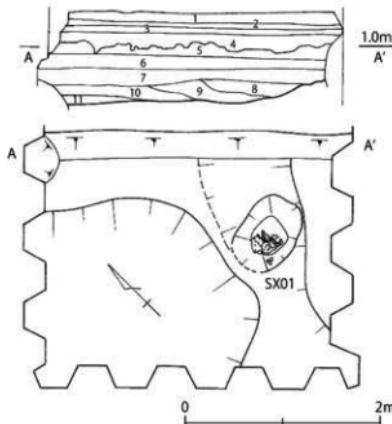
B48-A 調査区

盛土層下に灰色～暗灰色を呈するシルト～粘土層の堆積が続き、第7次調査ほど顕著ではなかったが、マンガンの沈着が顕著な最上層の暗灰色シルト層上で、東西方向の耕作痕を検出した。基本的に耕作地での土地利用が想定されるが、下層の堆積ほど粘性が強く、永く湿地状の堆積が続いていたものと判断される。

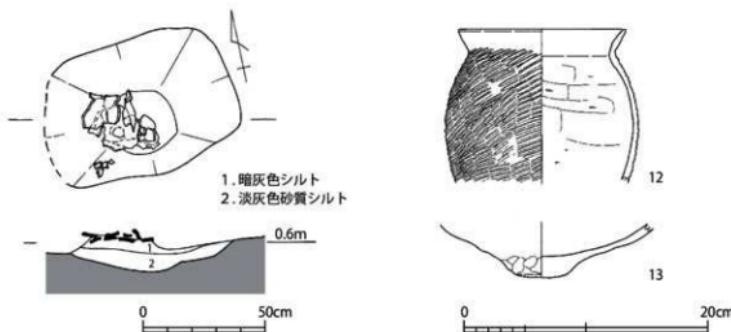
影響深度までの下層確認を調査区の東西端と中央で行った。西端トレーニチのT.P.0.2m付近の南西側で、浜堤面への砂層の立ち上がりを確認した。砂とシルト層との境の部分がSX01とした浅い窪みとなり、この落ち込みから弥生時代後期に属する土器が出土した。

12は口径14.0cm、残存高13.0cmの甕で、右上がりのタタキ調整を施す。13は大型の壺の底部と考えられ、丸底から外側に大きく開く体部の胴付近は球形を呈するかもしれない。

1. 灰黄色砂質土
2. 褐色砂質土
3. 暗灰色粘質土（マンガン）
4. 褐灰色砂質土（固い）
5. 暗灰色シルト
6. 淡灰色シルト
7. 灰色シルト（少し灰色砂ラミナ）
8. 暗灰色シルト（土器落ち込み）
9. 灰色シルト（灰色砂礫の筋）
10. 灰色シルト
11. 灰色極細砂～細砂



第18図 B48-A 調査区西トレーニチ
平・断面図 (Scale 1:50)



第19図 B48-A 調査区 SX01平・断面図 (Scale 1:20)

第20図 B48-A 調査区 SX01出土土器 (Scale 1:4)

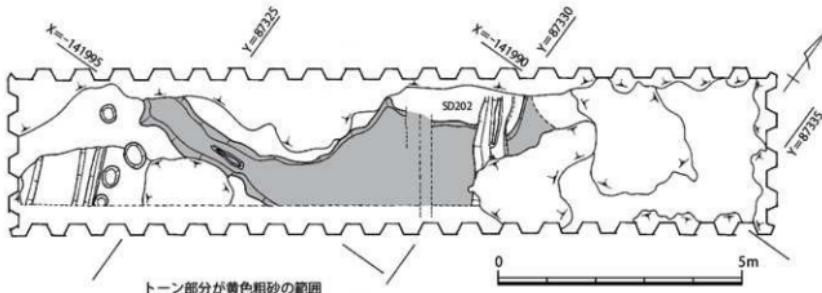
B48-B 調査区

調査区の南西部及び東端に耕土層が堆積し、南西部の耕土層下面で鏽溝3条とピット4基を検出、調査区の中央で第7次調査区から続くSD202を検出した。SD202からは図化はできなかつたが、12世紀代の白磁碗口縁の小片が出土した。耕土層からは同時期の須恵器片が出土しており、平安時代末頃の耕作痕であろう。

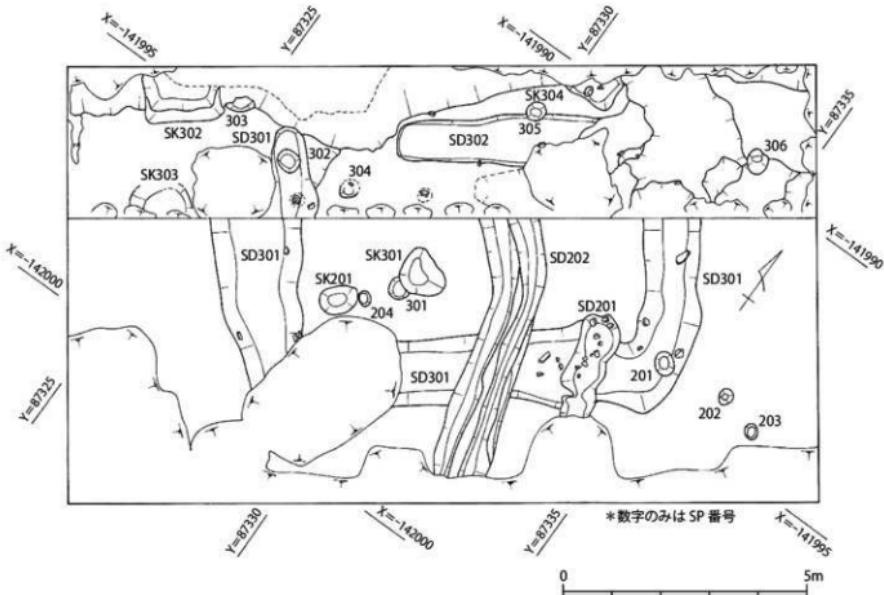
SD202検出面は調査区の全域で鉄分による橙色化が顕著で、水に浸った状態であったと推測される。中央に黄色粗砂が堆積し、北側にかけて粘質の強い湿地状の堆積である灰色、暗灰色シルト～粘土層が厚く堆積していた。第7次調査の段階ではこれらの堆積は全く検出されず、調査区を境に様相が異なる。今回の調査区の東西両端の南辺に沿ってわずかに浜堤の砂面を検出したが、他の調査区に比べると砂面も軟弱である。黄色粗砂の堆積は北西～南東～東に弧を描いており、溝筋を表しているものと推測する。規模は明らかでないが、北側に湿地状堆積が広がるのであろう（第21図）。

第7次調査で方形周溝墓と考えられた溝SD301はコの字に西辺、南辺、東辺が検出されていたが、今回の調査区では攪乱や濬により、西辺の延長部がわずかに確認できたのみである。溝の最上層に堆積する灰色細砂からは口径12.0cm、残存高7.0cmの壺の口縁部14が出土した。SD301下層からは弥生時代中期と考えられる壺の底部15が出土、第7次調査では少量ながら弥生時代後期の土器片が出土している。14は古墳時代初頭のもので、この時期まで溝が窪みになっていた可能性が想定される。墓に伴う溝として認識され、機能していたかは明らかでない。第7次調査でも細片の土器しか出土しておらず、弥生時代中期あるいは後期に築造されたものか、詳細は明らかでない。

また調査区の中央で長さ4.0m、幅1.0mの溝SD302を検出し、当初は方形周溝墓の北辺になるものと考えたが、この復元では墳丘部の南北長約4.0m、東西は8.0mとなり、周辺で検出される方形周溝墓からするとやや規模が小さくなる。SD302は非常に浅く、濬の影響が大きい。位置的には埋葬施設となる可能性もある。このほか、溝筋に削平されながらも残った弥生時代中期の壺の口縁部・底部が出土したSK303などは土坑墓や祭祀土坑などの可能性も考えられる。

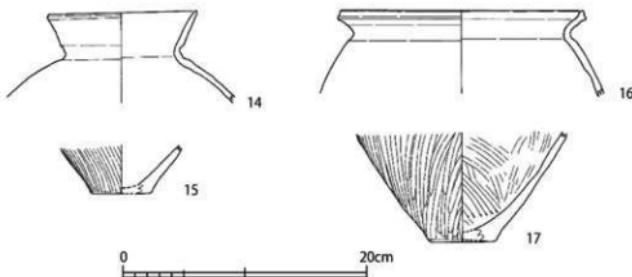
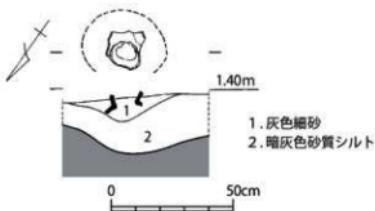


第21図 B48-B 調査区 濬最終埋土検出状況平面図 (Scale 1:100)



第22図 B48-B 調査区 平面図 (Scale 1:100)

第23図 B48-B 調査区 SD301 遺物出土状況
平・断面図 (Scale 1:20)

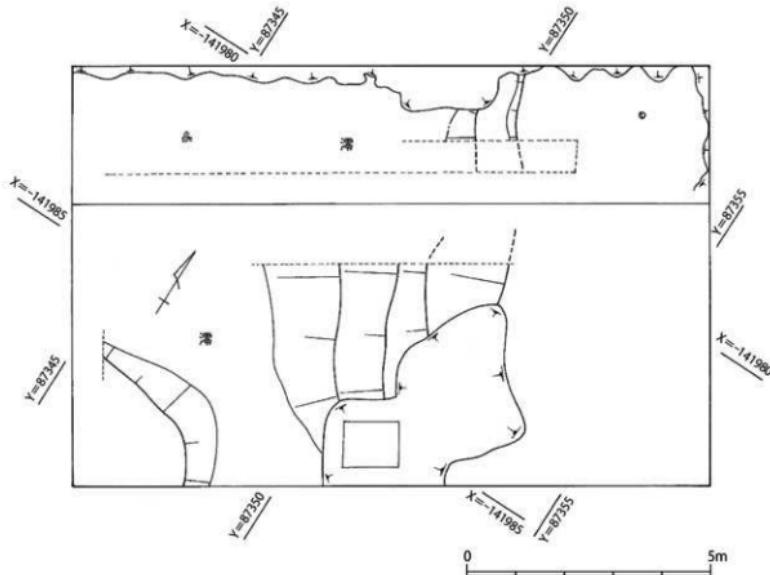


第24図 B48-B 調査区 出土土器 (Scale 1:4) 14・15・SD301 16・17・SK303

B49-A 調査区

盛土層の下で第7次調査第2遺構面と同様、東端で浜提面、西側で湿地状の堆積を確認した。今回の調査では湿地状堆積から弥生土器の破片が少量出土しているのみであったが、第7次調査では弥生時代後期～古墳時代後期までの遺物が出土しており、東の浜提際からは弥生時代後期～末にかけての土器が出土したほか、鳥形木製品の出土が特筆される。

湿地状堆積や溝の形成時期について、粘土堆積に含まれる植物遺体、炭化物を採集して放射性炭素年代測定を実施した結果、海性の粘土層の堆積は弥生時代末～古墳時代初頭頃の年代値が示された。第7次調査での浜提際における同時期の出土遺物がこれを肯定するものと考えている。隣接する調査区にも同様の湿地状堆積が広がり、これらの調査区でも弥生時代末～古墳時代初頭にかけての遺物、遺構が散見される。



第25図 B49-A 調査区 平面図 (Scale 1:100)

B49-B 調査区

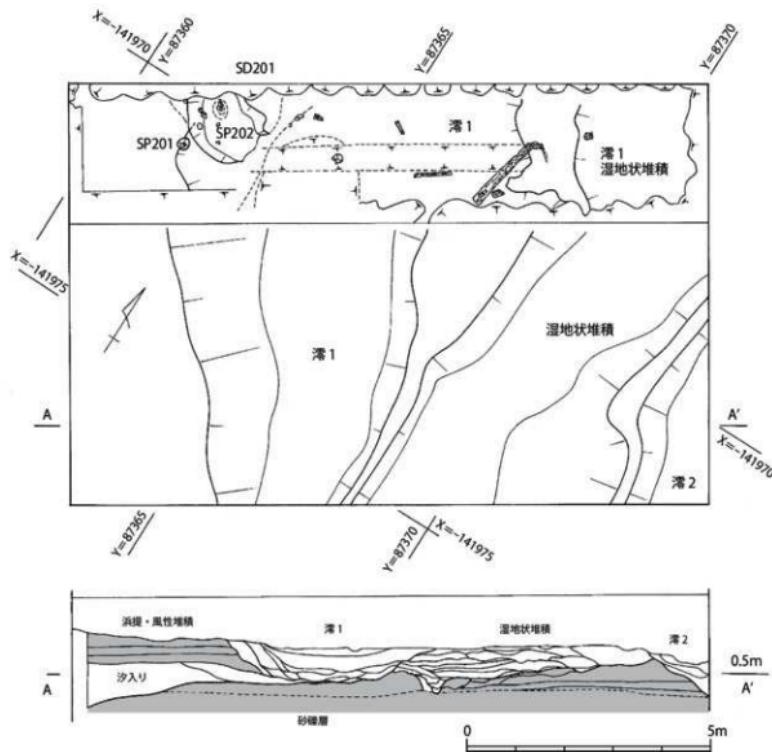
第7次調査では盛土層下で湿地状の堆積となつたが、今回の調査区では耕土層を確認し、その下面で耕作痕を4条検出した。幅0.15～0.4m、深さ0.2～0.6mで、南北方向の溝の規模が概して大きい。出土遺物はほとんどないが、鎌倉時代以降の耕作痕と考えられる。

耕作痕を検出したベース層を除去した後の第2遺構面は、西端で浜提面となり、東半の大部分は第7次調査と同様に溝筋や湿地状堆積となる。浜提面で溝1条、ピット2基を検出したがこれらの遺構の南側は溝筋により削られていた。

SD201は幅1.2～1.3m、検出面からの深さ0.25mを測る。北西から延び、東へやや屈曲する。弥生時代中期頃と考えられる土器片が出土したが、図示できるものはない。黒灰色砂質土の埋土や屈曲する形状から、方形周溝墓に伴う溝の可能性も考えられるが明らかではない。ピットの平面形は、SP201が径0.25mの円形、SP202は長径0.4mの橢円形で、検出面からの深さはそれぞれ0.07m、0.15mと浅いものである。出土土器は小片で、詳細は不明である。

第7次調査地から続く湿地状堆積からは古墳時代初頭の甕18が出土しており、その西側の溝堆積からは貫穴が削られたクリ材の243、直柄鍬で一部が面取りされた241のほか、イヌガヤ材の杭242などが出土した。第7次調査では溝1の南端で土器片や木片に混じり直径3～4cm、長さ6～9cmの管状土錐がまとまって出土していた。第7次調査の溝の堆積からも18と同時期の甕が出土しており、弥生時代末～古墳時代初頭頃には海水の流入で繰り返し溝筋が形成され、部分的に風性堆積が繰り返されたものと捉えられる。

隣接する調査区での放射性炭素分析の結果や土壤の堆積状況、共伴する出土遺物などから、ここでの出土遺物はいずれも古墳時代初頭頃の年代をあてることができよう。



第26図 B49-B 調査区 平・断面図 (Scale1:100)

断面図は第7次調査時のものを反転、再トレース



写真5 木材243の加工痕

加工痕拓影（右は筋跡を加筆、強調表現したものの）(Scale 1:4)

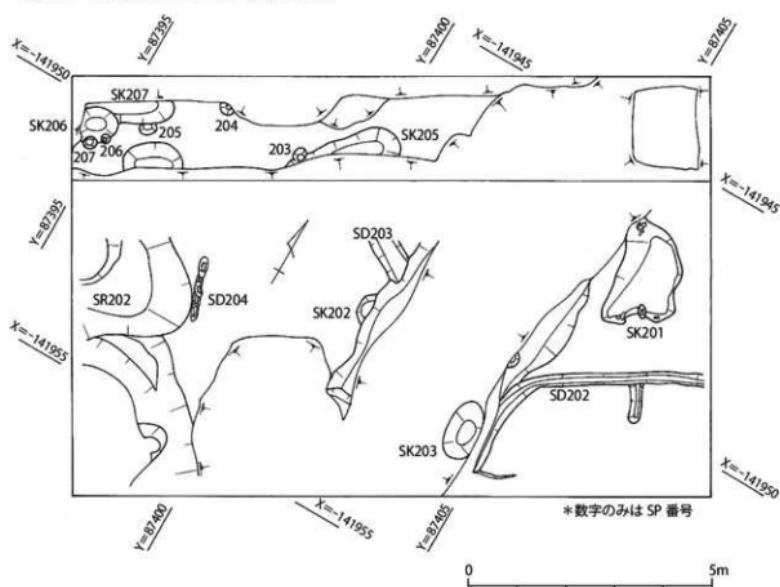
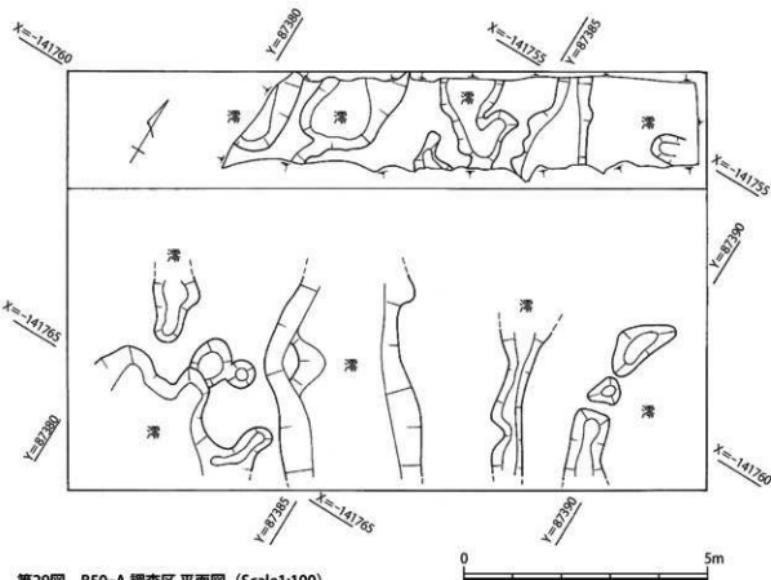
第28図 B49-B 調査区出土木製品 (Scale 1:8+1:10)

クリ製の半割丸太材の243には、一辺8cmの貫穴の上方に表面を平滑にした痕跡が残る。円弧状の筋は斬（チョウナ）様の工具で水平方向に斬った際に生じた痕跡と考えられ、拡大観察の結果、梢側から幹側に刃先を入れて加工を行った状況が見て取れた。

復元される工具の刃幅は15cm弱で、鋭角な弧状形態の刃先のものと推測されるが、同時代の同様の工具類は今のところ確認できていない。

B50-A 調査区

第7次調査で検出された耕作痕の残る耕土層下の面は失われ、盛土層下で浜提面となつた。砂面で第7次調査と同じく溝状や土坑状の粘土質の堆積を検出したが、溝筋の影響で堆積した落ち込みからは須恵器、土師器の小片が出土したのみで、前回の調査で出土した箸状のものや、皿、板材、杭などの木製品は今回出土していない。



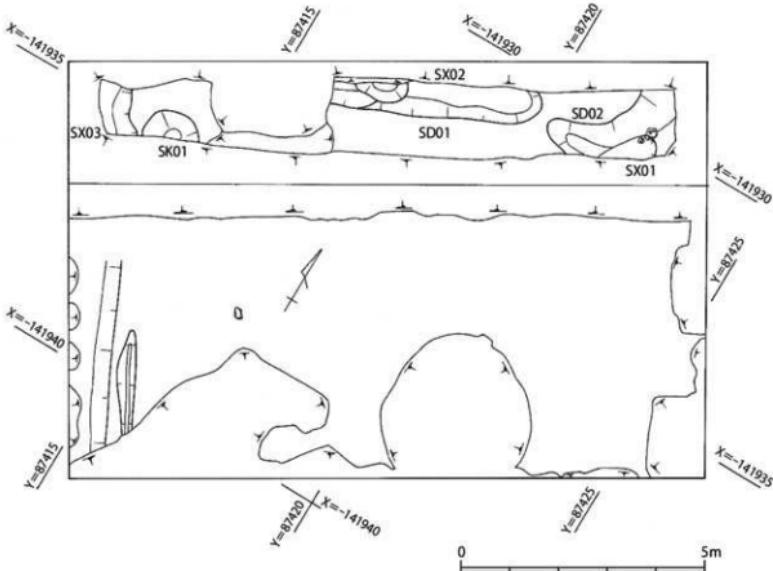
B50-B 調査区

第7次調査で検出されていた耕作痕を検出した面は削平により確認されず、第2遺構面とする浜提面も東半は攪乱によりほとんど失われる。西半で土坑4基、ピット6基を検出した。土坑は長径1.25～2.75mの平面橢円形と考えられ、深さは0.2～0.3m、攪乱の影響もあり、全体の規模が不明なものが多い。SK204・205から土師器の小片が出土した。第7次調査でも不定形な平面プランの土坑が検出されていたが、SK201からは弥生時代中期の台付壺が出土していた。ピットは径0.3～0.6m、深さは0.15mほどの浅いものばかりで、遺物の出土もない。同一面で時期の異なる遺構が検出されたものと考えられる。

B50-C 調査区

第7次調査では耕土層と耕作痕がわずかに検出されたのみで、直下の浜提面では遺構、遺物は全く確認されず、かなり削平を受けた状況と推測されていた。今回の調査区も基本的には盛土層の直下で浜提面となったが、この浜提面で溝2条、土坑1基を検出した。

SD01は東西方向に延びる溝で、北側に広がるものと考えられ、幅は0.6m程度であろう。深さは現状で約0.4mを測る。溝の西側は攪乱を受け、東側はSD02と近接し終わっている。今回の調査区での検出長は約4.3mである。埋土は上層に暗灰褐色砂質土、下層に暗灰茶褐色砂質土、淡茶灰褐色砂質土が堆積する。ほぼ中間レベルとなる暗灰茶褐色砂質土面で弥生時代中期後半の甕が破碎されたと考えられる状況で出土した。

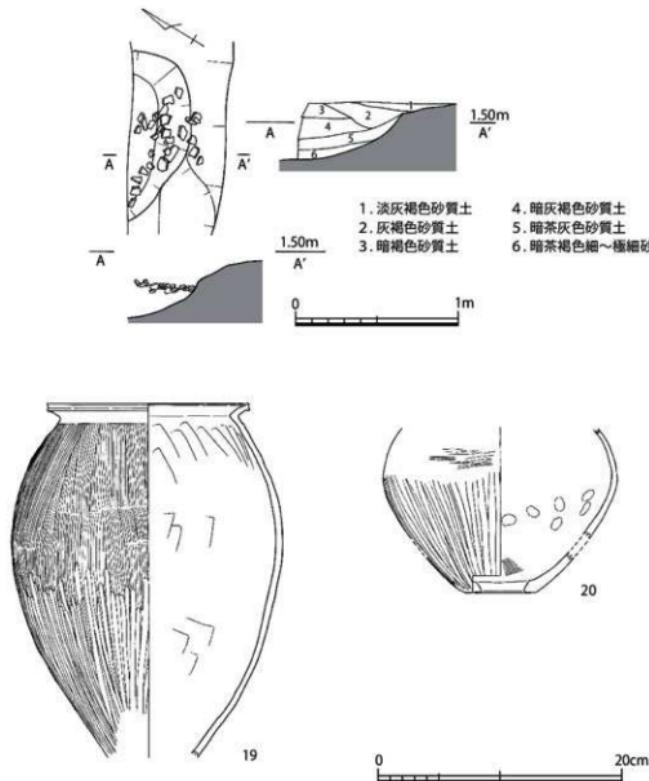


第31図 B50-C 調査区 平面図 (Scale 1:100)

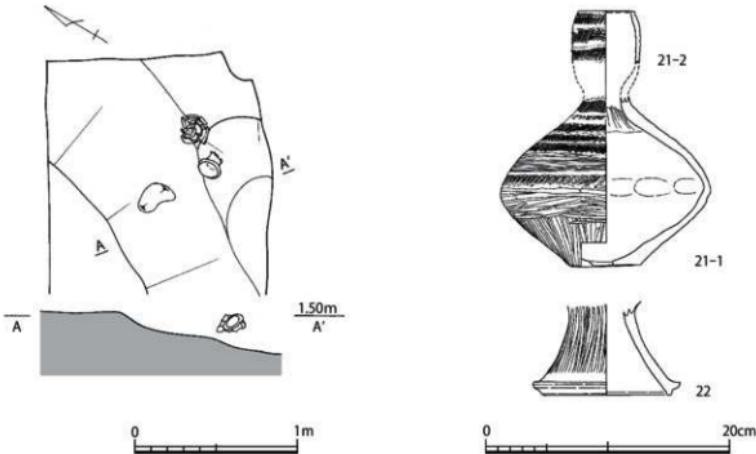
SD02は調査区の東端で検出した溝で、SD01に接し、北側に屈曲して調査区外に延びる。幅は1.2m以上で、検出面からの深さは約0.3mである。埋土は上層に暗褐色砂質土が堆積し、下層に暗灰褐色砂質土が堆積する。下層埋土の上面付近から弥生時代中期後半の細頸壺と台付壺の脚部が出土した。SD01・02で方形周溝墓が形成されるのであろう。

SD01出土土器の20は壺で底部に穿孔がある。胴部径20.0cm、残存高14.0cm、外面はケズリ調整の痕跡が顕著である。19は残存高28.0cmの壺で、口縁部は強く外側に屈曲する。

SD02出土土器の21-1は加飾性の高い細頸壺で、21-2が口縁部となり、器高23.0cmほどに復元できる。体部はそろばん玉形に胴部中央が強く張り出し、胴部下方1/3は底部から縦方向のミガキ、上部2/3は横方向の丁寧なミガキ調整の後に簾状文（斜位主体）、波状文、直線文の櫛描文を施す。底部穿孔され、底部の外面に板ナデ痕が残る。器表の一部に赤みの濃い部分があり、顔料の塗布を推測したが、顕微鏡観察の結果、顔料の使用は確認できなかった。



第32図 50-C 調査区 SD01 平・断面図 (Scale 1:30) 及び出土土器 (Scale 1:4)



第33図 B50-C 調査区 SX01 平・断面図 (Scale 1:30) 及び出土土器 (Scale 1:4)

B51調査区

今回の調査区では、第7次調査における第1遺構面（耕作溝の検出）は削平などにより確認されず、第2遺構面ないし第3遺構面とされた弥生時代の浜堤面の遺構面1面を検出した。検出遺構は溝1条、土坑2基、溝状の落ち込み1基、ピット3基である。検出レベルから第3遺構面検出遺構の300番台の遺構番号を付しているが、内容的には第7次調査第2遺構面検出遺構と関連するものがほとんどであろう。

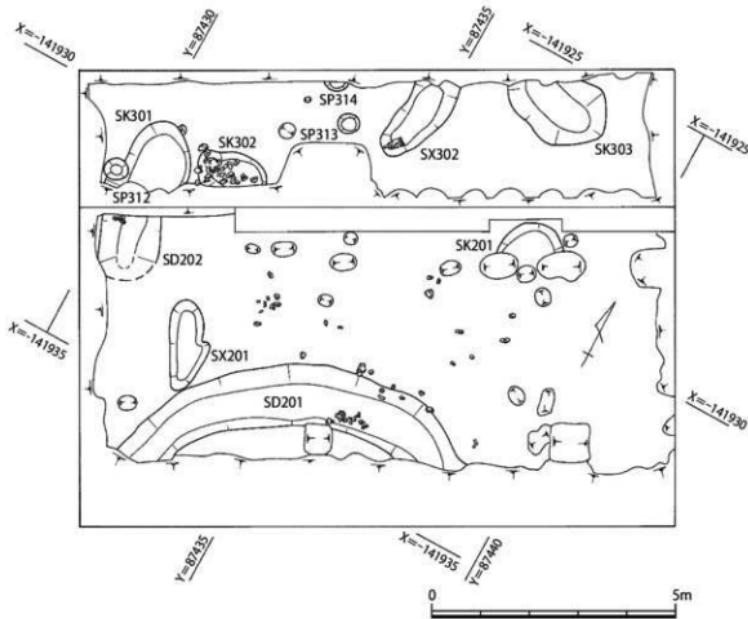
SK302は長径1.35m、短径0.8m以上の平面楕円形の土坑で、検出面からの深さは約0.5mである。掘形内に10~15cm大の礫を多く含み、西端付近で壺23が1点、横位で出土した。

23は口径13.0cm、器高30.0cmで、口縁部に3条の凹線をめぐらす。胴部下半はヘラミガキで調整するが、その他の部分は粗いハケ調整である。底部を穿孔する。

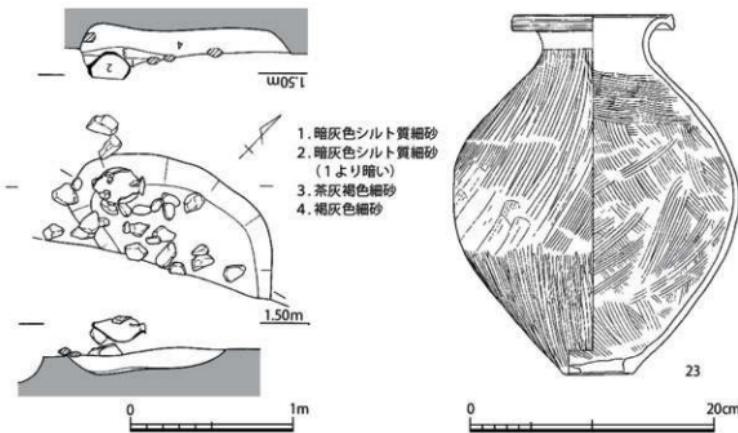
SX302は南北方向に舌状に延びる平面長楕円形の落ち込みで、検出長2.0m、幅0.95m前後を測り、検出面からの深さは0.4mである。南端で完形の甕24が1点、横位で出土した。

SK302・SX302からの出土遺物はともに弥生時代中期後半（IV様式）に属するものである。

第7次調査では第2遺構面において円形周溝墓と考えられる溝SD201や、同じく周溝墓の溝の可能性のあるSD202が検出されていた。SD201からは弥生時代後期の土器が、SD202からは弥生時代中期の櫛描文を多用した長胴形の特異な土器が出土していた。SD202は第8次調査ではSK301として続きの部分を検出した。形態的には長辺3.4mの平面長楕円形の土坑に復元できる。先に周溝墓と想定されたように、溝の深い部分が残っている可能性も否定はできないが、北東側に位置するSX302・SK303などとともに、土抗が集中する箇所であったものと考えられ、これらが関連することが想定される。

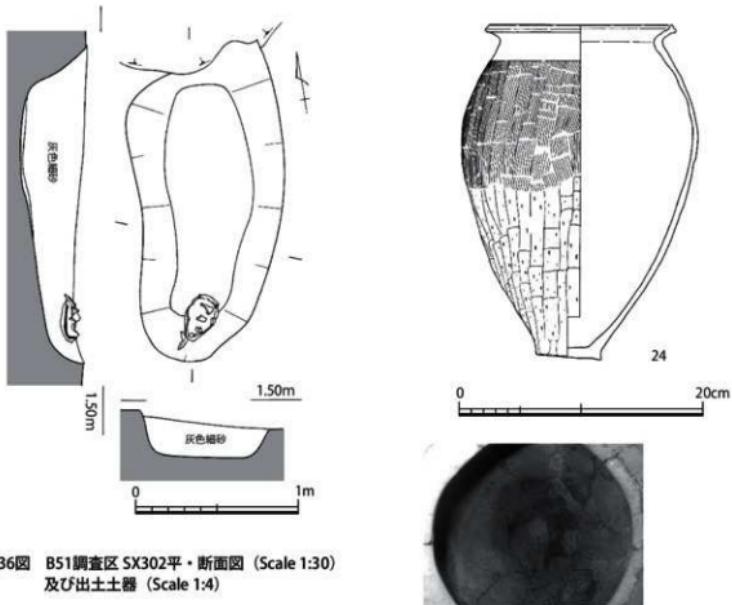


第34図 B51調査区 平面図 (Scale 1:100)



第35図 B51調査区 SK302平・断面図 (Scale 1:30) 及び出土土器 (Scale 1:4)

SX302出土の甕24は口径16.0cm、器高27.5cmを測る。体部外面の上半は細かいハケ調整、下半は粗い削り成形である。うすい煤の付いた器表には、頸部から胴部中ほどにかけて、筋状の吹き零れの痕跡が顕著に残っている。煤の付着状況、内面のコゲの状況などから、甕の使用は1回ないし2回程度の使用頻度と想像される。既往の調査を含め、周辺では弥生時代中期に属する竪穴建物をはじめとする居住域に伴う遺構の検出はなく、日常の調理に伴う煮炊きが行われたとは考えられないが、調査区内、土器の出土位置近辺での火の使用痕は認められず、居住域から持ち込まれた土器の可能性があり得る。



第36図 B51調査区 SX302平・断面図 (Scale 1:30)
及び出土土器 (Scale 1:4)



写真6 B51調査区 SX302遺物出土状況（近景）
(南東から)



写真7 土器24 外面吹き零れ痕（下）と
内面コゲ痕（上）

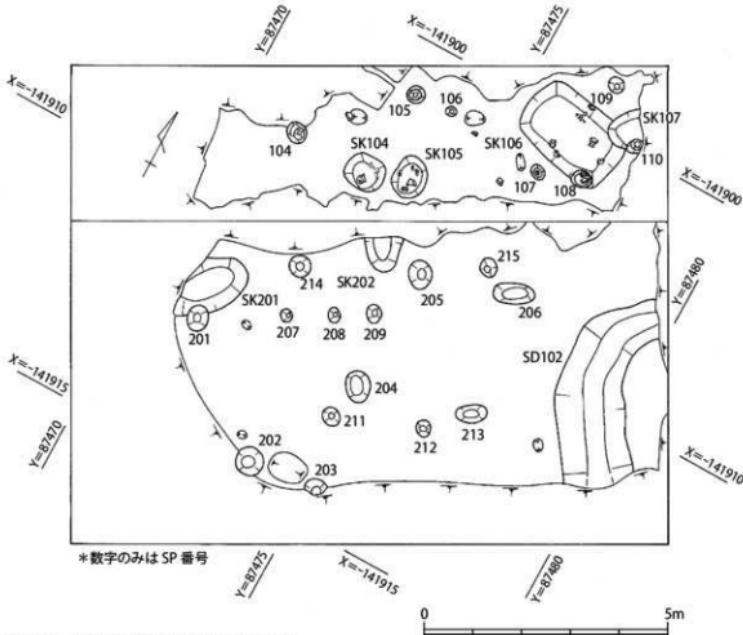
B52調査区

第7次調査区では耕土層下面、浜提面の2面の遺構面が確認されていたが、今回の調査区では耕土層及びその下面の堆積層は遺存せず、盛土直下で浜提面となり、遺構検出面は1面であった。調査区西端は都市計画道路青木幹線に接し、搅乱が著しい。今回の調査区では溝2条、土坑3基、ピットを7基検出した。

西端の搅乱東側で検出した溝SD105は幅0.3m、深さ0.1m、埋土は灰色砂質土で、SD106は幅0.7m、深さ0.2mを測り、須恵器、土師器、黒色土器片が出土した。これらの溝は第7次調査第1遺構面検出遺構と同時期の7～8世紀代の遺構と考えられる。

第2遺構面に相当する遺構は、調査区の東半で土坑、ピットを検出し、調査区中央南側で並列する2基の土坑を検出した。

SK104は平面隅丸方形を呈し、一辺約0.8m、深さは0.3mで、埋土は暗灰色細砂である。胸部穿孔の広口壺1点、別個体の壺の口縁部片が1点出土した。出土土器は2点のみでいずれも弥生時代中期後半のものである。また土坑の東肩部から骨片が出土し、現地で検出を試みたが非常に脆く、周囲の土ごと持ち帰り、室内で検出作業を実施し、骨種・部位などの同定を行った。結果としてはウマの右上肢骨の一部と考えられ、弥生時代中期の土坑とすれば共伴する可能性は低いものと考えられる。隣接するB53-A調査区では8世紀代の土器とともにウマの下顎骨が出土しており、それらと同時期の遺構、あるいは堆積が切り合っていたものと考えるのが妥当であろう[P.65 第2章第2節(3)にて詳述]。

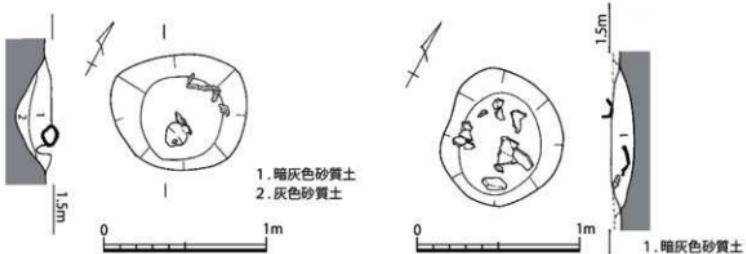


第37図 B52調査区 平面図 (Scale1:100)

SK105は径約0.8m、深さ約0.2mの平面円形の土坑である。弥生時代中期後半の長頸壺2点と高环の环部が出土した。

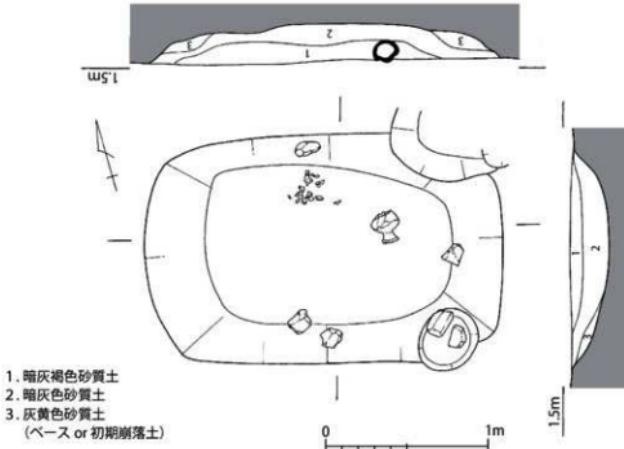
東端で検出したSK106は、長辺2.0m、短辺1.6m、深さ0.15mの平面長方形の土坑で、弥生時代中期後半の台付長頸壺2個体分が出土した。土坑墓の可能性もあるが、明確な根拠は確認できなかった。第7次調査第2遺構面検出のSK201からはⅢ様式の土器の出土が認められるが、そのほかは概ねⅣ様式前半のものと考えられる。

このほかにピット7基を検出したが出土遺物が少なく、第7次調査上層遺構面のものを含め、時期などは不明である。



第38図 B52調査区 SK104
平・断面図 (Scale1:30)

第39図 B52調査区 SK105
平・断面図 (Scale1:30)



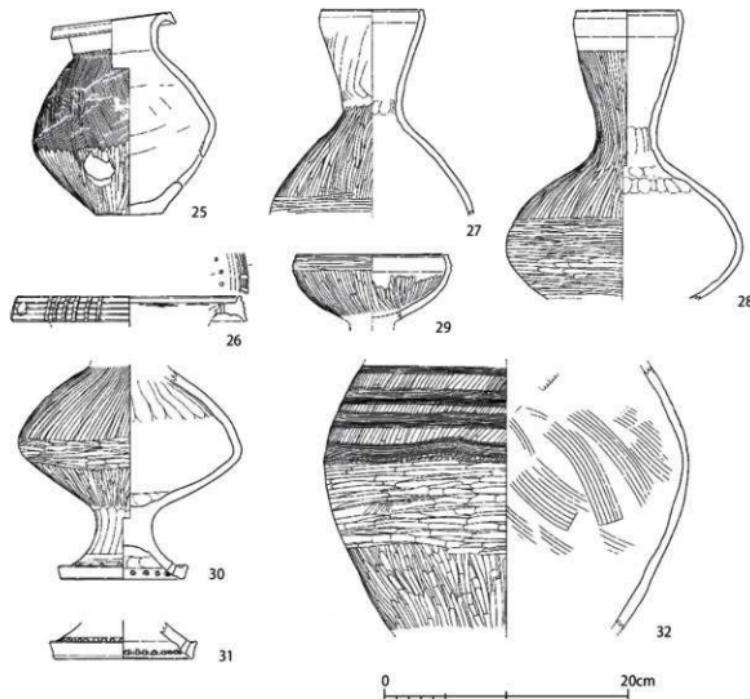
第40図 B52調査区 SK106平・断面図 (Scale1:30)

SK104出土の25は胴部下方に穿孔のある壺で、口径9.6cm、器高16.6cm、底径5.4cm、体部は算盤玉形で胴部最大径までの上半は細かいハケ調整、下半はヘラミガキ調整である。色調は赤みが強い。26は広口壺の破片で、口縁部は4条の凹線文に6条一对の棒状浮文と円形浮文が施される。

SK105出土の27・28は長頸壺で、胴部下半を失う。28の残存高は23.7cmで、体部は丸味を帯びる。頸部から胴部最大径付近までは縱方向、胴部下半は横方向のいずれも細かいヘラミガキ調整である。29は高環の坏部で、復元口径12.4cm、残存高5.3cmである。口縁部に3条のヘラ描き沈線、体部は光沢を帯びるほどの丁寧なミガキ調整である。

SK106からは32の壺の胴部片のほかに台付の細頸壺と考えられる30と、同器種の脚部と考えられる31が出土した。30は残存高17.4cm、底径9.9cm、脚部裾に径5.0mmの穿孔をめぐらす。体部は非常に丁寧なヘラミガキで成形される。

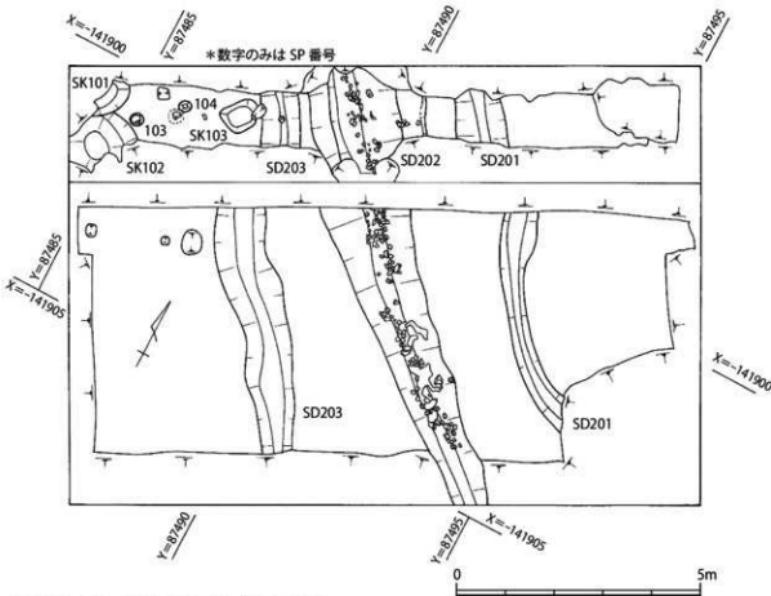
SK104から壺1個、SK105から長頸壺2個、SK106からは台付壺2個と、SK104・105・106では土坑ごとに出土土器の器種構成が異なる様子が窺われる。



第41図 B52調査区 出土土器 (Scale 1:4)

B53-A 調査区

盛土直下で土壤化した浜提面となり、溝3条、土坑3基、ピットを2基検出した。土坑とピットからの出土遺物はいずれも小片であるが、第7次調査の耕作土下面で検出された第1遺構面と同じ平安時代頃の遺構と考えられ、溝SD201～203は第2遺構面で検出されていたものの続きである。溝の下部では前回と同様、土石流による砂礫層の堆積を確認しており、弥生時代中期～後期の土器33～35が出土した。SD201、203には砂が堆積するのみであるが、SD202は粘質土の埋土で、多量の小片土器とともにウマの下顎骨が出土した。今回、SD201・203からの遺物の出土はなかったが、第7次調査ではSD203から弥生時代後期（V様式）の完形の甕1点が出土している。



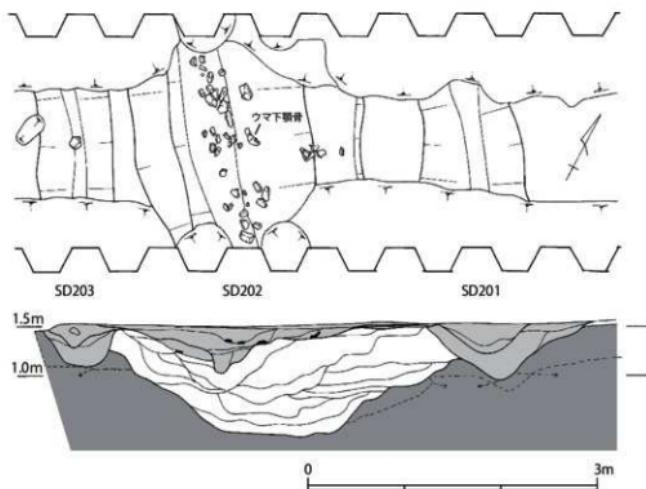
第42図 B53-A 調査区 平面図 (Scale1:100)

写真8 第7次調査 B53-A 調査区 SD202
バカガイ及び獸骨出土状況（近景）
(西から)

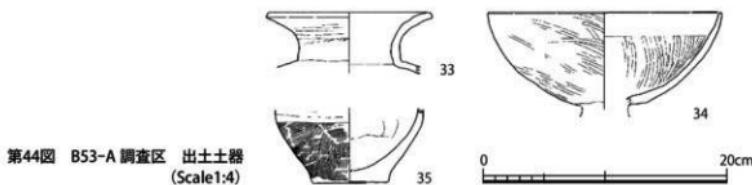


SD202は検出面から最深部までの深さ約0.4m、最大幅は約1.8mである。図示できるものはないが、埋土上層からは第7次調査と同様、8世紀後半頃の土器片が出土し、土器とともにウマの下顎骨が出土した。第7次調査ではウマの顎骨から遊離した第3、あるいは第4前臼歯が出土しており、生後10~12年程度の壮齢馬と推定されている。そのほかにも右肩甲骨と距骨が1点ずつ、ウシとウマの区別が困難な長管骨と寛骨が1点ずつ出土しており、さらにはバカラガイの貝殻の集積が確認されていた。骨と貝は別々に投棄された状況が確認されていた。古代草屋駅家に比定される深江北町遺跡でのウマの歯の出土傾向は臼歯単位での出土が多く、老齢馬が多いとの分析からも、食用でなく、使役された馬の死亡後処理の様相と推測されており、その際には海際の砂浜が利用されていたと考えられる。

溝と下位の土石流による堆積との関連であるが、付近は安定した砂の堆積が続き、西端のB47調査区下位のような縁辺部の土石流の堆積とは異なるものだろう。北側の要玄寺川からのオーバーフローの痕跡などを人為的に掘り返したか、また窪地のような土地を利用したかなど、北側からの流れ、地形の在り方を検討する必要性があるだろう。



第43図 B53-A 調査区 SD201~203 平・断面図 (Scale1:50)



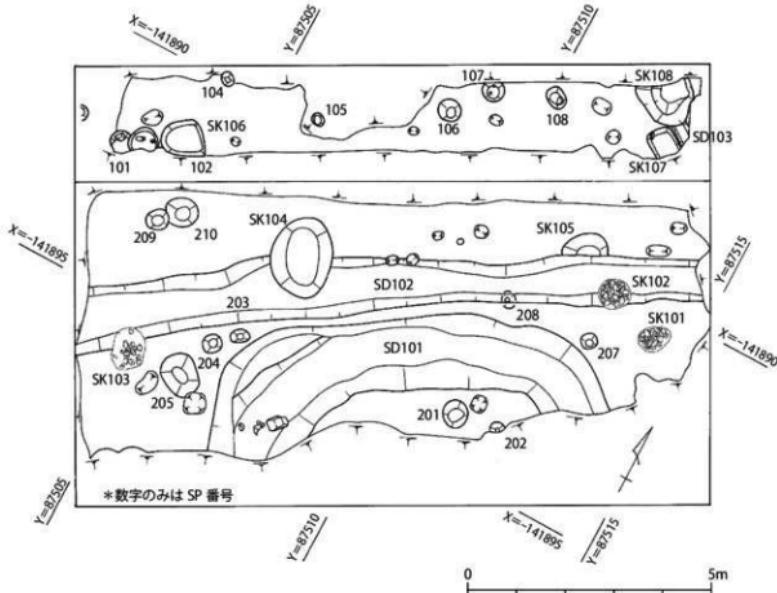
第44図 B53-A 調査区 出出土器 (Scale1:4)

B53-B 調査区

一部に古代の耕土層が残るが、基本的に盛土層直下で浜提面となる。土坑3基、ピット8基を検出した。

東端で検出した深さ約0.8m、壁面が垂直に立ち上がる土坑SK108は近世の井戸と考えられ、西端では長径約0.9m、短径約0.6m、深さ約0.6mで黒褐色砂質土を埋土とする、平面橢円形のやや大型の土坑SK106を検出したが、遺物の出土はなかった。8基のピットのうち、15~20cm大の扁平な石が据えられたものは柱穴と考えられるが、第7次調査検出のピットを含めても建物などには復元できていない。遺構出土の遺物は乏しく、時期は不明である。

第7次調査では碟の詰まった土坑や周溝墓が検出されたが、今回はこれに類する遺構の検出はなかった。

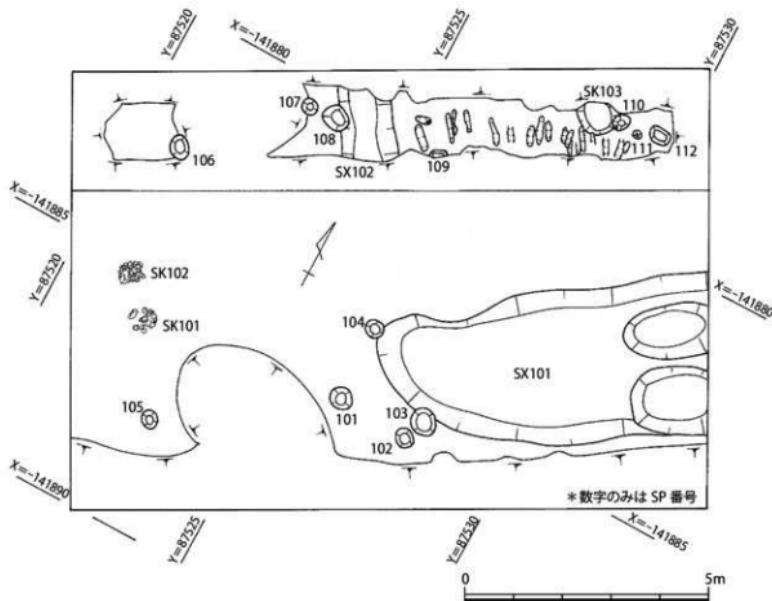


第45図 B53-B 調査区 平面図 (Scale 1:100)

B54-A 調査区

盛土層直下で浜提面となる。調査区東半で幅0.1mほどの鋤溝を数条検出したが、検出長はいずれも0.6mほどで遺存状況は悪い。浜提面上の土壤化層を除去し、土坑1基、ピット6基、調査区の中央で幅約1.2m、深さ約0.2m、埋土が黒褐色砂質土の溝状の落ち込みSX102を検出したが、いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

第7次調査では弥生時代中期～古墳時代前期の土器が出土した大型の落ち込みSX101や、弥生時代後期の壺棺墓に伴う集石2基や周溝墓が検出されていたが、今回の調査範囲ではこれに類する遺構は検出していない。



第46図 B54-A 調査区 平面図 (Scale 1:100)

B54-B 調査区

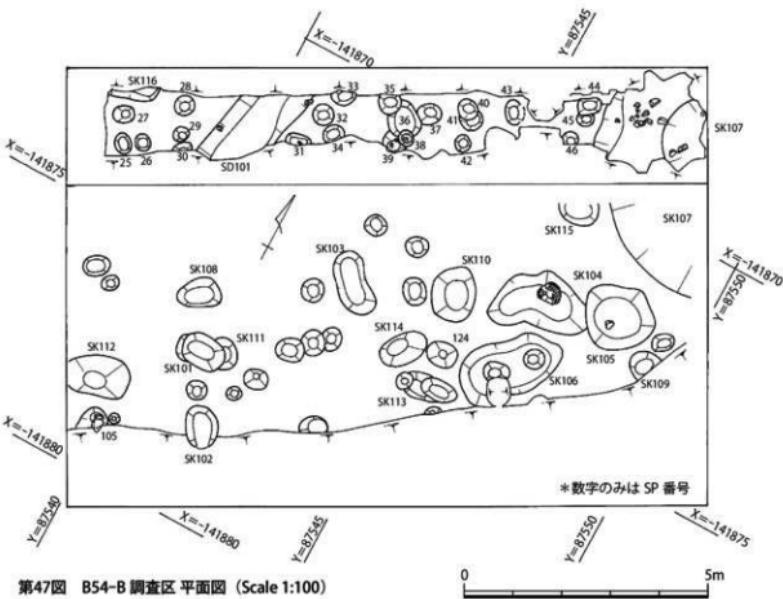
盛土層直下で土壤化した浜提面となる。土壤化層を掘削した面でピット24基、溝1条、東端で江戸時代の落ち込み1基を検出した。拳大の石の入る柱穴を2基検出したが、深さは0.2m前後と浅く、断面の形状は皿状で出土遺物はない。第7次調査区検出のピットを合わせると相当数になるが、明確な建物などは復元できていない。溝SD102は幅1.4m、深さ0.15mで、平面長楕円形を呈する土坑の可能性もある。第7次調査ではこれに類する土坑から弥生時代前期末～中期前半の大型の壺や小型の鉢が出土している。

B54-C 調査区

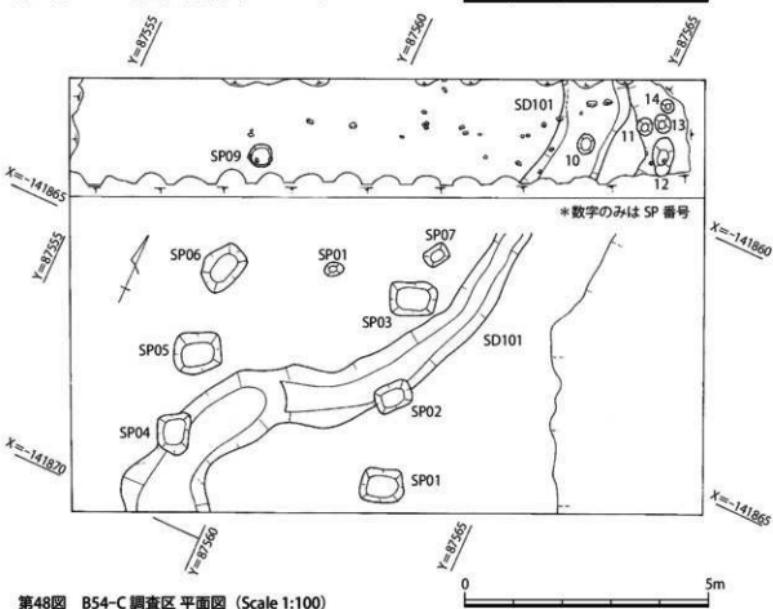
近代～古代の3層の耕土層が残り、その下が浜提面となる。土壤化部分の掘り下げ後、ピット6基と第7次調査区から続く溝SD101を検出した。

SP09は第7次調査で復元された東西1間×南北2間の掘立柱建物の西側柱列の延長上に位置するが、平面円形で、深さは0.1mと残りが悪く、関連は不明である。

SD101からは8世紀代の小片の土器しか出土しておらず、第7次調査での弥生時代中期後半の壺形土器など完形土器4点が出土した状況とは異なる。第7次調査 SD101とされた遺構は、今回の検出範囲から続く細い溝の部分と、南端の土坑状を呈する部分が別の遺構であった可能性が高い。屈曲する平面形態から周溝墓に伴う溝の可能性が想定されていたが、土坑状部分以南では土器棺と考えられる壺が出土しており、遺構が切り合うものと考えられる。



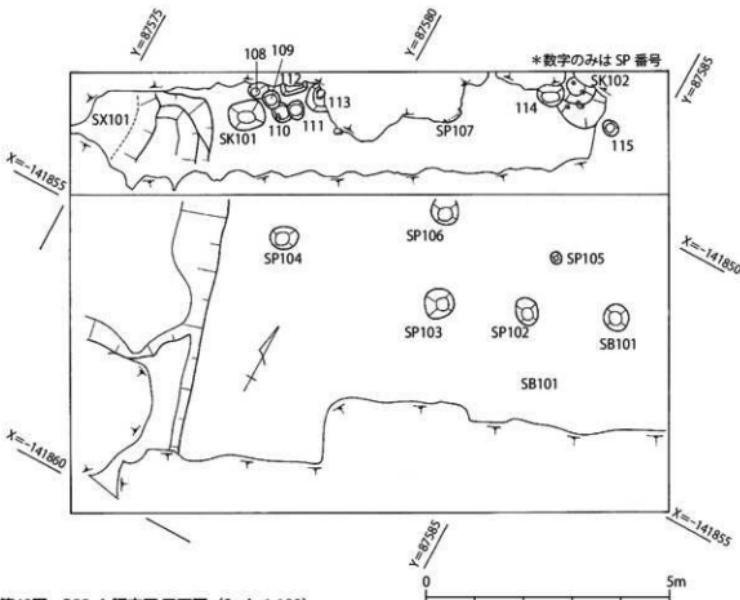
第47図 B54-B 調査区 平面図 (Scale 1:100)



第48図 B54-C 調査区 平面図 (Scale 1:100)

B55-A 調査区

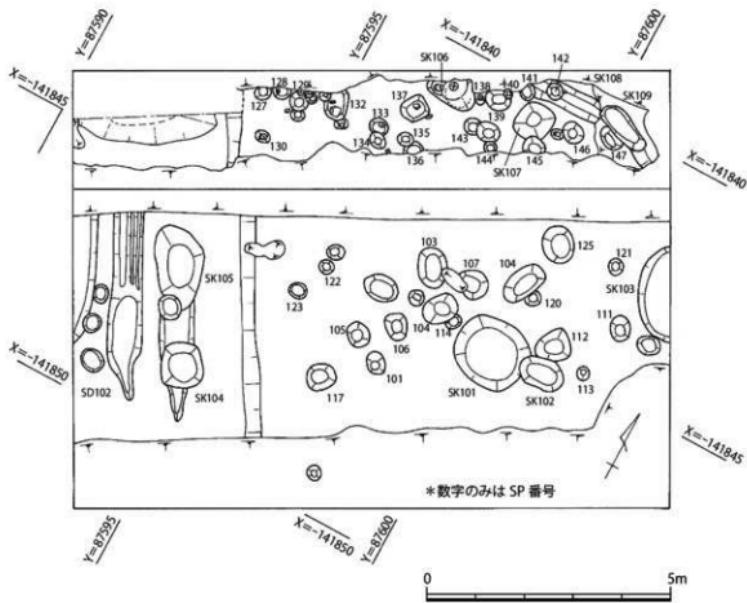
盛土層下で中世と古代の2層の耕土層を検出し、西端は近世以降の水溜め状の落ち込みとなる。耕土層下で南北方向の幅0.15～0.2m、溝間0.4mで並行する古代の耕作痕を検出し、浜提面ではピット9基と土坑1基を検出した。第7次調査では掘立柱建物SB101が検出されており、この建物西侧柱列の延長上の攪乱際でわずかに柱穴のプランが検出できたが、砂面崩壊で詳細な状況は確認できなかった。SP113は一辺0.6m、平面形が隅丸方形で深さ0.4mの柱穴で底に石が据えられる。これに対応する同様の柱穴は南側で確認されていない。



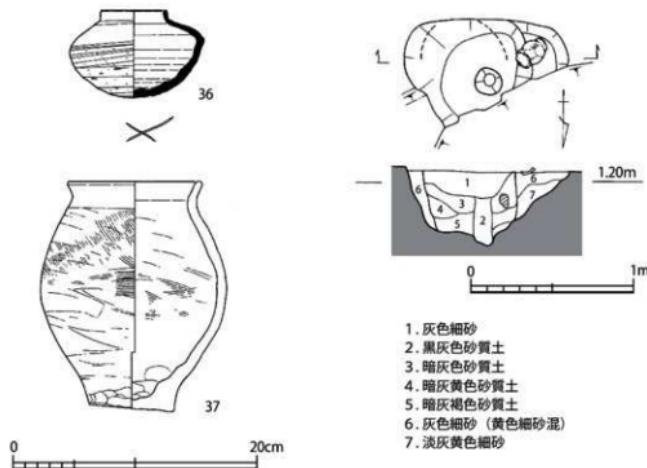
第49図 B55-A 調査区 平面図 (Scale 1:100)

B55-B 調査区

盛土層下で耕土層を検出し、その下、浜提面上部は土壤化が顕著であった。西端は近世の水溜めである。耕土層下の浜提面の変色部を掘削中に7世紀代の須恵器短頸壺36などが出土したが、遺構に伴うものとして把握できなかった。浜提面で柱穴や小規模なピット約20基、土坑4基を検出した。ピットは径0.1～0.3mで、径が0.3m前後のピットの埋土は黒褐色砂質土で明瞭である。SP132の礎盤の石には被熱部がある。石の礎盤はこのほかのピットには認められない。土坑SK106の埋土最上層から擬朝鮮系無文土器の甕1点が出土した。東端のSK107・108は隣接して弧を描くように並ぶ。土壤化と鋼板設置の先行削孔の影響で不明瞭な平面プランであったが、本来は溝であった可能性が高い。出土遺物は少ないが、ピットは飛鳥～奈良時代にかけて、土坑は弥生時代の遺構と推測される。



第50図 B55-B 調査区 平面図 (Scale 1:100)



第51図 B55-B 調査区 出土土器 (Scale 1:4)
36 : SK108 37 : SK106

第52図 B55-B 調査区
SK106平・断面図 (Scale 1:30)

B56-A 調査区

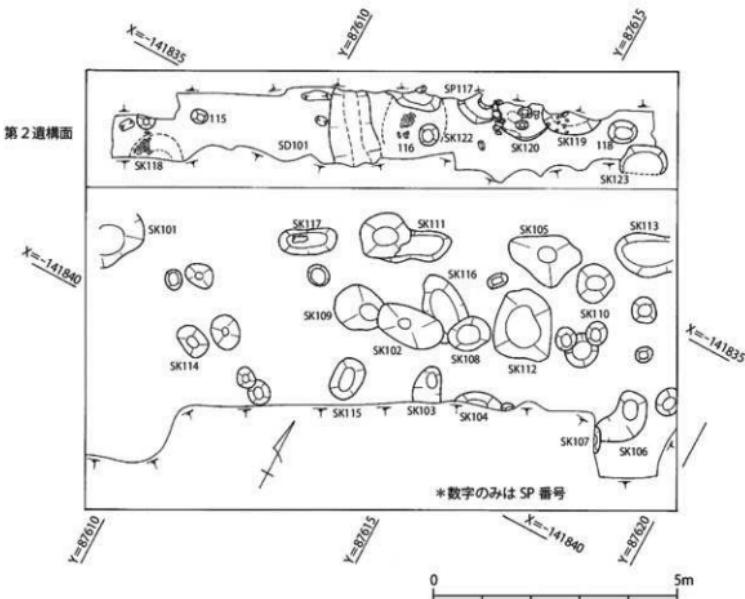
遺構面を3面確認した。第1遺構面は包含層上面、第2遺構面の一部は整地層上である。

盛土下で検出した淡褐色砂質土層は、調査区中央付近でやや厚く堆積し、東西方向の断面では緩やかな皿状を呈する。この落ち込み部分をSX101とし、この中からは8世紀代、奈良時代後半の土器が多く出土した。落ち込みの周辺では細い溝状の遺構を検出した。

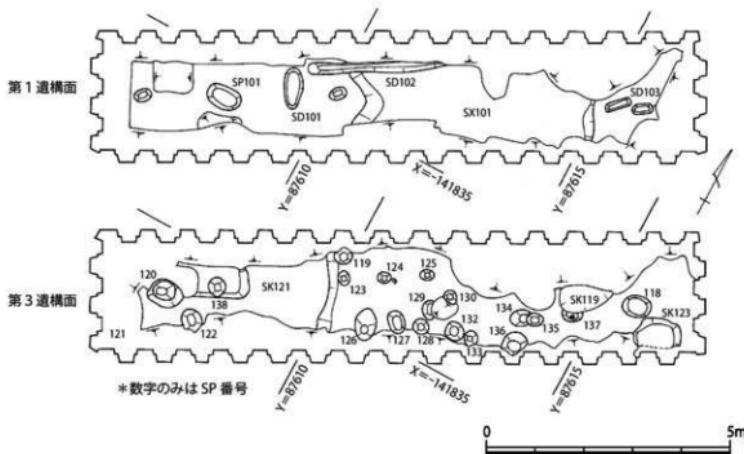
SX101の最深部では、火を受けて赤変した状態のものを含む拳大の礫が10個ほど出土しており、礫の出土レベルと同レベルの浜提面では、被熱により硬化が顕著な部分を3箇所確認した。第2遺構面としたこの面で検出した硬化部分は、鍛冶や製塩などに伴う炉床の痕跡と想定したが、この調査区から東側、B58-B調査区にかけての範囲では釘や錐と考えられる鉄片などの金属製品、炭化物の出土などが見られ、鍛冶に伴う遺構の可能性が高いものであろう。

調査区中央付近、東西幅6.0mほどの範囲には炭混じりの砂質土が堆積しており、被熱部分の形成に伴う整地層の可能性がある。SK120は深さ0.5mの土坑であるが、表層の硬化面の下にさらに壁面が一部硬化する箇所があり、この付近で繰り返し火が用いられたものと推測する。土坑や整地層からは須恵器の环のほか、土師器の移動式竈片、瓢片や長胴の甕、取瓶様の片口の塊などが出土しており、一連の遺構は8世紀代に属するものと考えられる。

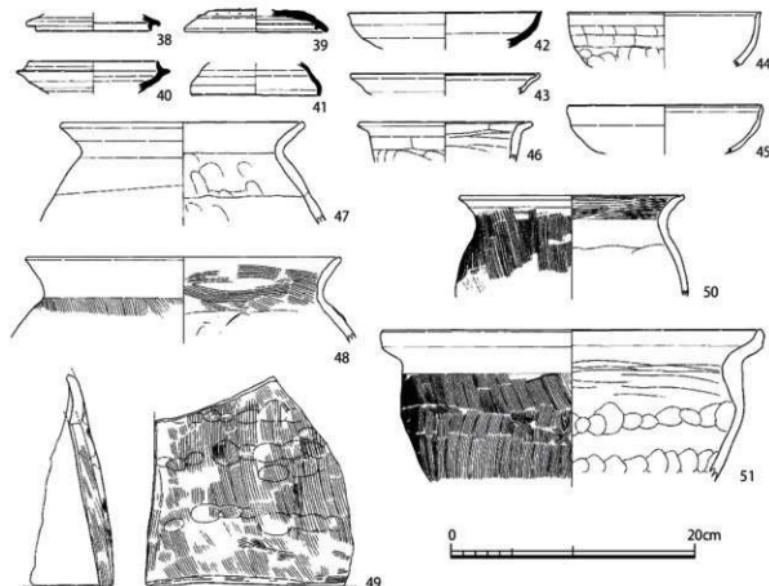
検出レベルにおいて第2遺構面が、第7次調査報告書に掲載された遺構面に相当するが、同様の被熱状況は確認されていない。遺構の広がりは調査区の北側に広がるものと想定されるが、第5次調査でも硬化部分など同様の遺構、検出状況は確認されていない。



第53図 B56-A 調査区 第2遺構面 平面図 (Scale1:100)



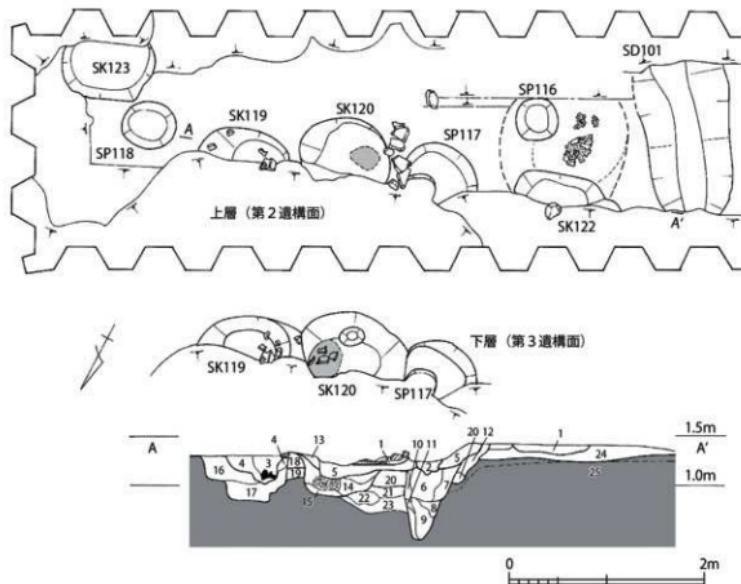
第54図 B56-A 調査区 第1・3遺構面 平面図 (Scale 1:100)



第55図 B56-A 調査区 第1遺構面 遺構出土土器 (Scale 1:4) 38~49 : SX01 50・51 : SP01

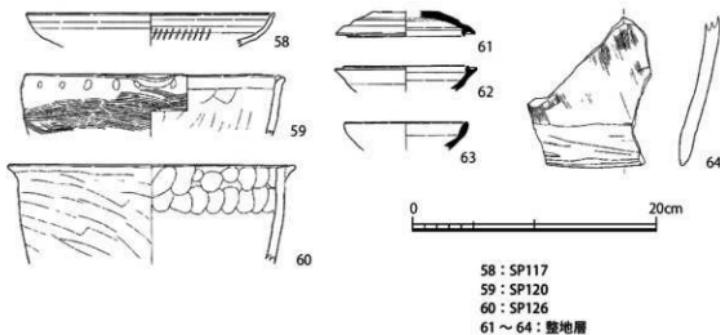
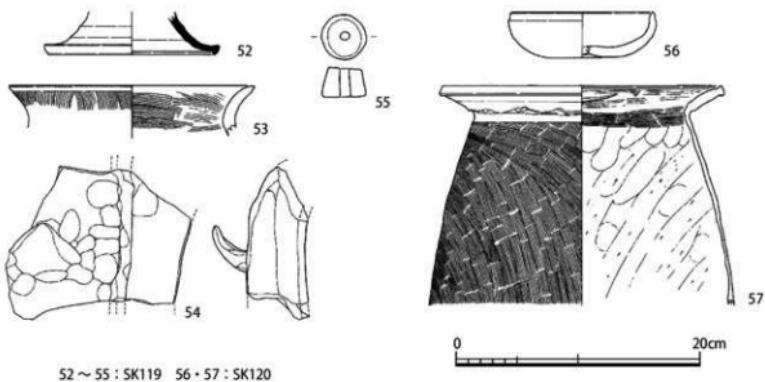
南側の第7次調査の調査区ではピットが多く検出され、同時期の土器も比較的多く出土しているが、今回の調査区のものと合わせても建物などには復元できていない。被熱による影響と捉えられる様相は、現状で今回の調査区の範囲内に収まる程度の小規模なものである可能性も高く、何らかの簡易な工房のようなものを想定しておく。遺構の埋土や整地層からは、量は少ないながらスサなどを含む焼土の小塊が出土しており、炉壁などの可能性がある。結果的には現状で詳細な内容や構造、用途などについて不明な点が多いが、出土遺物と合わせても周辺の遺構の在り方を考える上では重要な成果と考えている。

また浜提面を形成する砂層の一部では、明確な掘形などは検出できなかったが土壤化による変色部分があり、弥生時代前期の甕の口縁部片や底部が出土した。状況的には風性堆積の過程で流れ込み、埋没したものと思われる。北側、第3次調査地あたりからの流れ込みにより堆積したもの可能性を想定している。



- | | | |
|-------------------------|-------------------------------|----------------------------|
| 1. 灰色砂質土 | 11. 灰色砂質土 | 20. 茶褐色砂質土 |
| 2. 灰褐色粗砂 (SK120) | 12. 暗灰色砂質土 (6 ~ 12 : SP117) | 21. 黄褐色細砂 |
| 3. 灰色砂質土 | 13. 暗灰色砂質土 | 22. 暗灰色細砂 |
| 4. 灰褐色砂質土 (3・4 : SK119) | 14. 暗褐色砂質土 | 23. 濁灰黄色細砂 (18 ~ 23 : 整地層) |
| 5. 灰色砂質土 (上層整地層) | 15. 灰色細砂 (茶褐色粗砂ブロック混) | 24. 褐灰色砂質土 (整地層 or 土壌化層) |
| 6. 灰色砂質土 | (13 ~ 15 : SK120 下層) | 25. 黄褐色細砂 (浜提砂) |
| 7. 暗灰色砂質土 | 16. 灰色砂質土 | |
| 8. 灰色砂質土 (褐色砂ブロック混) | 17. 暗灰色砂質土 (16・17 : SK119 下層) | |
| 9. 暗灰色砂質土 | 18. 茶灰色砂質土 | |
| 10. 明褐色砂質土 | 19. 灰茶色砂質土 | |

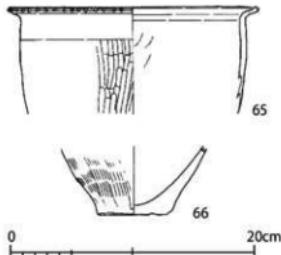
第56図 B56-A 調査区被熱部 SP117・SK119・SK120 平・断面図 (Scale1:50)



第57図 B56-A 調査区 第2・3造構面検出遺構及び整地層出土土器 (Scale1:4)



写真9 増田氏による地質観察の様子
(B56-A 浜堤形成砂層)



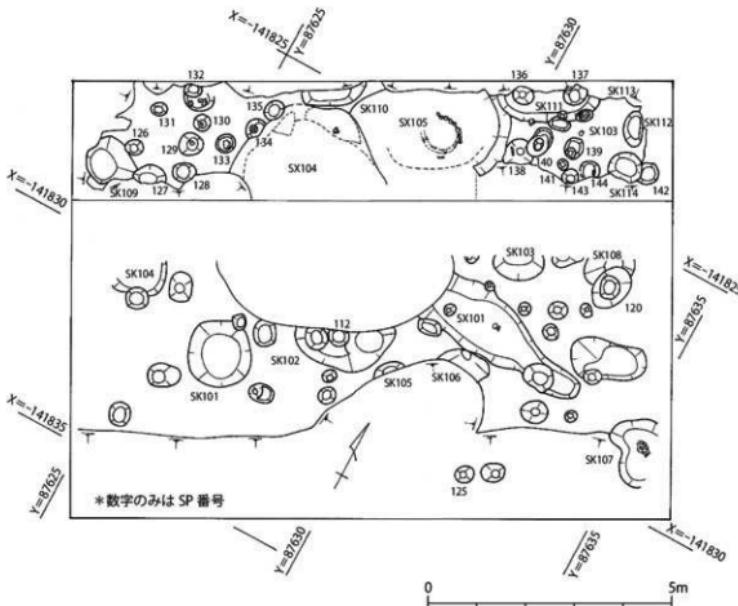
第58図 B56-A 調査区
浜堤形成砂出土土器 (Scale1:4)

B56-B 調査区

盛土層下で明確な耕土層は確認していないが、浜提面上に土壤化した砂層が厚さ0.3m堆積する。調査区中央で径2.0～3.0mの水溜め、あるいは井戸の2基が切り合う。西側は近世のもの、東側は底面で曲物、掘形から奈良時代の遺物が出土している。調査区の東西両端でピット20数基、土坑を5基検出した。ピットの内、SP129・130の埋土上層からは奈良時代の土師器壇などが出土しており、0.4～0.5mの深さがあり、拳大の石を据えるものなどは柱穴と考えられる。ただ、第7次調査区検出のピットと合わせても明確な建物には復元できていない。

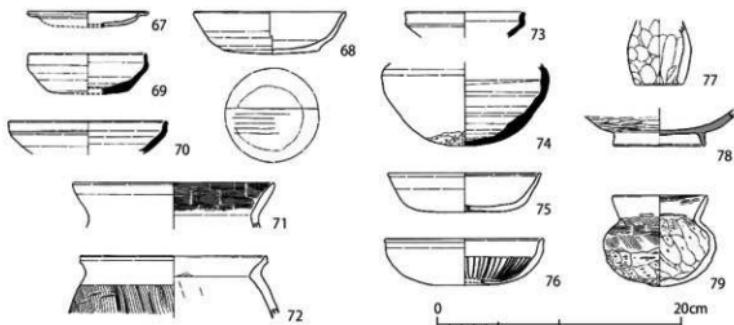
土坑4基が調査区の東端に集中し、いずれも径約1.0mで平面形は円形を呈し、埋土は黒褐色砂質土である。また西端で検出した径約1.2mの平面円形の土坑SK109には、人頭大の石が数個据えられる。一部の石は赤変しているが、この場での火の使用痕跡はない。いつ頃構築されたものか、遺物が伴わないので明らかでないが、同様の遺構は隣接するB56-A調査区の被熱部上面で検出した石積みや、第7次調査ではB53-B調査区のSK101・102の礫を集積した土坑が古代に属し、B54-A調査区の集石遺構が弥生時代後期のものである。

また調査区東端の浜提面で小型丸底壺を1点確認した。第7次調査では落ち込みの中から、同様の壺と傍らから石製管玉6点、ガラス小玉6点が出土していた。今回出土の土器は遺構に伴わないが、祭祀遺物の可能性が想定される。



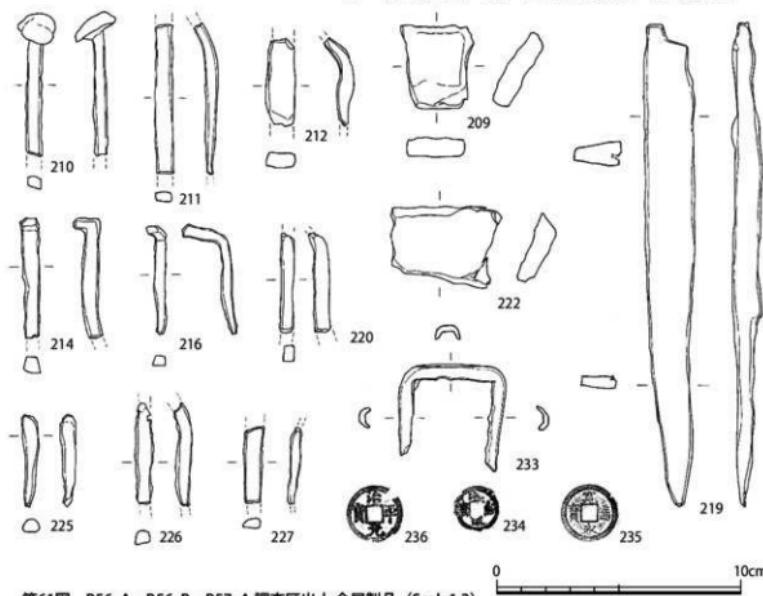
第59図 B56-B 調査区 平面図 (Scale1:100)

B56-A 調査区から B57-A 調査区付近の被熱状況、炭化物の出土が確認された調査区周辺では金属製品の出土が目立った。5mm角の鍛鉄製の角釘や折釘がほとんどで、使用されたものが多い。B56-B 調査区では SP138 の上層から長さ 20cm の鍛造製品が出土しており、鎧や船釘の可能性があり、鍋と考えられる大型の鉄片も出土した。また銅製品では皇朝銭の「延喜通宝」、北宋銭の「治平元寶」、コの字形の覆輪と考えられる製品が出土した。これらの調査区では遺構からの土器の出土量は少ないが、遺物包含層からは奈良時代後半の土器がまとめて出土している。金属製品も同時期のものと考えられ、出土範囲としての集中性が認められる。



第60図 B56-B 調査区 出出土器 (Scale1:4)

67 : SK112 68 : SP129 69 : SP142 70・71 : SP138 72 : SP137
73～77 : SX105 井戸總形 78 : SX104 水溜め 79 : 浜提面上



第61図 B56-A・B56-B・B57-A 調査区出土 金属製品 (Scale1:2)

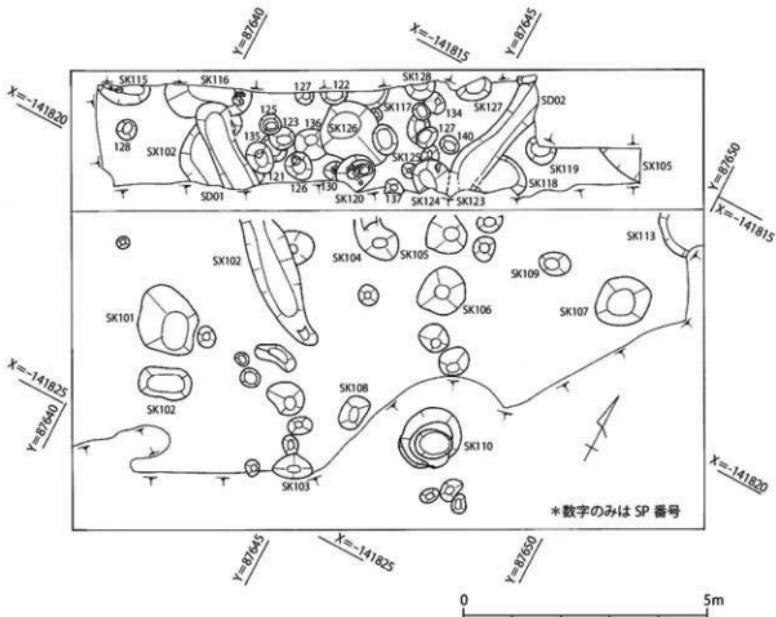
B57-A 調査区

遺物包含層（暗褐色シルト質細砂）上面とその下層の浜堤面（茶灰褐色細砂上面）、計2面の遺構面を検出した。

第1遺構面では、西側に位置する北西～南東方向のSD01と東側に位置する北～南方向のSD02の2条の溝を検出した。SD01は幅0.6～0.7m、検出面からの深さは0.45～0.68mを測る。第7次調査区から続き、長さは5.5mで北側へは延びないようである。SD02は幅0.5～0.7m、検出面からの深さは0.12～0.19mを測る。北側に続き、全体の長さは不明である。須恵器、土師器のほか、SD01には黒色土器の片が混じり、SD02からは土鐘が出土した。

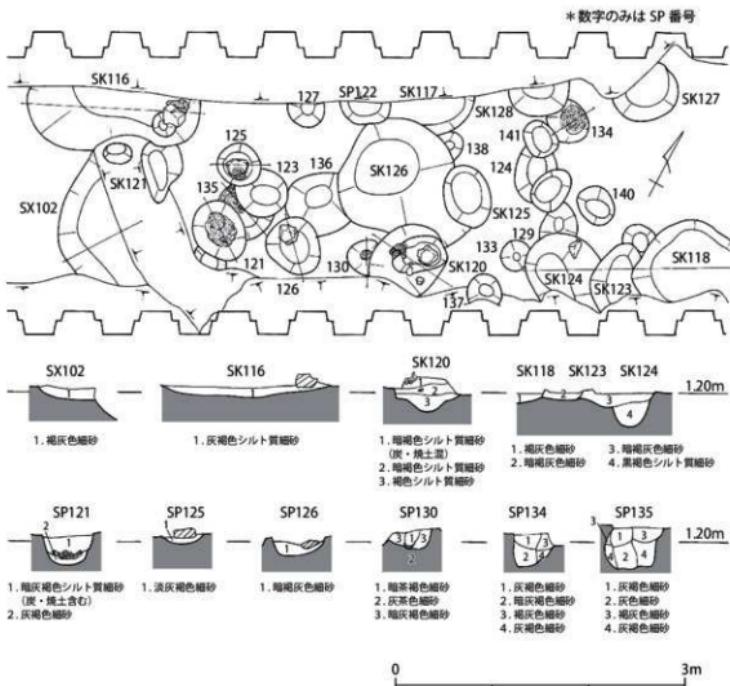
第2遺構面では土坑14基、ピット21基、落ち込み2箇所など多数の遺構を検出した。

SK120は長径0.8m、短径0.68mの楕円形の土坑で、検出面からの深さは0.35mである。埋土には炭が多く含まれ、15～25cm大の礫が数点混入していた。ピットの径は0.25～0.6mまでで、0.4～0.5mの径のものが多い。検出面からの深さは浅いものが0.05mほど、深いもので0.45mである。SP121・125・126・134・135からは拳大の礫が出土した。遺構面が砂面という軟弱な地盤に対する沈下防止のための礎石と考えられるが、被熱状況がみられるものも多く、工房や火災により焼失した建物の一部、またはそれらの材の二次使用の可能性などが考えられる。SP121など、掘形底に炭化物が遺存するもの多く、付近で火が用いられていたことを示す痕跡となるものであろうか。

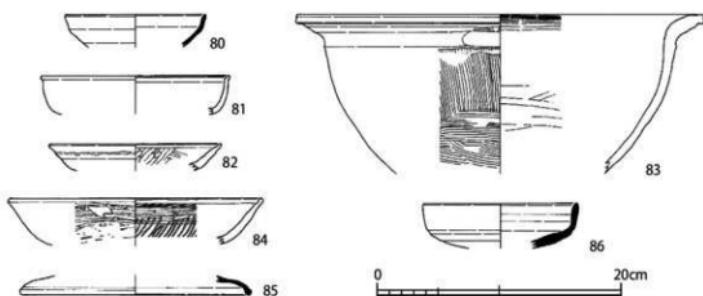


第62図 B57-A 調査区 平面図 (Scale 1:100)

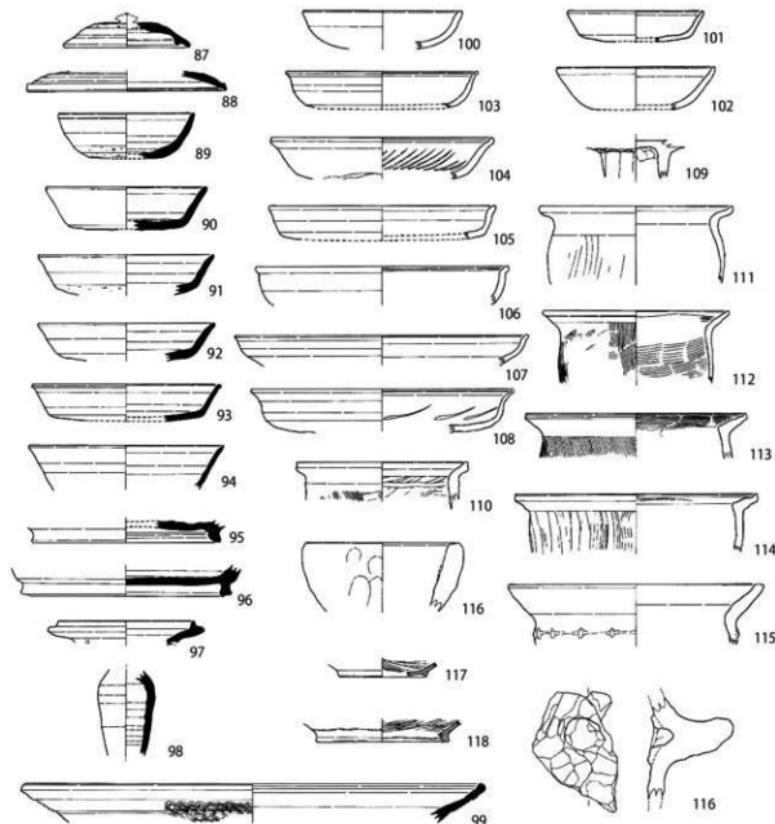
焼土や炭の入る柱穴からの遺物の出土はほとんどなく、図化可能なものはない。図化が可能な遺物は、柱穴の周囲で検出した土坑や溝状の落ちの中、遺物包含層から大半が出土した。SK116は長辺1.6mの平面長方形の土坑で、南に溝状のSX102が続く。遺構出土の遺物は須恵器の壺、壺蓋、塊、土師器の塊、皿などで8世紀代のものと考えられる。



第63図 B57-A 調査区 焼石・焼土・炭化物出土遺構 平・断面図 (Scale1:50)



第64図 B57-A 調査区 遺構出土土器 (Scale1:4)



第65図 B57-A 調査区 遺物包含層出土遺物 (Scale 1:4 + 1:3)

遺構検出面を覆う炭や焼土混じりの茶灰色細砂や暗褐色シルト質細砂層から多くの遺物が出土した（第65図）。小片が多いが、須恵器の壺、塊、皿、瓶、甕、土師器の塊・皿・高壺・甕・鍋、黒色土器の塊、製塙土器や土錐、格子タタキ痕の平瓦や平滑面をもつ軽石などが出土した。時期は奈良時代後半、8世紀代中頃～後半にかけての遺物と考えられる。

B57-B 調査区

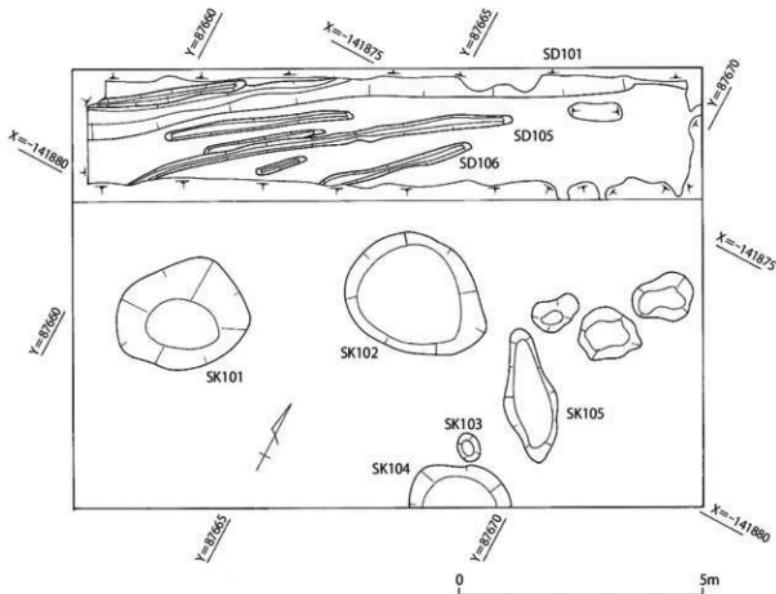
耕土層下の第1遺構面では南西～北東方向の溝6条を検出した。幅は0.05～0.3m、検出面からの深さは0.05～0.15mほどの浅い耕作痕である。埋土からは須恵器、土師器の小片が出土した。北端で検出したやや幅の広い溝SD101は西端で幅約1.0mを測る。陶磁器、瓦、銅錢が出土し、一連の耕作痕は近世のもの可能性が高い。

SD101の南肩から砂面は下がり地形となる。第7次調査では弥生時代中期後半の土坑・ピットが確認されていたが、第8次調査区では砂面が広がるのみで、遺構・遺物の検出はなかった。

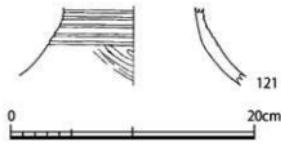
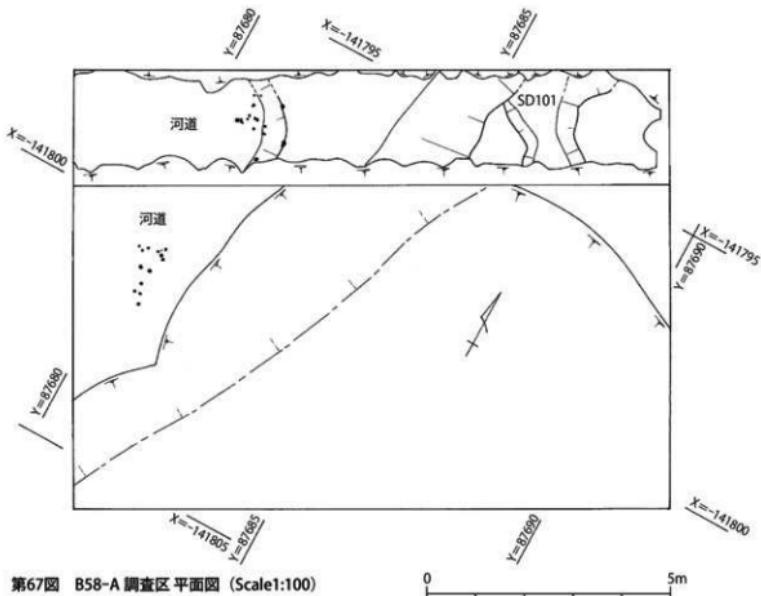
B58-A 調査区

第7次調査に引き続き、調査区西半は近世の河道により削られる。西側に落ち込む斜め堆積の砂層と河道底から斜面下部に打ち込まれた直径3～6cmの多数の杭を検出した。

東端に残る浜提面で北西～南東方向の溝SD101を検出した。幅は南側で1.0m、北側は2.6m以上あり、深さ0.3mを測る。上層の耕土層からは中世の遺物が出土、溝からは古墳時代の須恵器や弥生時代前期の壺121が出土しているが、溝の詳細な時期は不明である。



第66図 B57-B 調査区 平面図 (Scale 1:100)

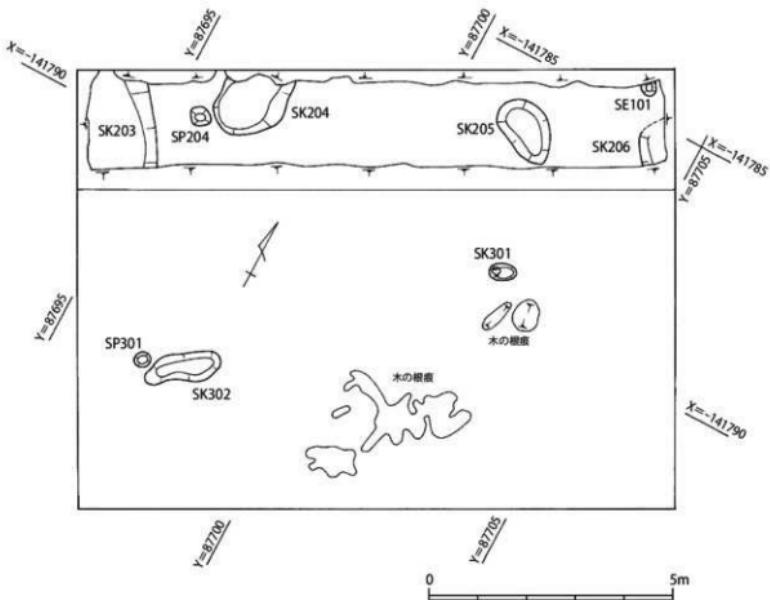


B58-B 調査区

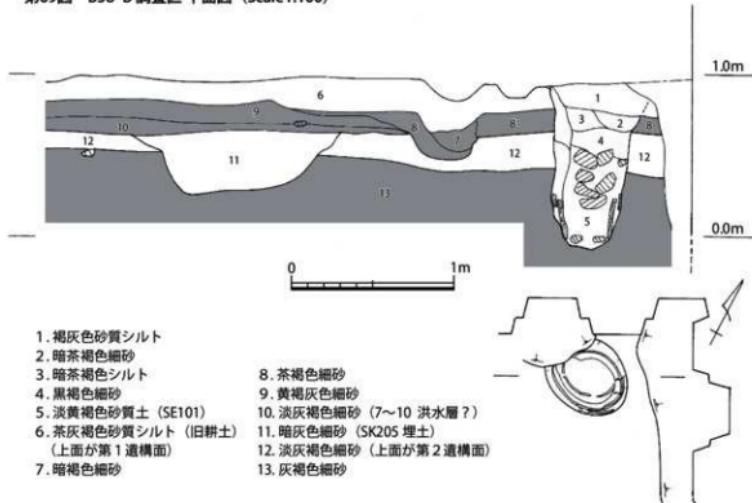
盛土層の下、第1遺構面で南西～北東方向の溝を7条検出した。溝は幅0.1～1.0m以上、検出面からの深さ0.02～0.15m前後の耕作痕で須恵器、土師器の小片や土錐が出土した。

また調査区東北端で検出した井戸SE101は径約0.5mの平面円形の掘形をもち、深さは約1.0mを測る。曲物を二段据えて井側とし、上段の曲物は径40cm、高さ10cm以上、下段は径35cm、高さ25cmである。出土遺物は少量で小片であるが、土師器、須恵器、黒色土器、綠釉・灰釉陶器片のほか土錐や台石などが出土した。

第2遺構面は古墳時代後期～平安時代の遺物（第71図）を含む洪水層を除去した淡灰褐色細砂層面である。第7次調査の第3遺構面に相当し、土坑4基、ピット1基を検出した。



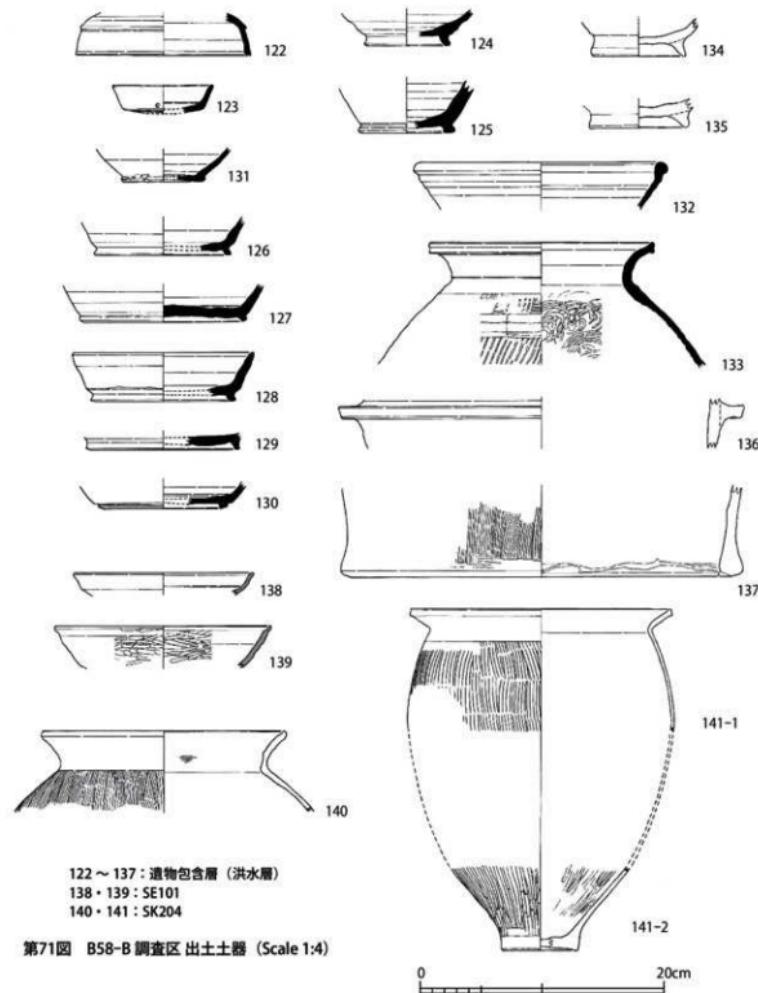
第69図 B58-B 調査区 平面図 (Scale 1:100)



第70図 B58-B 調査区 SE101 平・断面図 (Scale 1:30)

土坑は平面橢円形となるものが多い。SK204は短径1.3m、長径1.6m以上を測り、深さは0.2～0.4mである。復元高24.5cmの弥生時代中期後半(IV様式)の甕141が出土している。第7次調査SK301出土の、搬入品の可能性のある流水文を施した台付細頸壺と同時期の所産と考えられる。同時期の浜堤面が周囲に広がっていたと考えられるが、埋堆積や洪水層の影響も大きい。

なお、SE101は第1遺構面に伴う遺構としたが、鋼矢板の先行削孔の影響により上層部が不明瞭であり、出土遺物の様相からは第2遺構面上の洪水層に含まれる遺物の年代観と同じ、古代の遺構の可能性であることを書き添えておきたい。



第71図 B58-B 調査区 出土土器 (Scale 1:4)

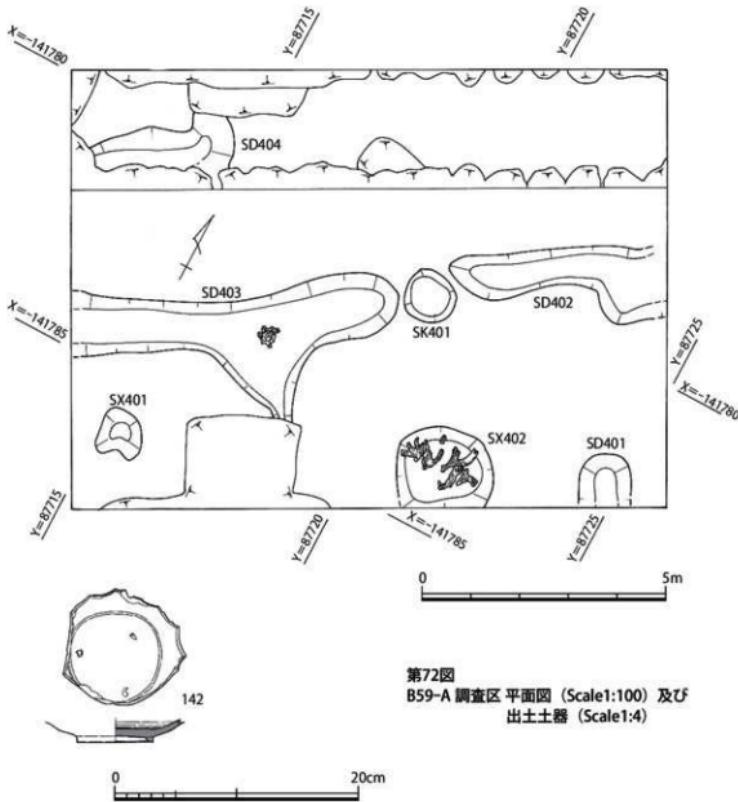
B59-A 調査区

出土遺物、遺構検出状況から第7次調査での第2遺構面、第4遺構面に相当する2面の遺構面を検出したものと判断される。

上層の遺構面では溝3条と土坑3基を検出した。東西方向の幅1.6mの溝と、南北方向の幅0.45m前後の溝は深さ0.05~0.1mと浅く、土坑の深さも0.1~0.2m前後で、溝と同様に浅いものである。第7次調査では中世以降近世にかけての遺構面と考えられている。

下層の遺構面、調査区西端で検出した溝SD404は幅1.5mほどの溝で、検出面からの深さは0.1~0.4mで、南西方向に深くなる。第7次調査では方形周溝墓と考えられる溝SD401~403が検出されていたが、SD404の平面形も北側にわずかに屈曲している。溝からの出土土器は小片で明確な時期は不明である。第7次調査SD401からは器高40cmの弥生時代中期後半(Ⅲ様式か)の壺形土器などが出土しており、同時期の可能性は考えられる。

今回の出土土器の中で図化が可能であったのは、鋼矢板設置の際の攪乱坑からではあるが、綠釉陶器皿の底部片が出土しており、特筆される。

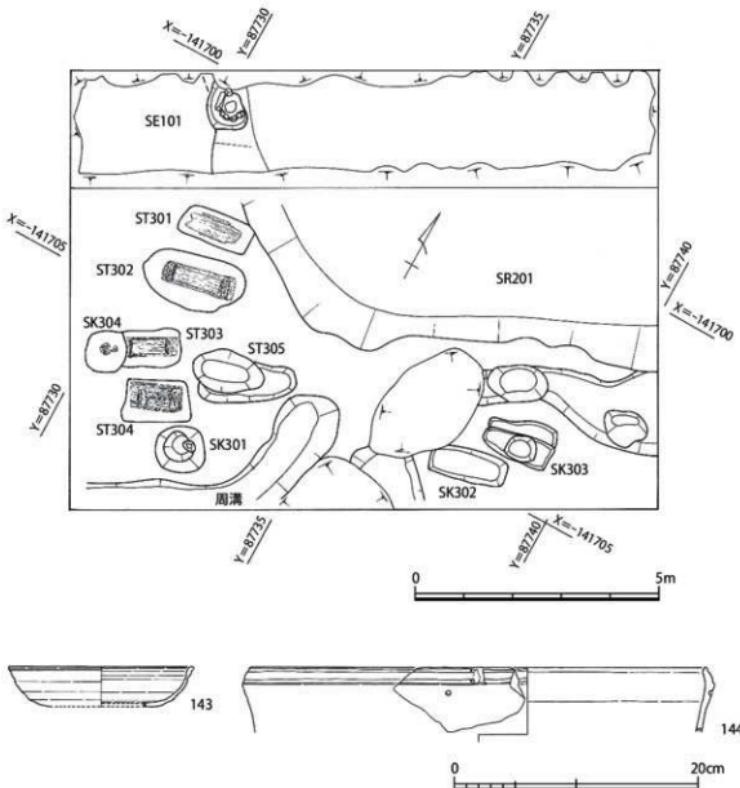


第72図
B59-A 調査区 平面図 (Scale1:100) 及び
出土土器 (Scale1:4)

B59-B 調査区

第7次調査では弥生時代中期後半の方形周溝墓が検出され、埋葬施設である組合式木棺が良好な状態で遺存していた調査区の北側に位置するが、第7次調査区北東隅で検出されていた中世の潮汐流の痕跡であるSR201が北側に大きく広がっていた。調査区西端で方形周溝墓検出面と同一の浜堤面をわずかに検出したが、砂面は東側への下がり地形を形成し、流路状の堆積からは中世の須恵器・土師器片のほか、縄文時代後期の深鉢片が出土し、落ち込みの肩部で井戸を1基検出したに留まる。

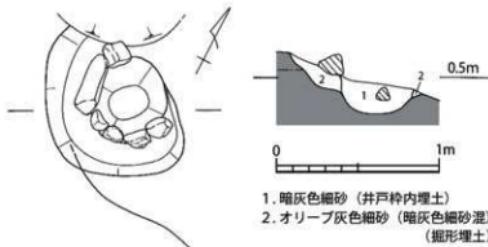
SE101は径1.0m前後の平面やや橢円形の掘形で、検出面からの深さは0.35mである。掘形内に径0.5m前後で拳大ほどの石が円形に巡る。曲物は検出しておらず、石組みの井側の底部が遺存したものと考える。遺物の出土はなかったが、中世以前の井戸であろう。B58-B 調査区の井戸と同時期、古代の遺構の可能性もある。



第73図 B59-B 調査区 平面図 (Scale 1:100) 及び出土土器 (Scale 1:4)



写真11 B59-B 調査区
SE101 検出状況（南から）

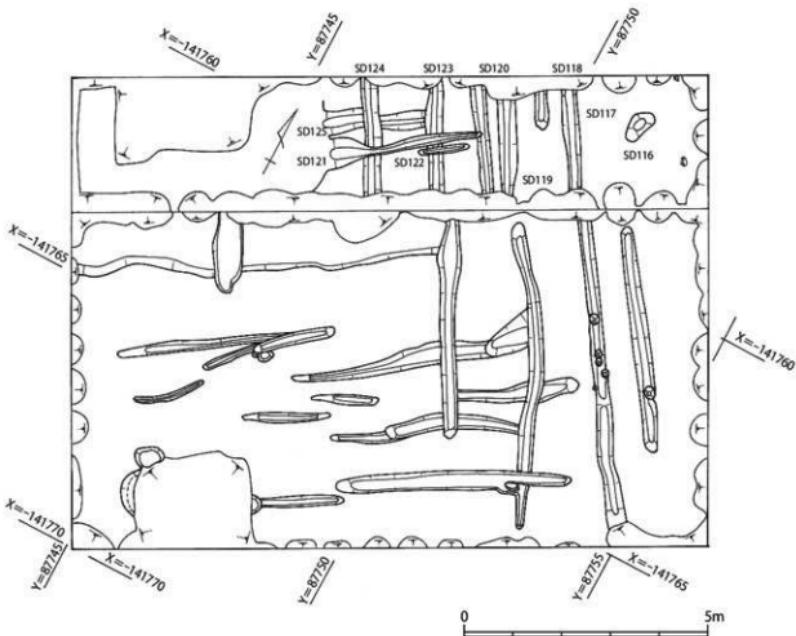


第74図 B59-B 調査区 SE101平・断面図 (Scale1:30)

B60調査区

旧耕土層下で耕作に伴う溝を検出した。溝は北西～南東方向と南西～北東方向の2種あり、幅は0.08～0.35m、検出面からの深さ0.03～0.1mである。耕土層より須恵器、土師器片がわずかに出土したのみで、第7次調査の状況では近世以降の耕作地と捉えられている。

下層では遺構を確認することはなく、T.P.0.4m以下は海成堆積と考えられている粘土の堆積が続く。浜堤堆積は第7次調査で確認されていたように東へ向かって落ちはじめ、北側にも砂堆の広がる可能性は少ないものと判断される。



第75図 B60調査区 平面図 (Scale1:100)

図化した土器は以下の通りである。[出土土器観察表(1)～(4)]

回	番号	遺構名	器種	法量 □径(cm) 器高(cm)	胎土	色調 (外面) (内面)	調整 (外面) (内面)	備考
第10回	1	B46 SD002	弥生土器 高杯	(21.2) (3.1)	径1mm以下の白色粒多く含む	明茶褐色 明茶褐色	ヘラミガキ後、口縁部横ナデ ヘラミガキ	
	2	B46 SD002	弥生土器 高杯	(22.4) (3.1)	径1mm以下の白色粒やや多く含む	灰褐色 暗褐色	磨減 磨減	
	3	B46 SD002	弥生土器 鉢	(19.6) (6.0)	径1mm以下の白色粒やや多く含む	暗褐色 淡茶褐色	口縁部凹線・体部磨減 ヘラミガキ	
	4	B46 SD002	弥生土器 甕	(17.0) (5.0)	径1mm以下の白色粒少量含む	淡茶褐色 淡茶褐色	口縫部横ナデ・体部タタキ後頭部横ナデ 口縫部横ナデ・体部ヘラケズリ	
	5	B46 SD002	土器器 甕	(15.0) (11.0)	径1mm以下の白色粒多く含む	淡茶褐色 淡茶褐色	口縫部横ナデ・体部ヘラナダ 口縫部横ナデ・体部ヘラケズリ	
	6	B46 SD002	弥生土器 甕	(12.2) (4.3)	径2mm以下の砂粒、粗粒なホコリ含む	前茶褐色 前茶褐色	口縫部横ナデ・体部磨減 口縫部横ナデ・体部磨減	
	7	B46 SD002	弥生土器 甕?	(8.0) (3.5)	径2mm以下の白色粒非常に多く含む	茶褐色 淡茶褐色	磨減 ナデ?	
	8	B46 SD002	弥生土器 甕?	(5.4) (3.6)	径2mm以下の白色粒非常に多く含む	乳褐色 乳褐色	ナデ? タッハケメ	
第16回	9	B47 SD201	弥生土器 複合土器	(18.3) (23.1)	径1mm以下の砂粒、粗粒な豊富に少々含む	淡茶褐色 淡茶褐色	淡茶褐色 口縫部横ナデ・体部ヘラミガキ・脱けクリ・影写鏡ヘナナ・横ナデ	
	10	B47 SD201	弥生土器 甕	(14.0) (2.7)	径3mm以下の砂粒含む	淡茶褐色 暗褐色	体部タタキ後口縫部、頭部横ナデ ナデ	外周・片側 外周に凹窓
	11	B47 SD201	弥生土器 甕?	(4.8) (12.1)	径2mm以下の砂粒多く含む	淡茶褐色 淡茶褐色	ナデ?	
	12	B48-A SK01	弥生土器 甕	(13.6) (12.6)	径4mm以下の砂粒含む	前茶褐色 前茶褐色	口縫部横ナデ・体部タタキ 口縫部横ナデ・体部ヘラケズリ	外周黒斑 下に復付着
第20回	13	B48-A SK01	弥生土器 甕?	(4.4) (4.2)	径4mm以下の砂粒含む	前茶褐色 前茶褐色	体部磨減・底部指ナデ 磨減	
	14	B48-A SD301	土器器 甕	(12.0) (7.6)	径7mm以下の砂粒、赤くさり跡含む	淡茶褐色 淡茶褐色	象鼻・口縫部、頭部横ナデ 磨減	
	15	B48-A SD301	弥生土器 甕?	(4.6) (3.9)	径4mm以下の砂粒、赤くさり跡含む	淡茶褐色 淡茶褐色	体部ヘラミガキ 磨減	外周黒斑 あり
第24回	16	B48-A SK303	弥生土器 甕	(19.6) (7.0)	径2mm以下の砂粒含む	暗褐色 暗褐色	口縫部、頭部横ナデ・体部磨減 口縫部、頭部横ナデ・体部磨減	外周わずか に復付着
	17	B48-A SK303	弥生土器 甕?	(5.2) (8.9)	径2mm以下の砂粒含む	淡茶褐色 淡茶褐色	体部ヘラミガキ 斜めナメ	外周底部 近底部凹窓
	18	B48-B 津	土器器 甕	(12.4) (15.5)	径1mm以下の砂粒含む	乳褐色 乳褐色	口縫部横ナデ・体部タタキ後 口縫部ナデ・体部ヘラケズリ	ナギヨリ 外周・片側
第27回	19	B50-C SD001	弥生土器 甕	(16.5) (29.4)	径1mm以下の白色粒やや多く含む	灰茶褐色 灰茶褐色	口縫部横ナデ・体部タタキ後、下半ヘラミガキ 口縫部横ナデ・体部ヘラケズリ	内周凹窓 内周黒斑
	20	B50-C SD001	弥生土器 甕?	(5.7) (13.4)	微細な砂粒少量含む	淡茶褐色 淡茶褐色	体部ヘラミガキ ナデ・指頂部・底	底部厚壁 内周黒斑
第33回	21-1	B50-C SD002	弥生土器 甕?	(4.6) (4.3)	赤くさり跡含む	淡茶褐色 淡茶褐色	ナデ?	
	21-2	B50-C SD002	弥生土器 甕?	(5.8) (14.0)	径1mm以下の赤くさり跡含む	黑褐色 黑褐色	内周凹窓・斜めナメ・軽井沢の法・輕井沢の法・輕井沢の法・輕井沢の法・輕井沢の法	復元器皿 23.0cm底 部厚壁
	22	B50-C SD002	弥生土器 甕?・台付甕?	(10.4) (7.7)	径1mm以下の白色粒多く含む	淡茶褐色 淡茶褐色	ナデ?	
第35回	23	B51 SK302	弥生土器 甕?	(12.0) (29.5)	微細な砂粒、赤くさり跡含む	淡茶褐色 淡茶褐色	ヘラミガキ・頭部横ナデ・体部磨減文 (斜めナメ) 口縫部・横ナデ・体部ヘラケズリ	外周黒斑 あり
	24	B51 SK302	弥生土器 甕?	(15.0) (27.5)	微細な砂粒、赤くさり跡含む	淡茶褐色 淡茶褐色	ナデ?	内周黒斑
第41回	25	B52 SK104	弥生土器 甕?	(9.6) (16.6)	径2mm以下の砂粒、赤くさり跡含む	明茶褐色 明茶褐色	口縫部ナデ・体部タタキ後頭部横ナデ、下半ヘラミガキ 口縫部ナデ	復元器皿 径下厚壁
	26	B52 SK104	弥生土器 甕?	(18.3) (20.0)	微細な砂粒、赤くさり跡含む	淡茶褐色 淡茶褐色	口縫部横4条、貼付用印文、貼付履歴 (6条1単位) 口縫部、頭部横ナデ・体部タタキ後頭部横3条	口縫内に 穿孔
	27	B52 SK105	弥生土器 甕?	(9.2) (16.9)	径2mm以下の砂粒含む	明茶褐色 明茶褐色	口縫部横ナデ・頭部ヘラナダ・体部ヘラミガキ 口縫部横ナデ・頭部ヘラナダ・体部磨減	
	28	B52 SK105	弥生土器 高杯?	(12.4) (5.3)	微細な砂粒、赤くさり跡含む	淡茶褐色 淡茶褐色	ヘラミガキに口縫部ヘラミガキ 端部焼損斑に落ち 口縫部横ナデ・体部ヘラミガキ	
	29	B52 SK105	弥生土器 甕?	(8.3) (23.7)	微細な砂粒、径2mm大赤くさり跡含む	明茶褐色 明茶褐色	体部ヘラミガキ後、口縫部横ナデ 口縫部横ナデ・頭部・底部指頂部	
	30	B52 台付甕?	弥生土器 台付甕?	(9.9) (17.4)	径3mm砂粒、径3mm大赤くさり跡、微細な砂粒	明茶褐色 明茶褐色	体部ヘラミガキ・頭部ヘラナダ後裙縫ナデ・円筒脊孔列	外周黒斑 あり
	31	B52 台付甕?	弥生土器 台付甕?	(11.2) (3.0)	微細な砂粒含む	淡茶褐色 淡茶褐色	摩減・頭部横ナデ・円筒脊孔列	
	32	B52 SK105	弥生土器 甕?	(6.0) (21.7)	径2mm以下の砂粒含む	淡茶褐色 淡茶褐色	体部ヘラミガキ後、上半縫合文4条? ナデ?	
第44回	33	B53-A SD202	弥生土器 甕?	(13.2) (5.0)	径3mm以下の砂粒含む	淡茶褐色 淡茶褐色	口縫部横ナデ・ヘラミガキ	
	34	B53-A SD202	弥生土器 高杯?	(19.0) (7.8)	径3mm以下の砂粒含む	淡茶褐色 淡茶褐色	ヘラミガキ?	
	35	B53-A SD203	弥生土器 甕?	(6.0) (6.0)	径3mm以下の砂粒含む	淡茶褐色 淡茶褐色	体部横ナデ後に上半斜けナメ、蓋ヘラミガキ? 膜部ヘラナダ?	

第4表 出土土器観察表(1)

回	番号	遺構名	器種	法 量	胎土	色調 (外側) (内面)	調整 (外側) (内面)	備考
第51回	36	B55-B SK108	須惠器 壺	5.3 7.2	徑3mm以下の砂粒、雲母片含む	淡灰褐色 淡灰褐色	口縁部から肩部上半縦縫ナデ、下半回転ケズリ 淡灰褐色	灰・黒部赤 ヘラ見けり
	37	B55-B SK106	弥生土器 壺	10.8 18.9	徑3mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	体留めハケメ後に口縁部、頭部構ナデ 淡灰褐色	ほばれ・ 毛茎茎乳頭
第52回	38	B56-A SX01	須惠器 壺	9.4 (1.3)	砂粒はほぼ含まない	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ・上半部欠失 縫縫ナデ	
	40	B56-A SX01	須惠器 壺	11.4 (1.8)	砂粒はほぼ含まない	淡灰褐色 淡灰褐色	天井部回転ヘラケズリ、縫縫ナデ・天井部欠失 縫縫ナデ	
第53回	39	B56-A SX01	須惠器 壺	10.6 (2.7)	徑1mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ 縫縫ナデ	
	41	B56-A SX01	須惠器 壺	10.4 (2.7)	徑1mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ・天井部欠失 縫縫ナデ	
第54回	42	B56-A SX01	須惠器 壺	16.0 (2.9)	砂粒はほぼ含まない	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ 縫縫ナデ	
	43	B56-A SX01	土師器 壺	15.4 (1.7)	砂粒はほぼ含まない	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ 縫縫ナデ	
第55回	44	B56-A SX01	土師器 壺	15.8 (4.5)	砂粒はほぼ含まない	明灰褐色 明灰褐色	ヘラナデ後、口縁部構ナデ 縫縫ナデ	
	45	B56-A SX01	土師器 壺	15.8 (4.0)	徑1mm以下の砂粒含む	明灰褐色 明灰褐色	口縁部ナデ 口縁部構ナデ	
第56回	46	B56-A SX01	土師器 壺	14.4 (3.3)	徑2mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	ヘラナデ後、口縁部構ナデ ヘラナデ	
	47	B56-A SX01	土師器 壺	20.2 (8.1)	徑2mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	口縁部、頭部構ナデ 口縁部構ナデ・体部構ナデ	
第57回	48	B56-A SX01	土師器 壺	25.8 (7.0)	砂粒は砂粒含む	明灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナメ後・縫縫部、頭部構ナデ 縫縫ナメ・口縁部構ナデ・体部ヘラケズリ	
	49	B56-A SP01	土師器 壺	6.7 (17.3)	徑2mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫・体部構ナメ・縫縫頭部 縫縫	
第58回	50	B56-A SP01	土師器 壺	18.4 (8.3)	徑2mm以下の砂粒、あくさり縫合	淡灰褐色 淡灰褐色	体部構ナメ後、口縁部、頭部構ナデ 口縁部構ナデ・体部ヘラナデ	
	51	B56-A SP01	土師器 壺	31.0 (12.5)	徑2mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	体部構ナデ・体部ヘラナデ・指痕压痕	
第59回	52	B56-A SK119	須惠器 壺	13.6 (3.5)	微細な砂粒極少量含む	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ 縫縫ナデ	
	53	B56-A SK119	土師器 壺	20.2 (4.1)	徑1mm以下の砂粒少量含む	淡灰褐色 淡灰褐色	縫ハケメ後、口縁部構ナデ	
第60回	54	B56-A SK119	土師器 移動式輪	6.0 2.9	徑1mm以下の砂粒少量含む	乳白色 乳白色	指ナデ ナデ	
	55	B56-A SK119	土師器 移動式輪	2.5 3.7	徑1mm以下の砂粒含む	乳白色 乳白色	口縁部構ナデ・体部磨滅 指ナデ	完形
第61回	56	B56-A SK120	土師器 壺	11.6 (1.6)	徑1mm以下の砂粒含む	乳白色 乳白色	口縁部構ナデ・体部磨滅	
	57	B56-A SK120	土師器 壺	12.8 (18.0)	徑1mm以下の砂粒、あくさり縫合	淡灰褐色 淡灰褐色	体留めハケメ後、頭部、口縁部構ナデ 口縫ナメ・留め縫ナメ・体部ヘラケズリ	
第62回	58	B56-A SP117	土師器 壺	20.4 (2.8)	砂粒はほぼ含まない	明灰褐色 明灰褐色	縫縫ナデ・口縁部沈縫に窪む・体部放射状暗斑 縫縫ナデ	
	59	B56-A SP120	土師器 片口跡	20.6 (5.0)	微細な砂粒極少量含む	淡灰褐色 淡灰褐色	口縁部構ナデ・体部磨滅 指ナメ	
第63回	60	B56-A SP126	土師器 壺	23.4 (8.2)	徑3mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	口縁部構ナデ・体部ナデ 口縫ナメ	
	61	B56-A 須物包合層	須惠器 壺	9.6 (2.1)	須惠な砂粒極少量含む	乳白色 乳白色	天井部回転ヘラケズリ、縫縫ナデ・天井部欠失 縫縫ナデ	
第64回	62	B56-A 須惠器	須惠器 壺	10.2 (2.1)	須惠な砂粒極少量含む	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ	
	63	B56-A 須物包合層	須惠器 壺	2.1 (2.3)	須惠な砂粒極少量含む	乳白色 乳白色	縫縫ナデ 縫縫ナデ	
第65回	64	B56-A 須物包合層	土師器 移動式輪	10.2 (12.4)	徑1mm以下の砂粒含む	乳白色 乳白色	体部暗ナメ・底座部ナデ 体部ナデ・底座板ナデ	
	65	B56-A 須物包合層	弥生土器 壺	20.4 (8.8)	徑4mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	体部ヘラミガキ後頭部、口縁部構ナデ・口縫暗部剥離あり 口縫暗部・体部摩滅	
第66回	66	B56-A 須物包合層	弥生土器 壺?	6.3 (5.4)	徑3mm以下の砂粒多く含む	乳白色 乳白色	縫縫ナメ 縫縫ナメ	
	67	B56-B SK112	土師器 壺	10.0 (1.3)	砂粒はほぼ含まない	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ 縫縫ナデ	
第67回	68	B56-B SP129	土師器 壺	12.6 (3.5)	徑2mm以下の砂粒、あくさり縫合	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ・底部回転ヘラ切り後ナデ・底座崩あり 縫縫ナデ	
	69	B56-B SP142	須惠器 壺	9.6 (3.3)	徑1mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ・底部回転ヘラ切り? 縫縫ナデ	
第68回	70	B56-B SP138	須惠器 壺	12.8 (2.7)	徑1mm以下の極少量含む	淡灰褐色 淡灰褐色	縫縫ナデ 縫縫ナデ	
	71	B56-B SP138	土師器 壺	16.5 (3.7)	徑1mm以下の砂粒含む	淡灰褐色 淡灰褐色	口縁部構ナデ 口縫部構ナメ	
第69回	72	B56-B SP137	土師器 壺	15.2 (5.1)	徑2mm以下の砂粒、あくさり縫合	淡灰褐色 淡灰褐色	体部暗ナメ後に口縁部、頭部構ナデ 口縫部構ナデ	

第5表 出土土器観察表 (2)

回	番号	遺構名	器種	法量		胎土	色調		調整 (外側) (内側)	備考		
				口徑(cm)	高さ(cm)		(外側)					
				(内側)			(内側)					
第60回	73	B56-B SK105	須惠器	(9.6) 坪	(2.1)	砂粒はほぼ含まない	濃灰色	褐色ナデ				
	74	B56-B SK105	須惠器	-	-		濃灰色	褐色ナデ				
	75	B56-B SK105	土師器	(6.7)	径2mm以下の砂粒含む		濃灰色	褐色ナデ・底部静止ヘラ切り?後にヘラケズリ				
	76	B56-B SK105	土師器	(12.8)	砂粒はほぼ含まない		濃灰色	褐色ナデ	沈縫状に窪む・体部擦痕			
	77	B56-B SK105	土師器	(3.6)	砂粒はほぼ含まない		濃灰色	褐色ナデ	体部放射状彫文後、口縁部下横ナデ			
	78	B56-B SK104	陶器	(7.4) 坪	(3.0)	径3mm以下の砂粒・簡練な砂母片含む	淡赤褐色	褐色ナデ	体部ヘラミガキ・貼り付け高台機ナデ・わざかに朱色北着			
	79	B56-B SK103	土師器	(7.8)	砂粒はほぼ含まない		淡灰色	褐色ナデ	底部ナデ・体部斜面ヘラメ後1条横ナメ、下平ヘラケズリ			
第64回	80	B57-A SK116	須惠器	(11.6) 壇?	(2.6)	粗略な砂粒を極少量含む	淡灰色	褐色ナデ		外面自然剥落 赤褐色 付着		
	81	B57-A SK116	土師器	(15.4) 坪	(3.2)	彫刻なさくさり模様を極少量含む	淡灰色	褐色ナデ				
	82	B57-A SK116	生存土器?	(14.2) 壇?	(2.2)	径2mm以下の砂粒・彫刻なさくさり模様	淡灰色	褐色ナデ				
	83	B57-A SK116	土師器	(33.4) 鍋	(13.0)	径2mm以下の砂粒含む	淡灰色	褐色ナデ	口縁部横ナデ	外側自然剥落 赤褐色 付着		
	84	B57-A SK120	土師器	(20.8) 坪	(3.8)	彫刻な砂粒極少量含む	淡灰色	褐色ナデ	口縁部横ナデ・体部状のナデ			
	85	B57-A	須惠器	(18.8)	-		淡灰色	褐色ナデ				
	86	B57-A SK124	瓦蓋	(1.6)	-	彫刻な砂粒含む	淡灰色	褐色ナデ				
第65回	87	B57-A	須惠器	(10.2) 遺物包含層 坪基	(2.0)	砂粒はほぼ含まない	灰褐色	褐色ナデ・底部凹輪ヘラケズリ				
	88	B57-A	須惠器	(16.2) 遺物包含層 坪基	(1.6)	径1mm以下の砂粒極少量含む	淡灰色	褐色ナデ・上半部欠失				
	89	B57-A	須惠器	(11.2) 遺物包含層 坪	(3.7)	彫刻な砂粒を極少量含む	灰褐色	褐色ナデ・底部凹輪ヘラ切り				
	90	B57-A	須惠器	(13.0) 遺物包含層 坪	3.6	径3mm以下の砂粒を多く含む	淡灰色	褐色ナデ・底部凹輪ヘラ切り				
	91	B57-A	須惠器	(14.4) 遺物包含層 坪	(3.3)	径1mm以下の砂粒含む	灰褐色	褐色ナデ・底部凹輪ヘラ切り?				
	92	B57-A	須惠器	(14.5) 遺物包含層 坪	(3.1)	径3mm以下の砂粒含む	灰褐色	褐色ナデ・底部凹輪ヘラ切り?				
	93	B57-A	須惠器	(15.3) 遺物包含層 坪	(3.0)	径3mm以下の砂粒含む	淡灰色	褐色ナデ・底部ナデ				
第66回	94	B57-A	須惠器	(16.0) 遺物包含層 坪	(3.6)	彫刻な砂粒含む	淡灰色	褐色ナデ				
	95	B57-A	須惠器	(15.6) 高台坪	(1.8)	彫刻な砂粒極少量含む	淡灰色	褐色ナデ				
	96	B57-A	須惠器	(17.4) 遺物包含層 高台坪	(2.6)	径2mm以下の砂粒含む	淡灰色	褐色ナデ				
	97	B57-A	須惠器	(11.0) 遺物包含層 高坪?	(1.9)	砂粒はほぼ含まない	灰褐色	褐色ナデ		外側自然剥落 赤褐色 付着		
	98	B57-A	須惠器	(7.0)	-	径1mm以下の砂粒極少量含む	淡灰色	褐色ナデ・彫刻状文				
	99	B57-A	須惠器	(37.4) 遺物包含層 壇	(3.2)	径2mm以下の砂粒極少量含む	淡灰色	褐色ナデ・彫刻状文		外側自然剥落 赤褐色 付着		
	100	B57-A	土師器	(13.0) 遺物包含層 坪	(3.1)	径1mm以下の砂粒を含む	淡灰色	褐色ナデ				
第67回	101	B57-A	土師器	(11.0) 遺物包含層 坪	(2.6)	径2mm以下の砂粒・彫刻な砂母片極少量含む	淡灰色	褐色ナデ		外側自然剥落 赤褐色 付着		
	102	B57-A	土師器	(12.8) 遺物包含層 坪	(3.5)	径2mm以下の砂粒・さくさり模様を比較的多く含む	淡灰色	褐色ナデ				
	103	B57-A	土師器	(15.6) 遺物包含層 坪	(3.0)	彫刻な砂粒・赤くさり模様含む	淡灰色	褐色ナデ				
	104	B57-A	土師器	(18.0) 遺物包含層 坪	(3.4)	砂粒はほぼ含まない	明茶色	褐色ナデ・底部ヘラナデ				
	105	B57-A	土師器	(18.4) 遺物包含層 坪	(2.7)	彫刻な砂粒・赤くさり模様少量含む	淡灰色	褐色ナデ				
	106	B57-A	土師器	(20.6) 遺物包含層 坪	(3.2)	砂粒はほぼ含まない	淡乳白色	褐色ナデ				
	107	B57-A	土師器	(24.0) 遺物包含層 坪	(2.5)	彫刻な砂粒・赤くさり模様少量含む	淡灰色	褐色ナデ				
第68回	108	B57-A	土師器	(21.2) 遺物包含層 坪	(3.6)	径1mm以下の砂粒極少量含む	淡灰色	褐色ナデ				
	109	B57-A	土師器	(—)	(3.2)	径1mm大の砂粒極少量含む	赤褐色	褐色ナデ				

第6表 出出土器観察表(3)

回	番号	遺物名	器種	法 量		胎土	色調		調整 (外側) (内面)	備考		
				口徑(cm)	高さ(cm)		(内面)					
				底径(cm)	厚さ(cm)		(外側)					
第65回	110	B57-A 遺物包含層 土師器?	土師器	(13.8) 徑1mm以下の砂粒多く含む	密	暗赤褐色 胎土	前赤褐色 体部縦ハケメ後、口縁部、頭部横ナデ 胎土ナラナデ後、口縁部、頭部横ナデ					
	111	B57-A 遺物包含層 土師器?	土師器	(15.9) -(6.4)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 体部ヘラナナデ後、口縁部、頭部横ナデ					
	112	B57-A 遺物包含層 壺	土師器	(15.0) -(6.4)	密	淡赤褐色 胎土	淡赤褐色 口縁部、頭部横ナデ					
	113	B57-A 遺物包含層 壺	土師器	(17.9) -(3.6)	密	淡赤褐色 胎土	淡赤褐色 口縫部横ナデ後、口縁部、頭部横ナデ					
	114	B57-A 遺物包含層 壺	土師器	(9.8) -(4.8)	密	淡赤褐色 胎土	淡赤褐色 口縫部横ナデ					
	115	B57-A 遺物包含層 壺?	土師器	(11.0) -(5.0)	密	明褐色 胎土	明褐色 ナラ・体部胎土粒點付け					
	116	B57-A 遺物包含層 製陶土器?	土師器	(12.4) (5.6)	やや粗 滑	明褐色 胎土	明褐色 口縫部横ナデ、体部指痕痕					
	117	B57-A 遺物包含層 壺	土師器	(7.2) (1.2)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 横ナシテ・貼り付け高台			内面黒色		
	118	B57-A 遺物包含層 壺	土師器	(10.8) -(1.8)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 横ナシテ・貼り付け高台			内面黒色		
	119	B57-A 遺物包含層 鍋?	土師器	- (8.1)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 指ナナデ・斜ハケメ・把手貼り付け時刻痕あり					
	120	B57-A 遺物包含層 平瓦	瓦	(9.8) (3.1)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 ハナナデ?			表面重ね 貼りあり		
第68回	121	B58-A 弥生土器 壺	土師器	- (6.5)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 ハラミガキ後、肩部から頭部へラ施塗線5条以上?					
	122	B58-B 遺物包含層 壺蓋	土師器	(14.4) (3.5)	密	灰 灰	灰 天井部回転ヘラケズリ、縫隙ナデ、天井部欠失					
	123	B58-B 遺物包含層 壺	土師器	(8.2) (2.3)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ、底部回転ヘアクリ?					
	124	B58-B 遺物包含層 壺	土師器	(7.0) (2.9)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ					
	125	B58-B 遺物包含層 壺	土師器	(9.8) (4.3)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ					
	126	B58-B 遺物包含層 高台付壺	土師器	(11.2) (3.2)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ、底部回転ヘラクリ?					
	127	B58-B 遺物包含層 高台付壺	土師器	(13.8) (3.1)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ、底部中央非常に滑らか					
	128	B58-B 遺物包含層 高台付壺	土師器	(14.8) (4.0)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ、底部回転ヘラクリ					
	129	B58-B 遺物包含層 高台付壺	土師器	(12.6) (1.3)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ					
	130	B58-B 遺物包含層 高台付壺	土師器	(10.6) (2.2)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ					
	131	B58-B 遺物包含層 壺	土師器	(6.6) (2.8)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ、底部回転ヘタリ					
	132	B58-B 遺物包含層 鉢	土師器	(19.4) (3.9)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ					
	133	B58-B 遺物包含層 壺	土師器	(18.2) (10.2)	密	灰 灰	灰 縫隙ナナデ、底部回転ヘタリ					
第71回	134	B58-B 遺物包含層 壺	土師器	(7.9) (3.1)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
	135	B58-B 遺物包含層 壺	土師器	(8.1) (2.3)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
	136	B58-B 遺物包含層 鉢	土師器	- (4.0)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
	137	B58-B 遺物包含層 鉢	土師器	(31.4) (7.5)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
	138	B58-B 遺物包含層 縫合陶器?	土師器	(14.8) (1.9)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
	139	B58-B 遺物包含層 壺	土師器	(17.8) (3.5)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
	140	B58-B SE101 遺物包含層 壺	土師器	(19.8) (6.6)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
	141-1	B58-B SE101 遺物包含層 壺	土師器	(21.2) (10.1)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
	141-2	B58-B SE101 遺物包含層 壺	土師器	(6.2) (6.9)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
第72回	142	B59-A 遺物包含層 皿?	土師器	(6.5) (1.8)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
	143	B59-B 土師器 鉢?	土師器	(15.2) (3.3)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					
第73回	144	B59-B 土師器 鉢?	土師器	(7.4) (5.3)	密	淡褐色 胎土	淡褐色 胎土					

第7表 出土土器観察表 (4)

(2) その他の出土遺物

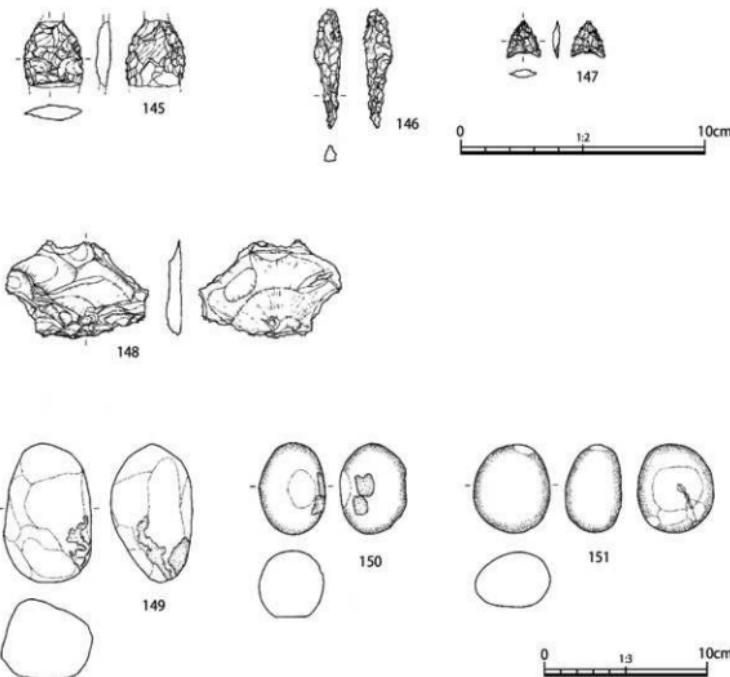
①石製品

出土した石製品は後世の堆積層へ混入した可能性が高いものであるが、図化したものは弥生時代の遺構、あるいは古代の遺構に伴う可能性が高いものである。B56-A 調査区出土の152やB56-B 調査区出土の150は被熱部付近からの出土であり、何らかの作業に使用、または転用された遺物の可能性がある。

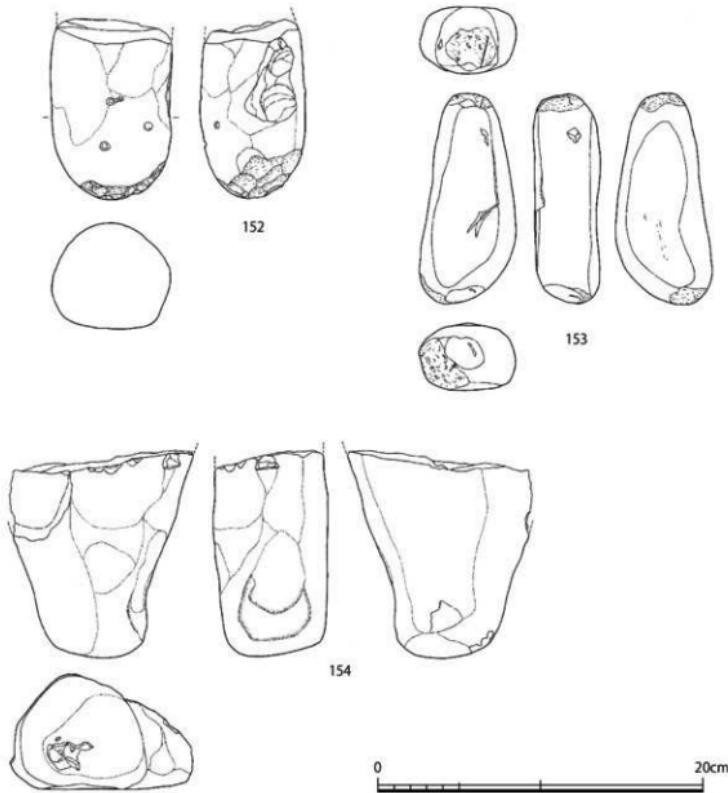
145はB46調査区 SD02の弥生時代の遺構からの出土である。146もB54-C 調査区 SD101の出土でこの溝自体は奈良時代の遺構と考えられるが、南に位置する土坑状の部分には弥生時代中期後半の土器の集積（供獻）があり、時期的に関連する可能性が考えられる。147や148が出土した遺構や堆積層の直近では弥生時代前期の遺構が検出されている。

149～151も弥生時代の遺構に伴う遺物と考えられる。B47調査区出土の149は弥生時代中期の方形周溝墓を構成する溝からの出土であり、当該期に属する可能性が高い。

152～154は被熱状況の顕著な範囲からの出土で、弥生時代のものが混入したと考えるが、154は古代の砥石が井戸材に転用されたものと考えられる。



第76図 出土石製品（1）(Scale 1:2 + 1:3)



第77図 出土石製品（2）（Scale1:3）

遺物番号	遺物名	調査区	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	空中重量 (g)	体積 (cm ³)	見かけの比重
145	石槍	B46	SD02	(2.71)	(2.34)	(0.60)	4.3	1.7	2.53
146	石錐	B54-C	SD101	4.82	1.19	0.76	3.5	1.3	2.69
147	石鎌	B55-B	耕土層	1.49	1.38	0.27	0.2	0.1	2.69
148	削器	B56-A	SK120	3.95	5.85	0.66	13.8	5.2	2.65
149	磨石	B47	SD201上層	8.52	5.36	4.95	315.0	119.4	2.64
150	磨石	B56-B	遺物包含層	5.59	4.233	4.231	115.8	49.3	2.35
151	磨石	B58-B	SE101	5.41	4.74	3.43	123.9	47.6	2.60
152	敲石？	B56-A	SK118	11.03	7.36	6.52	824.2	321.6	2.56
153	敲石？	B58-B	遺物包含層	12.98	5.82	4.15	483.0	181.7	2.66
154	台石？		SE101	12.80	11.27	7.07	1149.1	464.6	2.47
155	軽石	B57-A	SP121	5.54	5.99	4.91	31.9	—	—
156	軽石		遺物包含層	3.59	4.0	3.88	7.9	—	—

第8表 出土石製品一覧

②土製品

1. 漁撈具（土錘・蛸壺）

図化可能であったものを一覧表にした。遺構出土のものもあるが、大半は遺物包含層や後世の耕土層からの出土で、第7次調査B49-B調査区で確認された溝の堆積層からの一括投棄、あるいは集積されたような状況は確認できなかった。

調査地が海岸部に立地することから、出土量は通常の集落と比べて多いものと捉えられるが、時代や時期的なまとまりを得ることは難しく、今回の出土遺物から使用状況や漁の形態を復元することは難しい。

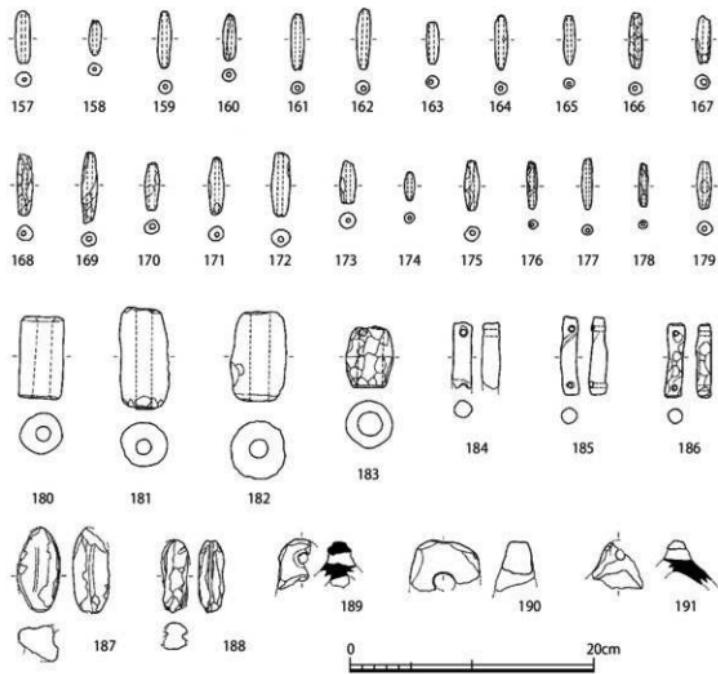
土錘

遺物番号	調査区	出 土 位 置	種類	分類	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	規模	焼成	残存状況	備 考
157	B46	S D02	管状	A1a	4.3	1.2	5.0	中	土	完形	セクション①～4層
158	B49-B	淡褐色細砂	管状	A1a	2.8	1.1	2.8	小	土	完形	東半
159	B50-B	擾乱内	管状	A1a	4.6	1.1	4.2	大	土	完形	
160		灰色砂質土 + 淡褐色砂質土	管状	A1a	3.8	1.1	3.2	中	土	完形	近世耕土(2～3層)
161	B54-C	灰色砂質土 + 淡褐色砂質土	管状	A1a	4.6	1.1	4.1	大	土	完形	近世耕土(2～3層)
162		茶灰色砂質土	管状	A1a	4.9	1.1	(5.3)	大	土	一部欠	古代耕土(4層)
163		茶灰色砂質土	管状	A1a	3.4	1.0	2.7	小	土	完形	古代耕土(4層)
164		暗灰色粘性砂質土	管状	A1a	4.5	1.1	4.4	中	土	完形	近世耕土
165	B55-A	暗灰色粘性砂質土	管状	A1a	4.0	0.9	3.0	中	土	完形	近世耕土
166		淡灰色砂質土	管状	A1a	4.6	1.1	4.5	大	土	完形	西 落ち肩部の砂
167	B55-B	S X01	管状	A1a	3.9	1.2	5.0	中	土	完形	西 落ち
168	B56-B	SX105枠内上層	管状	A1a	(5.0)	1.3	(6.7)	大	土	破片	東・井戸
169		SK114	管状	A1a	5.9	1.2	7.3	大	土	完形	
170	B57-A	茶灰色砂質土	管状	A1a	3.9	1.2	4.3	中	土	完形	
171		暗褐色シルト質細砂	管状	A1a	4.7	1.3	6.1	大	土	一部欠	西半遺物包含層
172	B58-B	S D115-東	管状	A1a	5.2	1.5	10.0	大	土	完形	東半
173		S E101	管状	A1a	(3.5)	1.3	(5.1)	中	土	一部欠	
174	B59-B	重機掘削	管状	A1a	2.3	0.8	1.4	小	土	完形	
175		トレンチ	管状	A1a	4.1	1.2	4.9	中	土	完形	サブトレンチ
176		重機掘削	管状	A1a	3.8	0.8	2.1	中	土	完形	
177	B60	重機掘削	管状	A1a	4.2	0.9	2.5	中	土	完形	
178		第1遺構面検出中	管状	A1a	3.4	0.7	2.1	小	土	完形	
179		擾乱内	管状	A1a	3.9	1.2	4.5	中	土	完形	西半
180	B49-B	暗灰色粘性質土	管状	A1b	6.8	3.5	85.8	大	土	完形	湿地北壁断面回22層
181	B58-B	茶灰褐色砂質シルト	管状	A1a	8.3	3.7	141.3	特大	土	完形	小口側平坦面あり
182		淡灰褐色細砂	管状	A1b	7.3	4.6	169.4	特大	土	完形	小口側平坦面あり
183	B60	重機掘削	管状	A1b	5.0	3.8	52.1	大	土	完形	
184	B56-A	S X01	棒状	B	(5.4)	1.5	(14.1)	大	土	破片	孔径0.5cm
185		茶灰色砂質土	棒状	B	6.4	1.3	13.5	中	土	完形	孔径0.4cm
186	B57-A	S D01下層	棒状	B	6.1	1.2	(11.8)	中	土	一部欠	孔径0.4cm
187		S D02	有溝	Ca	7.0	3.4	(63.3)	中	土	一部欠	
188		遺構面精査	有溝	Ca	6.0	(2.2)	(28.0)	中	土	完形	西半

蛸壺

遺物番号	調査区	出 土 位 置	形状	分類	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	規模	焼成	残存状況	備 考
189	B 50-A	濠検出中	釣鐘型	c類	(4.2)	(2.8)	—	—	須	破片	
190	B 56-A	褐色砂質土	釣鐘型	c類	(4.2)	(5.7)	—	—	土	破片	東端擾乱?
191	B 60	淡褐色細砂	釣鐘型	c類	(3.8)	(4.2)	—	—	須	破片	西半 北壁断面回12層

第9表 出土漁撈具一覧



第78図 出土漁具 (Scale1:4) 157～188：土錘 189～191：錐壺



写真12 第7次調査 B49-B 調査区 深内 土錘等遺物出土状況
左：出土土錘 右：遺物出土状況（南西から）

土錐

種類	分類	形状	規模		
A：管状土錐	A I	胸部の中央がふくらむ形態	大：長4.5cm以上	中：長3.6～4.4cm	小：長3.5cm以下
	A II	円筒状の形態	※	※	※
	A III	球形の形態	※	※	※
	A IV	円錐台状の形態	※	※	※
a類	横幅が長さの二分の一以下のもの				
	b類	横幅が長さの二分の一以上のもの			
B：棒状土錐（有孔土錐・瀬戸内型土錐）			大：孔径0.5cm以上	中：孔径0.41～0.49cm	小：孔径0.4cm以下
C：有溝土錐（工字型土錐）			大：長8.0cm以上	中：長3.1～4.9cm	小：長3.0cm以下
D：付隨孔をもつ有溝土錐			—	—	—
E：有溝管状土錐			—	—	—

＊A～Eの分類は真鍋篤行1993による　＊aとbの分類は和田晴吾1982と逆

＊大～小の分類は任意

銷壺

形状・分類	細分	特徴
a類（コップ形） 底部孔なし	a1	丸底
	a2	平底
	a3	尖底
	a4	全体が球形に近い丸底
b類（コップ形） 底部孔あり	b1	丸底
	b2	平底
	b3	尖底
	b4	全体が球形に近い丸底
c類（釣鐘形）		

＊分類は和田晴吾1982による

文献：真鍋篤行「瀬戸内地方出土土錐の変遷」『瀬戸内地方出土土錐調査報告書』瀬戸内歴史民俗資料館1993
和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『小林行雄博士古稀記念考古学論考』平凡社1982

第10表 出土漁撈具形態分類基準

③その他の土製品

特異なものではB56-A調査区SK119出土の土製紡錘車と考えられる55の存在が挙げられる。SK119は被熱状況が見られる土坑である。55は上端径3.2cm、下端径4.0cm、高さ2.4cm、孔の径は8.0mmである。詳細な用途については不明である。

B54調査区付近からB58調査区の間では、焼土塊とともにフイゴ羽口片が出土しており、B56-A調査区やB57-A調査区など、被熱状況が確認された遺構の分布や鉄滓、金属製品の出土状況と重なる。今回の調査では出土量は少ないものの、羽口片の出土はB58-B調査区にやや集中するようだが、B58-B調査区では被熱状況や鉄滓を伴う遺構の存在は確認していない。地形的に下がり地形を呈することから、西方から流れ込んだものと捉えられる。ただし、出土密度の濃いB56調査区とB58調査区間の距離は約80mはある。

遺物番号	報告書掲載頁	種類	調査区	出 土 位 置	残存状況	備 考
55 第57図55		土製紡錘車	B56-A	SK119	破片	
—		羽口		灰色砂質土	破片	東半 包含層
—		羽口	B57-A	暗褐色シルト質細砂	破片	西半遺物包含層
—		羽口		暗褐色シルト質細砂	破片	西半遺物包含層
192 カラー写真図版2-4		羽口		S K120	破片	
193 カラー写真図版2-4		羽口		茶灰褐色砂質シルト	破片	東半 第1遺構面ベース層
194 カラー写真図版2-4		羽口		黄褐色細砂	破片	東半 第2遺構面上層
195 カラー写真図版2-4		羽口	B58-B	淡灰褐色細砂	破片	西半 第2遺構面上層
— (集合写真の一部：左奥)		羽口		茶灰褐色砂質シルト	破片	東半北畔 第1遺構面ベース層
—		羽口		淡灰褐色細砂他	破片	西半北畔 8～11層第2遺構面上層

第11表 その他の土製品一覧

④金属製品

B54調査区からB58調査区にかけての調査地東半の調査区から鉄製品、とくに鉄釘の出土が目立った。全長がわかるもの、頭部の形状のわかるものは少なく、近世のものに巻頭釘と確認できるものがあるが、古代のものは不明な点が多い。また210は丸頭釘と考えられるが、球状部が大きく、装飾性をもつ飾金具などの可能性もある。219は全長20cmの大型の鍛鉄製品で、その形状から鎧や船釘などと考えられる。奈良時代後半の土器を多く含む遺構面直上の土壤化層から出土しており、船釘とすれば船体の構造などを考える上で興味深い資料である。

銅製品ではB56-B調査区出土のコの字形をした製品233が特筆される。幅5.0cm、折り曲げられた部分から先端までの長さは3.0cm、厚み（高さ）は8.0mmである。鋸留の孔などは確認していないが、鉈尾の覆輪などの可能性を考えている。

出土銅錢には皇朝銭の「延喜通寶」、北宋銭の「治平元寶」が含まれ、『草屋駅家』など官衙に関連する遺物の可能性が高いものであろう。

遺物番号	調査区	R番号	出土位置	堆積層の年代	種類	残存状況	備考
196	B54-B	R-066-1	東の落ち4~6層	江戸時代	釘	良	
197		R-066-2	東の落ち4~6層	江戸時代	鉈滓	小	
198		R-059-1	耕土層2~3層	江戸時代	釘	小	
199	B54-C	R-059-2	耕土層2~3層	江戸時代	釘	小	
200		R-60	耕土層4層	古代	釘	良	
201		R-072-1	耕土層	江戸時代	釘	良	
202		R-072-2	耕土層	江戸時代	釘	小	
203	B55-A	R-073	耕土層・土壤化層?	古代	釘	小	
204		R-074	西落ち肩部	中世?	釘	良	
205		R-114-1	SX01 西落ち	江戸時代	鉈?	小	
206	B55-B	R-114-2	SX01 西落ち	江戸時代	釘	小	
207		R-115	包含層+土壤化層	古代	釘	良	
208		R-203	SX01	古代	鉈滓	小	
209	B56-A	R-217	整地層	古代	鉈?	小	楔状
210		R-235	SK120上層	古代	釘	良	
211		R-238	SK122石の入る炉床	古代	釘	良	
212		R-167	西半包含層	古代	釘?	小	
213		R-169	SX103西水溜め	江戸時代	釘	小	
214		R171-1	東井戸 枠内上層	古代	釘	良	R171-2/ハイキ
215	B56-B	R171-3	東井戸 枠内	古代	釘	小	
216		R-172	東井戸 捶形	古代	釘	良	分割
217		R-180	SP129	古代	釘	小	
218		R-194	SP128	古代	釘	小	
219		R-189	SP138上面	古代	釘	大	鉈・船釘?
220		R243-1	茶灰色細砂包含層	古代	釘	良	
221		R243-2	茶灰色細砂包含層	古代	鉈滓	小	
222		R-245-1	東半包含層	古代	鉈?	大	
223	B57-A	R-245-2	東半包含層	古代	鉈?	大	スス付着
224		R-249	SD101	古代	鉈滓	小	
225		R-252	西半遺構面上	古代	釘	小	
226		R-265-1	SP121	古代	釘	良	
227		R-265-2	SK116	古代	釘	小	
228	B57-B	R-159	SD101	江戸時代	釘	小	
229		R-086	東半第1面ペース層	古代	鉈滓	大	
230	B58-B	R-087-1	西半第1面ペース層	古代	鉈滓	大	
231		R-087-2	西半第1面ペース層	古代	鉈滓	大	
232		R-095	西半第1面ペース層	古代	鉈滓	大	
233		R-168	東半包含層	古代	銅製品（覆輪）		
234	B56-B	R-168	東半包含層	古代	銅錢（延喜通寶）	907年初鑄	
235		SX104	SX104（西水溜め）	江戸時代	銅錢（寛永通宝）		
236	B57-B	R159-2	SD101	中世以降	銅錢（治平元寶）	1064年初鑄	

第61図 掘載

古代：奈良時代後半及び平安時代末

第12表 出土金属製品一覧

(3) 第8次調査出土の動物遺存体

1.概要

今回の調査で出土した動物遺存体は、調査地中央のB52調査区 SK104から出土した骨片と、B53-A 調査区 SD202出土の大型獣の下顎骨と歯の2件である。以下、出土遺構の概要に続き、同定した種・部位・特徴などを記す。

2.出土遺構の概要

① B52調査区 SK104

一辺約0.8mの平面隅丸方形の掘形の土坑で、弥生時代中期後半の土器が出土した。土器には脣部穿孔が認められることから祭祀に伴う遺構の可能性が高い。骨は土器の傍らから出土し、検出時には人骨と考えられていた。埋土及び基盤層が砂のため非常に脆く、骨片の検出作業が困難であったため、周囲の砂ごと持ち帰り、室内で検出作業を行った。

② B53-A 調査区 SD202

溝の埋土最上層の黒褐色粘質土から出土した。この溝の下層部分は土石流の堆積が確認され、出土遺物は弥生時代中期～後期の土器片のみである。下顎骨の出土した層位からは8世紀代の須恵器・土師器が出土しており、奈良時代後半の自然堆積または溝と考えられる。南側で実施した第7次調査から続くもので、先の調査ではウマの肩甲骨片などが出土したほか、バカガイの貝殻が投棄、あるいは集積されたと考えられる状況が確認されていた。

第79図
動物遺存体出土調査区位置図
(B52・B53-A 調査区)
Scale 1 : 400

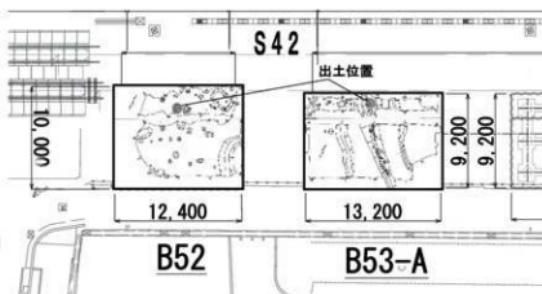


写真13　動物遺存体 検出状況 左：B52調査区 SK104
右：B53-A 調査区 SD202

3. 所見

B52調査区SK104出土の動物遺存体及びB53-A調査区SD202出土の大型獣の下顎骨についての所見を記す。動物種や部位を同定したのは7点である。

種名表

脊椎動物門 Veneroida
哺乳綱 Mammalia
奇蹄目 Perissodactyla
ウマ科 Equidae
ウマ *Equus caballus*

出土位置	種類	部位	部分1	部分2	左右	計測値
B52 SK104	ウマ	上腕骨	遠位		右	
	ウマ	橈骨	近位		右	
	ウマ?	不明	骨幹部		-	
	ウマ?	大腿骨?	近位部		左	
	ウマ?	脛骨	近位部		左	
	ウマ?	中手骨/中足骨	近位部		-	
SB53-A D202	ウマ	下顎骨	下顎体 (歯槽付近)	P2-M3	左	全臼歯列174.5mm、前臼歯列91.7mm、 後臼歯列84.3mm、歯冠高P4(折れ)37.0mm以上

第13表 動物遺存体種名表及び出土部位一覧

① B52調査区SK104出土動物遺存体

先述のとおり埋土から一括して動物遺存体が出土した。動物種の同定を実施した結果、ウマ成体のものと不明大型哺乳類（ウマ?）であることが判明した。ただし、性別や体格、年齢については推定可能な部位が残存しておらず、詳細は不明である。

部位としては、ウマの右上腕骨と同橈骨が交差し、併せてウマと考えられる左大腿骨（?）と同脛骨、同中手骨／中足骨が交連した状態で出土している。また出土した範囲はおよそ縦横50cm×40cmであり、その範囲の中で前肢と後肢が左右方向を離れて出土していることから、解体されたウマの各部位がまだ腱によって繋がったまま、まとめて埋められたものと考えられる。

なお本例は弥生時代の土坑より出土したと考えられた。そこで、年代決定の補強として当該遺存体そのものをサンプルとしたAMS年代測定法による分析を実施したが、遺存体に残存するコラーゲンが埋蔵期間中に変質していたために結果が得られなかった。

② B53-A 調査区 SD202出土動物遺存体

SD202埋土からはウマの左下顎骨が出土した。下顎骨全体は残存しておらず、臼歯列と歯槽骨周辺のみの出土であるため、性別については不明である。臼歯列長等の計測値からは、体高130cm程度の中型馬であり、若齢～壯齡（生後5～12年）の個体と推定される。

第7次調査の出土状況も合わせて推定すると、B52調査区SK104と同じく解体された馬体の一部を投棄したものと考えられる。

4.まとめ

今回出土した動物遺存体はウマと、ウマの可能性が高いもので占められる。とくにB52調査区SK104出土の遺存体の所属時期については、弥生時代のものの可能性が皆無とはいえないが、周辺の状況を鑑みれば8世紀代の所産と考えた方が妥当であろう。B53-A調査区、第7次調査の範囲でも貝類とともに、投棄されたと思われる解体されたウマ遺存体が出土しており、また東に隣接する深江北町遺跡でも8～9世紀に属するウマ遺存体が多数出土している。

以上、隣接する深江北町遺跡が古代山陽道の「葦屋駅家」推定地であることからも、今回のウマ遺存体の出土は単に当地周辺においてウマの利用が行われていたことに留まらず、官制に則った利用も推測することができる。養老厩牧令は、公用でやむなく死んだ牛馬は解体して、皮や肉を売り、本司（牛馬が所属していた国郡司または駅）に代価を納める旨を規定している。今回出土のウマは解体後のものであり、駅家でも解体処理が行われたことを推測するに足る資料といえよう。



写真14 北青木遺跡出土の動物遺存体

- 1～3：B52調査区SK104出土遺存体の反転及び棟出作業
4：B52調査区SK104出土 ウマ右上腕骨と同様骨部分（遺物番号237）
5：B53-A調査SD202出土 ウマ左下頸体（遺物番号238）
6：同 白歯列咬合面
7：同 白歯列舌側

註 出土動物遺存体の調査にあたっては、東海大学海洋学部 丸山真史氏に生物学的な所見をいただき、報告を作成した。記して深謝いたします。

参考文献

- 西中川駿編 1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』
平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告
千種浩・中村大介 2002『馬歯の観察』『深江北町遺跡第9次』神戸市教育委員会 pp.99-104

第3章 自然科学分析

第1節 北青木遺跡第8次調査出土の木質遺物の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

神戸市東灘区に所在する北青木遺跡から出土した木質遺物について樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、木棺や曲物、鍬、柱材、板材など12点である。遺構の時期は、弥生時代～近世と推測されている。

これらの試料から、剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定、写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はマツ属複維管束亞属とコウヤマキ、ヒノキ、スギ、イヌガヤの5分類群、広葉樹はクリのみ1分類群、合計6分類群が確認された。結果一覧を第14表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を写真15に示す。

(1) マツ属複維管束亞属 *Pinus subgen. Diploxyylon* マツ科

写真15 1a-1c (試料番号4)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエビセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亞属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は大である。

(2) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科

写真15 2a-2c (試料番号11)

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。分野壁孔はやや小型の窓状となる。

コウヤマキは、福島県以南の温帯から暖帯上部に生育する常緑針葉高木である。材は耐朽性および耐湿性が強く、強韌である。

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科

写真15 3a-3c (試料番号2)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に2個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性および耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

(4) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科

写真15 4a-4c (試料番号3)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

(5) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch var. *harringtonia* イヌガヤ科

写真15 5a-5c (試料番号9)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。仮道管は薄壁で、晩材部の幅は非常に狭い。樹脂細胞は早材・晩材を通じて均等に分布する。放射組織は単列で2~5細胞高、分野壁孔はトウヒ型で、1分野に1~2個存在する。仮道管にらせん肥厚がある。

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯に生育する常緑の低木または小高木である。材は堅硬および緻密である。

(6) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科

写真15 6a-6c (試料番号6)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

試料番号	R番号	調査区	遺物名	出土層位	備考	樹種	木取り	遺物番号
1	W-002-1	B58-B	曲物側板	SE101	ケガキ有り	ヒノキ	板目	
2	W-002-2		曲物帶板	SE101	ケガキ無し	ヒノキ	板目	
3	W-001-1		割板	黒灰色シルト	割板（大）	スギ	板目	
4	W-001-2	B59-B	割板	黒灰色シルト	割板（小）	マツ属複維管束亜属	丸木	
5	W-001-3		枝	黒灰色シルト		クリ	板目	
6	W-004-1	B49-B	柱材	漆		クリ	半割	243
7	W-004-2		割材	漆		クリ	割材	
8	W-005		鍛	漆		スギ	板目	241
9	W-006		丸杭	漆		イヌガヤ	丸木	242
10	W-007		木棺材	ST205	底板（南材）	コウヤマキ	追延目	239
11	W-008	B47	木棺材	ST205	底板（北材）	コウヤマキ	柾目	240
12	W-009		木棺材	ST205	底板（中央材）	コウヤマキ	追延目	

※遺物番号は図面・写真掲載のもの

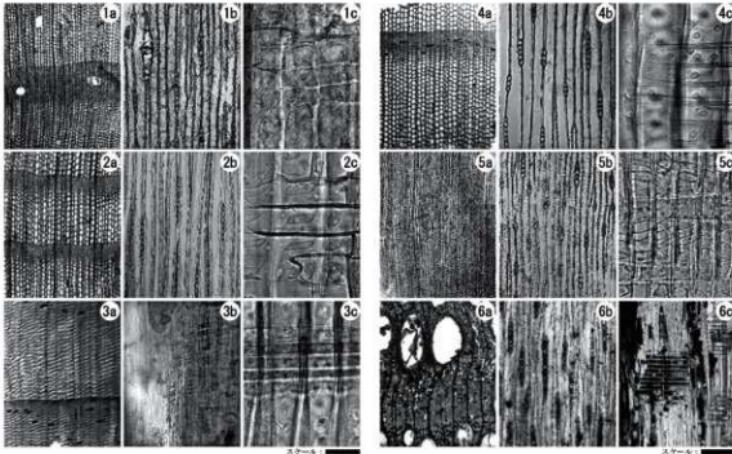
第14表 樹種同定結果一覧

4. 考察

曲物は、側板と帶板のどちらもヒノキであった。ヒノキは割裂性が大きく、加工容易で、保存性が高いため、水場での利用に適している。

木棺材は、3点ともコウヤマキであった。北青木遺跡の7次調査で行われた樹種同定でも、木棺材にはコウヤマキが多く利用されていた（古環境研究所, 2014）。近畿地方では弥生時代以降、木棺にコウヤマキやヒノキを多用する傾向がみられ（伊東・山田編, 2012）、今回の分析結果もこの傾向と一致している。

その他の木製品では、鍔はスギ、柱材はクリ、丸杭はイヌガヤ、枝材はクリ、割材はスギとマツ属複維管束亜属、クリであった。鍔と割材でみられたスギは割裂性が大きく、加工容易な材である。マツ属複維管束亜属も割裂性が大きいが、針葉樹の中では重硬な部類に属している。柱材と枝材にみられたクリは、重硬で保存性が高い。丸杭のイヌガヤは強靭な材質で、なおかつ低木もしくは小高木のため、杭材として丸木のまま利用するには手頃な太さである。



1a-1c. マツ属複維管束亜属(No.4)、2a-2c. コウヤマキ(No.11)、
3a-3c. ヒノキ(No.2)
a: 横断面 (スケール=250μm)、b: 接線断面 (スケール
=100μm)、c: 放射断面 (スケール=25μm)

4a-4c. スギ(No.3)、5a-5c. イヌガヤ(No.9)、6a-6c. クリ(No.6)
a: 横断面 (スケール=250μm)、b: 接線断面 (スケール
=100μm)、c: 放射断面 (スケール=4-5:25μm, 6: 100μm)

写真15 木製遺物の光学顕微鏡写真

参考・引用文献

平井信二 (1996) 木の大百科. 394p. 朝倉書店.

伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学—出土木製品用材データベースー. 449p. 海青社.

古環境研究所 (2014) 北青木遺跡における古環境分析.

「北青木遺跡第7次発掘調査報告書」: 83-102p. 神戸市教育委員会文化財課.

第2節 北青木遺跡第8次調査出土有機物の年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(¹⁴C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村, 2003）。

北青木遺跡は、神戸市東灘区北青木、深江北町に所在する弥生時代～中世の遺跡である。今回、北青木遺跡第8次調査における土層堆積年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行うことになった。

2. 試料と方法

測定試料は、B49-A地区で検出された溝の埋土より出土した植物遺体3点（No1～3）である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

- 1) 蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸(HCl)により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム(NaOH)により二次的に混入した有機酸を除去、再び塩酸(HCl)で洗浄
- 3) 定温乾燥機にて80°Cで乾燥

試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。第15表に測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

3. 結果

加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(¹⁴C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。第16表にこれらの結果を示し、第80図に暦年較正結果(較正曲線)を示す。

1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

2) 放射性炭素(¹⁴C)年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差(±)は1σ(68.2%確率)である。¹⁴C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

3) 暦年代(Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素(¹⁴C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。

暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン／トリウム）年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 13、較正プログラムはOxCal 4.2である。

暦年代（較正年代）は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により 1σ （68.2%確率）と 2σ （95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。（）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、北青木遺跡第8次調査で検出された溝の埋土より出土した植物遺体は、試料No.1が1875±20年BP（ 2σ の暦年代で75-214 cal AD）、試料No.2が1850±20年BP（同88-105 cal AD、121-235 cal AD）、試料No.3が1885±20年BP（同70-176 cal AD、191-212 cal AD）の年代値であった。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代. 日本国第四紀学会, p.3-20.
 中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p.301-322.
 Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves. 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.

試料番号	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
No.1	B49-A 調査区 溝埋土	植物遺体	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	B49-A 調査区 溝埋土	植物遺体	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.3	B49-A 調査区 溝埋土	植物遺体	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

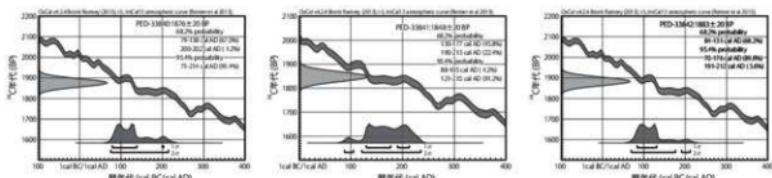
* AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

第15表 測定試料と処理方法

試料番号	測定No (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代（西暦）	
					1σ (68.2%確率)	2σ (95.4%確率)
1	33840	-29.43±0.11	1876±20	1875±20	79-138 cal AD (67.0%) 200-202 cal AD (1.2%)	75-214 cal AD (95.4%)
2	33841	-31.08±0.15	1848±20	1850±20	130-177 cal AD (45.8%) 190-213 cal AD (22.4%)	88-105 cal AD (4.2%) 121-235 cal AD (91.2%)
3	33842	-28.05±0.16	1883±20	1885±20	84-131 cal AD (68.2%)	70-176 cal AD (89.8%) 191-212 cal AD (5.6%)

BP : Before Physics (Present). AD : 紀元

第16表 測定結果一覧



第80図 暦年較正曲線図（暦年較正の結果）

第4章 まとめ

第1節 第8次調査の成果

第7次調査の報告書では、本事業に伴う調査範囲は地質上の分類から以下の3つのエリアに分けられた。

I . 潮汐流（以下、澪）など海の作用を受ける浜提のエリア（B47調査区～B50-A調査区）

－主な検出遺構：弥生時代中期 / 方形周溝墓 弥生時代後期～古墳時代前期 / 濟

II . 安定した浜提（後浜）堆積のエリア（B50-B調査区～B59-A調査区）

－主な検出遺構：弥生時代前期 / 祭祀土坑 中期～後期 / 周溝墓 古代 / 掘立柱建物

III . 海の作用を受けつつラグーンなど後背湿地の形成をみせるエリア（B59-B調査区以東）

－主な検出遺構：弥生時代中期 / 方形周溝墓 中世 / 流路

既往の調査成果を前提として、第7次調査地には弥生時代を通じての祭祀・葬送空間が広がることが確認された。北側に隣接する今回の調査地の調査面積は前回の1/3ほどで、様相は大きく異なるものではなかったが、新たに検出した遺構・遺物を通して見えてくる事象について考えておきたい。まずは先のエリア設定を通して調査成果を概観する。

（以下、第7次調査からの継続性を前提に記述する。調査区を示す場合の記載は「調査区」を省略。）

I . 海の作用を受ける浜提エリア（B46調査区～B50-A調査区）

第7次B47での方形周溝墓の検出を受けて実施した試掘調査で溝を検出したことから、B46での調査を実施した。弥生時代中期の方形周溝墓を検出し、方形周溝墓の溝の埋没後、後期に新たに円形周溝墓が構築されたと推測される状況を確認した。周溝墓の形態ながら墳形を変え、同じ空間に重複して築造される状況が確認できた点は重要であろう。

B47の方形周溝墓は第7次西調査区でSD202が検出されたことにより、墳丘間の東西の規模が9.0mであることが判明していた。今回の調査範囲において北側の周溝は検出しておらず、現時点で南北の検出長が9.0m、南北に長い長方形プランの周溝墓であることが判明した。複数の埋葬施設を検出していることから形態としては妥当であろう。

B48-Bでは中期の方形周溝墓の続きがほとんど検出できず、鉄分の多い砂層が被覆する状況や粘土層の堆積の広がりから、澪の影響が思いのほか広く及んでいたことを確認した。

B49-A～B50-Aでは広範囲で粘土層の堆積を検出し、一部高位で検出される砂面にも澪筋が刻まれる。湿地状の堆積から出土した土器の時期や、採集した炭化物での放射性炭素分析による年代測定から、これら粘土層は弥生時代後期～古墳時代初頭頃に堆積したものと推測される。B48-A西端、西側からの浜提の落ち込み際で弥生時代後期の甕や壺が出土しており、B46と同様に弥生時代後期までは活動範囲としての継続性が認められる。B47で土石流による堆積が確認されているが、海水準低下期に形成された谷付近には渦堆積の上に、澪堆積、河川からの洪水層、風性堆積の砂が重なり、安定した地形は形成されず、弥生時代後期以降には、調査地全体を通して澪の流れ一水際でのみ遺物が確認される状況となる。

B46～B50-Aは安定した中央の浜提の西側で、谷状地形や澪の影響により大規模な後浜堆積物の痕跡は確認されていないが、洪水層の堆積と海水の流入、風性堆積が繰り返される様相の中、弥生時代中期～古墳時代前期の遺構・遺物が確認された。弥生時代中期～後期の墓域である調査地西端のB46・47の調査区は、厚みのある砂堆積上に立地しており、谷状地形や後に澪の影響を受けるものの、それ以前には遺構が広がっていたものと推測される。

II . 安定した浜提堆積のエリア（B50-B 調査区～B59-A 調査区）

B50-B付近から遺構検出面である浜提のレベルが上昇はじめ、B51～B52あたりが現状でもっとも砂面が高くなる。第7次 B50-B SK201で弥生時代中期の台付壺が出土し、第8次 B50-C では同時期の方形周溝墓と考えられる溝を検出した。周溝墓の分布範囲を考える上で新たなデータが得られた。

B51ではSX302・SK302の祭祀土坑と考えられる遺構を確認し、墓域、祭祀空間の様相の顕在化がはじまる。SX302出土の甕には明確な吹き零れ痕があり、今回の調査で出土した供献土器と考えられる土器の中では異彩を放ち、稀な存在となっている。

B52は「北青木銅鐸」埋納土坑の南側に位置し、埋納土坑との距離が最も近い調査区である。体部下方穿孔の広口壺、長頸壺や台付壺など、弥生時代中期後半の供献土器の出土した土坑を3基検出した。土坑ごとに埋納する土器の器種を違えていた可能性も指摘される。また第7次 SD102は方形周溝墓の可能性のある溝である。B51～B52の範囲で検出した土坑からは穿孔土器などの供献土器が出土し、量的なまとまりが認められ、周溝墓以外からの出土の割合が高い範囲である。この浜提上ではこのほか B54-C の土坑からの一括出土が目をひく。

B53-A～B58-B では（飛鳥）奈良～平安時代の古代の遺構・遺物の分布が顕著であったが、逆に東西に長い調査地のほかの調査区では確認されず、集中傾向が認められる。分布域の西端 B53-A SD202では、溝から奈良時代後半の土器片とともにウマの下顎骨が出土した。第7次では大型獸骨の出土、バカガイの貝殻の投棄、あるいは集積の状況が確認されていた。このSD202の下層には弥生時代中期～後期の遺物の混じる土石流の堆積があり、SD202は最上層の堆積である。ほかの調査区でも古代の遺物に混じり、完形の弥生土器の一括出土などがみられた。遺構の切り合いがあるのか、古相の遺物は二次堆積によるものなのか、遺構の重複関係が不明瞭な要因として浜提上部、砂面の土壤化（酸化）の影響が大きい。

また今回、B56-A～B57-B の範囲で第7次では確認されていなかった炉床などの可能性のある被熱箇所や炭化物、炭の入る遺構を検出しており、B58にかけての範囲で少量ながら鉄滓やフイゴ羽口、スサmajiriの焼土塊、釘などの鉄製品が出土している。鍛冶の痕跡の可能性を考えている。第7次調査では掘立柱建物が検出され、周辺での柱穴や土坑の検出は多い。B53-A～B58の範囲には奈良時代後半を中心とする遺構・遺物の広がりが想定され、ウマの解体や鍛冶などを行う職能集団の生業域であった可能性もあり、少量ながら、瓦や綠釉・灰釉陶器、皇朝錢、銅製の覆輪などが出土することから、古代『草屋駅家』に比定される深江北町遺跡などの関係性、活動圏の海側への伸張があったと推測する。

III . ラグーンなど後背湿地の形成をみせるエリア（B59-B 調査区以東）

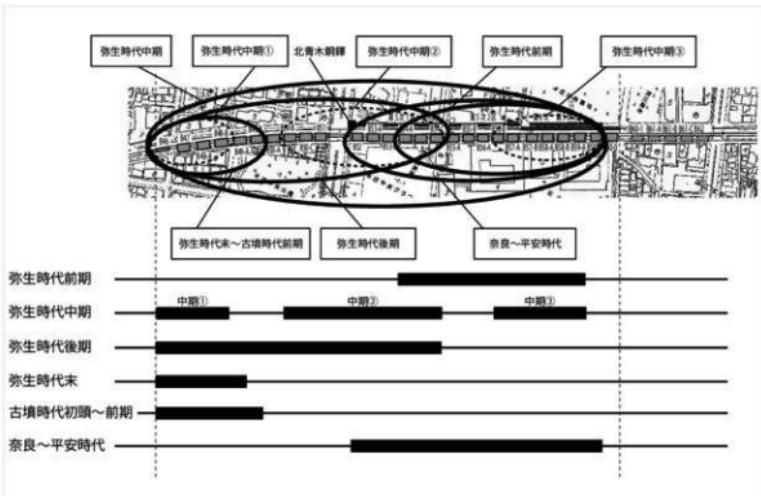
耕土層を除去するとすでに B57-Bあたりから浜提面は南東側へ落ち込みはじめる。B59-Bでは第7次から続く中期の方形周溝墓の検出を期待したが、調査区の大半は粘土層、砂層が堆積し、中世の遺物を含む流路、また溝の影響を受け、わずかに残る浜提面でも埋葬施設などは確認できなかった。B58-B・B59-B では井戸を検出し、第7次 B59-B では底部穿孔の土師器皿や五輪塔（水輪のみ）が出土しており、古代～中世は水際の祭祀空間となっていた可能性がある。

ここまで第8次調査の成果を3つのエリアでの状況として概観した。遺構・遺物の出土傾向に地質分類、想定される自然環境の影響などを対応させると、土地利用の経過の細分化が可能と考える（第81図）。一部重複する範囲はあるが、以下のようにまとめてみたい。

- ①旧谷状地形の西側で、洪水層、のちに溝の影響を受けるが、弥生時代中期～後期は安定した浜提上に墓域が形成された範囲（B46・B47）。
- ②旧谷状地形の東側で、弥生時代中期～後期は墓域と推測されるが、後期以降、溝による湿地状堆積が広がる範囲。古墳時代前期までの土地利用が認められる（B48-A～B50-A）。
- ③溝の影響を受けなかった高位の浜提面で、弥生時代前期・中期・後期と継続して葬送・祭祀空間となる範囲（B50-B～B54-C）。
- ④弥生時代前期・中期の祭祀空間で、奈良時代後半及び平安時代末に職能集団の生業圏、または狹小な居住域の可能性のある範囲（B53-A～B57-A）。
- ⑤洪水や溝の影響を受けながら弥生時代前期～中期の祭祀・葬送空間で、古代～中世には生業域、また水際祭祀の空間となる範囲（B57-B以東）。

自然環境、とくに溝の影響の度合いによって土地利用の状況が表わされるだろう。調査地での遺構・遺物の時代ごとの変遷について、東西方向ではその移りわりの様子が明らかになりつつあるが、弥生時代後期以降の溝の流入など、自然環境の影響により、本来の姿が失われている部分が多いものと推測される。南北方向についてはより不明な点が多い。

検出した遺構・出土遺物から、調査地内の時代・時期ごとの活動範囲を俯瞰すると、調査地の東縁、海岸部から続く内湾した湿地部で弥生時代前期から土地利用がはじまり、中期になると調査地のほぼ全域において遺構・遺物が確認される。祭祀・葬送空間が調査地全域に広がるが、微地形により細分が可能と考えられる。後期の遺構は調査地の西半に集中し、浜提間への海水流入がはじまると、古墳時代前期頃までの遺物の出土地点は溝筋の周辺のみとなり、水際の意識の高さが窺える。その後、奈良時代後半に職能集団の存在と、その生業域が中央浜提東半に展開し、深江北町遺跡など官衙遺跡との関連が想定される状況となる（第86図）。中世以降に全域で陸地化し、近代までは永く耕作地が広がる景観が続く。



第81図 時代・時期別にみた遺構・遺物の分布範囲図 Scale 1 : 3,000

第2節 弥生時代の祭祀・葬送空間について

1. 祭祀・葬送空間の構成要素

第5次調査での銅鐸（埋納土坑）の出土や第6次調査での赤彩土器の出土から、付近が弥生時代の祭祀に伴う空間であることは想定されていたが、第7次調査では中期～後期の周溝墓が検出され、穿孔土器などの供獻土器が多数出土するなど、従前の想定をはるかに凌駕する成果が示された。第7次の調査報告書には付近が祭祀に伴う空間であったことに加え、墓域一葬送に伴う空間と明記された。第8次調査では、第7次調査での検出遺構の広がりや内容の追認、関連する新たなデータの蓄積が期待された。

弥生時代における祭祀や葬送に伴う遺構・遺物の出土は、時代・時期により分布状況に粗密はあるものの、調査地の全域で確認されている。祭祀・葬送空間と認識できる構成要素としては、葬送の場としての墓一周溝墓（埋葬施設）や土器棺墓の検出、祭祀の場としては穿孔土器などの供獻土器を伴う土坑（「祭祀土坑」と表現する）の検出が挙げられる。

前節で調査地での土地利用の推移について概観したが、検出遺構・出土遺物の大半を占める弥生時代中期～後期を中心に祭祀・葬送空間の様相を記しておきたい。

2. 祭祀・葬送空間の様相

●祭祀空間のはじまり

遺構・遺物は中期後半～後期のものが主体であるが、第6次調査では赤彩円形文の広口壺が出土、第7次調査B54-BではSK104出土の多条刻目突帯貼付の壺の胸部に穿孔がみられるなど、弥生時代前期末（I～4様式）の精製土器の存在が調査地の東半に認められる（第82図）。

第7・8次調査地での前期の遺物の出土はB54-A～B58-Aの範囲に限られ、中期後半以降は祭祀・葬送空間となるB54-A以西には認められない。前期～中期前半頃の活動範囲は、調査地が立地する海岸に最も近いであろう浜提の東縁から、第1・2・4次調査地及びその北側に広がる内陸の浜提間に展開するものと推測される。また第8次調査B55-B SK106からは擬朝鮮系無文土器が出土しており、瀬戸内海に沿った交流が想起される。

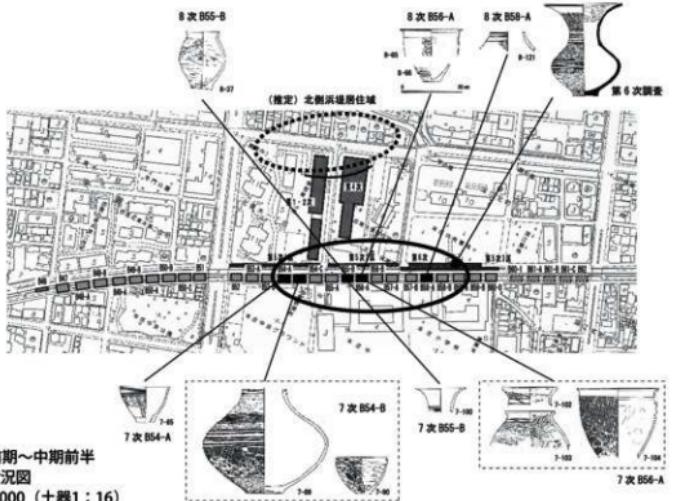
●祭祀・葬送空間の様相－弥生時代中期（盛行期）～後期（縮小期）

中期前半の遺物の出土が調査地東半でみられ、中期後半（Ⅲ様式～Ⅳ様式）には方形周溝墓の築造と、供獻土器を伴う土坑が多数形成されるなど、祭祀・葬送に伴う遺構・遺物の検出範囲は調査地の全域に及ぶ（第83図）。そして後期後半（Ⅵ様式）になると、周溝墓や土器棺の検出はあるが、その範囲は遺物の出土とともに調査地西半に限られ、規模は縮小し、祭祀色は薄れてゆく。この傾向は古墳時代前期まで継続し、範囲はさらに縮小する（第84・85図）。

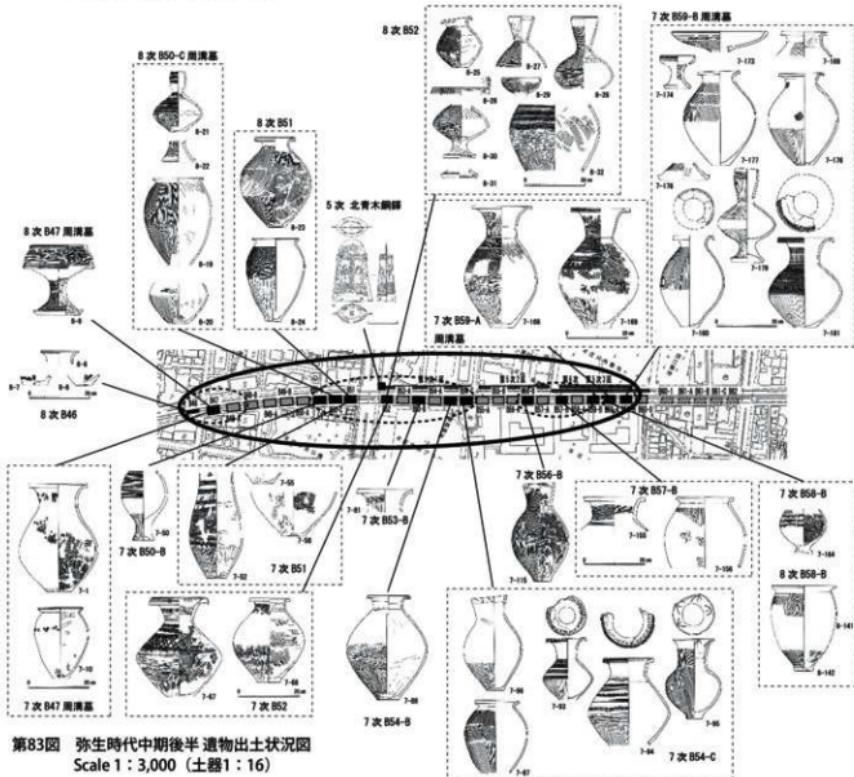
・周溝墓の分布について

葬送空間を構成する周溝墓の検出状況であるが、調査地東端のB59、中央のB50-C～B53、西端のB46～B48-Bの3つの範囲に集中している。第7次調査では中期に属する方形周溝墓で、埋葬施設が検出されたもの2基（B47・B59-B）、周溝のみ検出されたもの3基（B54-C・B59-A×2）が検出された。後期の周溝墓はいずれも溝のみが検出され、方形周溝墓2基（B48-B・B53-B）、円形周溝墓1基（B51）で、調査地内で計8基の周溝墓の検出が報告された。

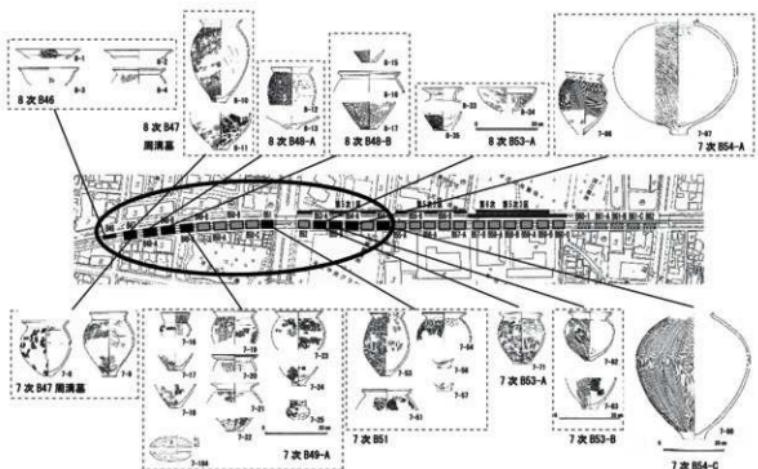
第7次調査区の北側に位置する第8次調査区では、南からの続きを検出した周溝墓2基（B47・B48-B）と、新たに中期の方形周溝墓2基（B46・B50-C）と後期の円形周溝墓1基（B46）



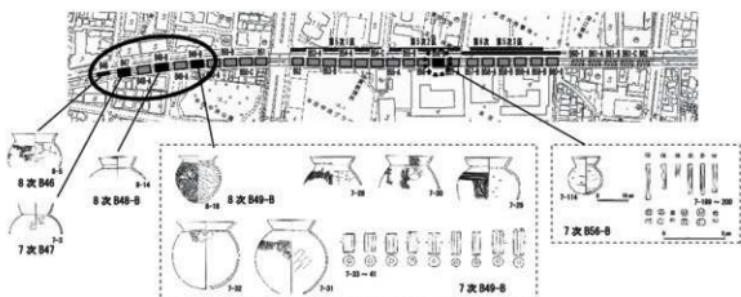
第82図 弥生時代前期～中期前半
遺物出土状況図
Scale 1 : 3,000 (土器1 : 16)



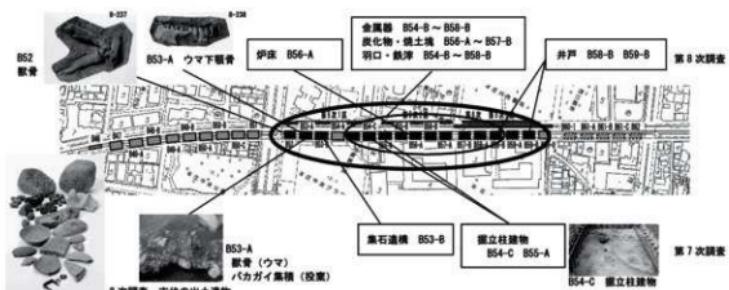
第83図 弥生時代中期後半 遺物出土状況図
Scale 1 : 3,000 (土器1 : 16)



第84図 弥生時代後期～末 遺物出土状況図 Scale 1 : 3,000 (土器1:16 烏形1:8)
各調査区で検出した複数の出土遺物を集成したため、一部、古墳時代初期のものが含まれる



第85図 古墳時代初頭～前期 遺物出土状況図 Scale 1 : 3,000 (土器1:16 玉類1:8)



第86図 古代の遺構・遺物分布図 Scale 1 : 3,000

を検出し、B46では方形周溝墓と円形周溝墓の切り合いが確認された。第7次 B51 SD202など周溝の可能性があった溝状の遺構などは平面長方形の土坑になることが判明した。第7・8次調査区を合わせた範囲でも周溝墓1基の全容のわかるものはなく、唯一、B47検出の中期末葉(IV-4様式)の供獻土器が出土した方形周溝墓の墳丘部が東西9.0m、南北での検出長が現状9.0mで、南北に長い平面長方形の多数埋葬形態の方形周溝墓になることが判明している。今回の調査では木棺墓1基、土坑墓4基の埋葬施設が確認されたが、木棺は傷みがひどく、構造は不明であったが、第7次 B47・B59-B 検出の木棺墓が集成（第7次発掘調査報告書P.125～128）され、判明するものは底板の短辺に溝状の掘り込みを削るか、端部を削り出した段に小口板を据える型式と考えられている。また第7次 B59-B 検出の木棺はいずれも小児用棺と想定される大きさで、第8次調査で北側の続き部分が検出されなかったことで不明な点は残るが、小児用棺のみで構成される特異な周溝墓であった可能性が考えられる。

第7次 B59-A では溝を共有する2基の周溝墓の存在が、SD401～403で構成される方形の区画から窺え、B59-B の南東隅にも土坑墓と考えられる落ち込みを囲う浅い溝が検出されており、群を為す可能性を考えている。西側のB47西調査区のSD202とB46検出のSD02間の距離は約9.0mで、B46とB47の間の未調査部分には、B47で復元した東西長9.0mの墳丘規模と同規模の周溝墓の存在も推測できる。調査地の東西両端には中期の多数埋葬形態の周溝墓と、それに連なる周溝墓の存在する可能性が指摘できる。

一方で、中央の安定した浜堤上で検出した周溝墓は、いずれも一部を検出したのみで不確定な要素が多いが、派生する溝などではなく、単独で存在する可能性が高い。出土遺物も乏しいが、B50-C の溝出土の土器は中期後半(IV様式)、それ以外は後期後半に属するものである。

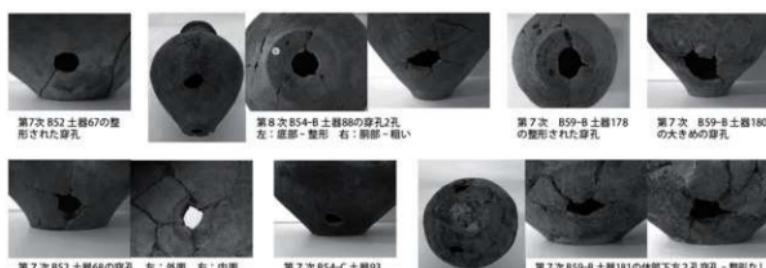
規模を復元した場合、西端のB47の方形周溝墓が短辺9.0mの長方形、東端のB59の周溝墓が一辺8～10m前後、浜堤中央の周溝墓(B50-C・B52・B53-B)は一辺(径)が5～6mとなり、浜堤東西両端に位置する方形周溝墓に規模の上では優位性が想定される。

今回の調査成果と、先の調査で曖昧であった周溝墓の状況を検討し、分布状況を第17表に一覧化した。カッコ付き(□)・(○)の記載は一部が検出されたものであるが、屈曲する溝状の遺構や平面形が円弧を描く遺構を「カッコ」付きで一覧表に加えた。これにより、現時点では中期の周溝墓は方形周溝墓7基(B46・B47・B50-C・B59-A×2・B59-B×2)となり、いずれも平面形は方形である。後期に属する周溝墓は4基で、方形周溝墓2基(B48-B・B53-B)、円形周溝墓2基(B46・B51)となり、円形の墓が加わる。第7次 B52検出の屈曲する溝SD102のみ出土遺物がなく、時期は不明であるが、これを加えると調査地内で検出した周溝墓は12基を数える。さらに北側の第5次調査地の溝状の遺構からは、完形の壺や水差形土器が出土しており、墓域が広がり、墓の数が増すことが予測される。

B46では方形周溝墓の埋没後に円形周溝墓が築かれた状況を確認しているが、周溝墓は通常、溝の共有などによる連続的な配置や形態が踏襲される例が多く、方形から円形へと平面形態が変化し、同一地点で切り合いが生じる例は少ないようと思われる。当地域の墓制を考える上で重要であるが、方形周溝墓の埋没後、どの程度の期間があって円形周溝墓へと変化したのか、想定するには出土資料が不十分であった。ただ、近在の深江北町遺跡、魚崎中町遺跡では庄内期の円形周溝墓(群)が確認されており、その前段階に位置づけることが可能と考えている。

次に第17表には周溝墓に供獻された土器の出土状況を記すとともに、穿孔土器などが出土した土坑の状況を合わせて記した。

調査区	次数	形態		備考	供獻土器(□:周溝出土・○:土坑出土)					備考	
		前頭	中頭		後頭	汎頭	汎頭	右側頭	左側頭		
B46	8次	■	□	→ 方形一円孔							(出土遺物・祭祀の遺物・陪葬の共存土器など)
947	7次	■	□	木挽革4巻+土器革4巻	□ 1 - □ 10 9	□ 11 - □ 19 10	□ 20 - □ 21 11	□ 22 - □ 23 12	□ 24 - □ 25 13	□ 26 - □ 27 14	86番地出土 7-8・小室 V-1-2-3-4回、第5號手本 132002 置石層、8-9番地土器組合・木挽革4巻+土器革4巻 9下部出土 10-11號手土器組合・木挽革4巻+土器革4巻
B48-A	7次										
B48-B	8次										
B48-C	8次										
B49	8次										
B49-A	7次										
B49-B	8次										
B50-A	7次										
B50-B	8次										
B50-C	8次										
B51	7次		○	SOD01(周溝) 南へ	□ 18 ■ 20 ■ 21	□ 52	□ 53 ■ 旗口彫				
B51	8次			SOD01(周溝) 南へ	● 23 ○ 24						
B52	8次			SOD01(周溝) 南へ	● 25 ○ 30						
B53-A	7次										
B53-B	8次										
B54-A	8次										
B54-B	7次										
B54-C	7次			SOD01(周溝) → 土柄と接する	● 93 ○ 94 ○ 95 ○ 96 ○ 97	□ 98					
B55-A	7次										
B55-B	8次										
B55-C	8次										
B56-A	7次										
B56-B	8次										
B56-C	8次										
B56-D	7次										
B56-E	8次										
B57-A	7次										
B57-B	8次										
B57-C	8次										
B58-A	7次										
B58-B	8次										
B58-C	8次										
B59-A	7次										
B59-B	7次	■	□	木挽革4巻+土器革 3巻 高束圧出?	■ 177 ■ 178 □ 179 ○ 180 ■ 181	○ 115	○ 114 (SK107) 115-長脚口縁突起リ 墓・コマ (SK101) 114-土丸高束・ガラス小瓶・石製蓋玉 ○ 79 (SK103) 116-土丸高束				
B60	7次										
中央例		中央例		中央例		中央例		中央例		中央例	
△ 方形周溝器 ○ 圆形周溝器		△ 圆形周溝器		○ 土坑出土の土器 底面リズムのある土器		○ 土坑出土の土器 底面リズムのある土器		△ 土坑出土の土器 底面リズムのある土器		△ 土坑出土の土器 底面リズムのある土器	
参考文献と学術著述・研究動向											



第17表 祭祀・葬送構造及び供獻土器一覧 (写真16 穿孔土器の状況)

●供献土器について－穿孔土器・周溝墓・土坑

中期～後期の周溝墓や土坑から穿孔土器や完形の土器が多く出土し、祭祀・葬送に伴う土器と考えられる。中期に属する土器はIV様式全般にわたるもので、一部はIII-2様式と捉えることができる。後期の土器は後半（VI様式）のもので、いずれも在地産の土器がほとんどであるが、土器の文様や器形、雲母を多く含む胎土の様子などから、播磨や河内、讃岐の影響を受けたか、あるいは搬入された土器を含む可能性が考えられる。一覧化する上で対象としたのは、完形品や破片が大きく欠損することなく復元できた土器、体部下半が残る土器である。祭祀遺構とした場合に土器が埋納されたものか、あるいは投棄されたものか、その投棄行為に祭祀的な目的があるのかといった「目的」についての検討が必要と考えるが、ここでは「祭祀空間に位置する、穿孔土器などが出土する土坑や溝などの遺構」を祭祀遺構と考えておく。

供献土器の出土した遺構の分布状況をみると、東B56-B～B59-B間、中央B54-C～B50-C間の2つの範囲に集中する。東の集中部、B59-A・B59-Bの一括性の高い一群は周溝墓に伴う土器を中心とする。広口壺を主体とし、B59-A出土の土器169、B59-B出土の177の体部下方には焼成後穿孔が1孔、178には底部穿孔が1孔あり、底部穿孔は整形される。B59-Bの土器180の穿孔は他と比較して大きめで、この穿孔形態は神戸市中央区所在の雲井遺跡の周溝墓出土例に似る。B59-B SK304出土の土器181には穿孔が2孔ある。

B59-A周溝墓の西側に位置するB56-B SK107からは長頸壺115が横位で出土し、煤とコゲの付着が認められる。ほかに流水文を付す164などの中后期の土器が出土する土坑が3基ほど確認されるが、この範囲、浜提の東端付近では後期の遺構・遺物は確認していない。

もう一方の集中箇所はB50-B～B54-Cの範囲で、安定した浜提の中央西寄りに位置する。土器は土坑からの検出率が高く、中心となるB52では土坑を4基検出しており、第8次SK104から体部下方穿孔の広口壺1点と大型の壺の口縁部片が出土、SK105からは長頸壺2点と脚部を欠く高环1点が出土した。高环は精製品で器表は光沢をもつほどにミガキ調整が施される。SK106からは台付長頸壺1点と同器種と考えられる脚部が出土した。これらの土器の出土状況からSK104には壺、SK105に長頸壺、SK106には台付壺が1個ないし2個と、同形器種の埋納が意識された可能性を想定している。第7次SK102からも壺2個が出土し、いずれも体部下方を穿孔し、土器67の焼成後穿孔は孔の縁を整形する。底部を穿孔する土器の穿孔部の縁は基本的に整形され、第7次B54-B SP105出土の壺88の場合は、体部下方と底部に2孔の穿孔があり、底部穿孔のみ整形される。B54-Cの長頸化した広口壺は多装飾で、直口壺にヘラ（記号）描きがみられ、B50-Bの台付壺、B50-Cからも装飾性の高い細頸壺21が出土する。同形器種の埋納や装飾系土器の埋納、丁寧に穿孔が整形された土器の埋納が意識されたと考えられる。

第7次B54-Cの溝SD101の一部、土坑状となった落ち込みから供献土器と考えられる土器が一括出土し、周溝と考えられていたが、B46・B47・B59検出の周溝墓をはじめ、いずれの周溝墓も溝底は平らで、深さは一定している。SD101の上層埋土からは奈良時代の遺物が出土し、溝の南端では壺棺と考えられる土器87が出土している。浜提上での土壤化の影響を加味すると、土器群の出土した土坑と壺棺墓、奈良時代後半の溝が切り合った状況と推測している。

安定した浜提面ではB55～B58の間で古代の遺構が多く検出されているが、この範囲での弥生時代の遺構・遺物の検出は少なく、同じ高位の浜提面であるB52などは、弥生時代の遺構面は後世の遺構面と同一面となる。弥生時代の遺構は削平された可能性もあるが、B54-Cの状況をみると、同様の遺構があれば検出される可能性は高く、周辺での後世の遺構への遺物の混入

も認められないことから、安定した地盤ながら、もともと弥生時代の遺構の空白地帯であったと捉えておきたい。反対に浜提の西半は、後期以降の溝の形成により中期の面が失われた可能性が高い。溝堆積から弥生土器は出土していないが、溝の規模を考えると痕跡が残る可能性は低いだろう。B48-B 検出の方形周溝墓以東、B50-C 検出の周溝墓と考える溝との間の様子がはつきりせず、溝の形成という自然環境の変化が大きく影響した点が残念である。

銅鐸出土地の周辺に、多様な供獻土器が埋納される土坑が集中することは重要である。銅鐸埋納坑は、その検出状況から複数回の祭祀・埋納行為が想定されている。共伴遺物が少なく、祭祀方法に不明な点が多いが、最終的な銅鐸の埋納時期は後期以前と推測され、銅鐸の型式も中期中葉以降、継続的に祭礼が執り行われた空間が存在したことの傍証となり得る。第17表に掲載した供獻土器のうち、周溝墓出土土器中の穿孔土器は22点中7点、祭祀土坑出土土器中の穿孔土器は20点中6点でともに約3割を占め、土坑からの出土率は埋葬施設並みに高いものであった。南北方向での遺跡の様相が判然としない状況ではあるが、調査地で最も高い浜提面はB52付近であり、仮に今の地形が弥生時代の地形を記憶しているとすれば、周辺を踏査した状況では銅鐸出土地及びB52周辺から北側が高く、祭祀空間の中心に位置することも考えられる。直近のB53-Aで土石流の堆積が確認されるなど、北側の小河川の影響を含め、旧地形の復原は市街地化した中では難しいものであるが、重要なエリアになることに変わりはない。

●祭祀空間の展開

周溝墓や土坑出土の土器は、中期後半に属するものがIV様式全般、後期の周溝墓出土の土器は後半（VI-0・1様式）のものが主体である。中期の土器には、第7次B59-A・B59-Bの方形周溝墓に伴う供獻土器やB52の土坑出土の土器にIII様式と捉えられるものがあり、III様式の段階に浜提東端で周溝墓が築造され、浜提中央で祭祀土坑の形成がはじまる。IV様式の範疇、中期後半を通じて祭祀・葬送行為が継続し、後期の段階では祭祀土坑の存在は認められない。方形周溝墓は安定した浜提上ではなく、湿地の縁辺部や谷状地形の影響を受けやすい、地形的には安定しない浜提東西端や、溝形成以前の窪地に近いような場所に築造されたようで、安定した浜提面では土坑を中心とした祭祀が行われ、土坑の検出数、その密集度を考えると、銅鐸出土地南側が重要な位置を占めるものと考えられる。

後期の段階には、第8次B47 SD201（周溝）の埋土最上層では壺が破碎され、近接するB46では方形周溝墓の埋没後に円形周溝墓が築かれ、浜提中央の祭祀土坑が検出されていた範囲では小規模な周溝墓の築造がみられるが、土器棺墓以外に明確な供獻土器は出土していない。

後期以降、遺物の大半は溝堆積からの出土や土石流への混入など、自然地形一水辺での出土となる。海平面の上昇に伴い、徐々に墓域の形成が困難になりつつあった状況で、銅鐸の最終埋納が行われていたとすれば、周辺の大規模な祭祀の終焉を迎えたものと思われる。溝からは精製土器とともに鳥形木製品が出土し、古墳時代初頭～前期頃にも溝の周辺やB46・B48-Bなど、後期の周溝墓の埋土最上層に掘り込まれた土坑からは土器が単体で出土する。第7次B56-A SX01で小型丸底壺とガラス小玉、石製管玉の出土が確認されたが、8世紀代の遺物が共伴するなど、遺構の切り合いや二次利用の可能性が考えられる。いずれにしても土器が供獻されたと考えられる遺構はほとんどなく、祭祀の形態は明らかでないが、遺物の出土は水辺に限られており、祭祀・葬送空間としての様相はほかに認められない。

以上、今回の調査のみでは祭祀・葬送空間の全体像がつかめる状況ではないが、調査地内ではおおよそ上述のような動きがあったのではないかと現時点では捉え、推測している。

■祭祀遺構にみられる諸事象－覚書－

●“赤”の意識

B46で方形周溝墓に伴う溝 SD02の東辺を掘削中、埋土から赤色チャートの破片の出土をみた（巻頭カラー写真2-2参照）。重量にして130gほどであるが、溝底中央の窪みや墳丘裾の下層の堆積層から出土した。チャート片が集積されたものか、墳丘上に撒かれものが流れ込んだのかは明らかでないが、“赤”色を意識した痕跡でないかと推測している。

穿孔土器や装飾系土器、精製土器など、供獻土器と考えられる土器の表面の色調に赤みが強いように感じるものがある。六甲山南麓出土の土器は淡い褐色の色調のものに加え、比較的赤みがかったものが多いとされる。風化花崗岩や赤クサリ礫の影響と思われるが、祭祀遺構出土の、穿孔土器を含む供獻土器と考えられる精製土器などにその傾向を感じられた。

表面観察で赤色顔料の塗布が予想されたB50-C出土の土器21は櫛描文の多装飾の細頸壺で、土器の片側全面と対面の一部で赤みを強く感じたもので、デジタル顕微鏡（×約200倍）での観察の結果では、櫛描文の凹みなど顔料が残り易い部分でもその痕跡は確認されず、感じた赤みは感覚的なものであったが、祭祀的要素の強い土器は色調計測などを行い、客観的なデータの提示が必要であり、胎土分析や焼成方法の検討も必要と考える。供獻土器と考えた土器は肉眼観察でも胎土中に赤クサリ礫を含むものが多く、間接的な方法－赤色顔料などを用いない“赤”の意識の表象を考える上でヒントとなる可能性を考えている。

●吹き零れの意味－煮沸

B51 SX302出土の土器24には顕著な吹き零れ痕跡が認められた。SX302は平面長楕円形の土坑で、土器は土坑の底から横位で出土した。土器の器表にはうすく煤が付着し、口縁部下端から胴部中ほどに筋状の白色の吹き零れの痕跡が顕著に残っていた（写真図版15-2、P.29写真7）。煤の付着状況や内面のコゲ痕から土器の使用頻度は低く、強いていえば使用は一度切りの可能性が考えられる。居住域に伴う遺構でないことから、供獻土器として搬入されたか、未確認の火を焚いた痕跡が周辺にあり、祭祀に使われた可能性も考えられる。

第7次B54-Cで出土した土器97やB56-Bの土坑出土の土器115、B59-Bの方形周溝墓出土の土器177、第8次B50-C SD01出土の甕にも煤やコゲの痕跡がみられ、使用頻度の比較的高いものも多い。少ない使用回数と考えられる土器の埋納が示す意味は明確ではないが、祭祀のために持ち込まれたか、この場で祭祀が行われた可能性を考えている。穿孔、破碎、そして煮沸。ここでは明らかにし得ないが、様々な状況で埋納される土器の状況を提示しておき、分類化や祭祀のあり方を検討する上での材料としておきたい。

3. 小結

第7・8次調査において、周溝墓や土坑の検出と穿孔土器などの出土、土器棺墓、鳥形木製品、小型丸底壺や石製管玉・ガラス製小玉の出土など、確認した祭祀的要素は多岐にわたる。居住域は未確認であるが、集落域の周縁、海辺という特徴的な立地により、弥生時代～古墳時代前期を通じて祭祀空間としての認識が継続していたと考えられる。ただ様々な状況が「…可能性がある」「…推測される」と表現せざるを得ない状況であり、さらには銅鐸の出土土地という観点からの考察が不十分であったことは反省すべき点である。今後は銅鐸の出土状況（集落域や墓域といった出土地の性格、検出遺構や自然環境など）など、他の銅鐸出土遺跡との比較を行うことも必要であり、北青木遺跡の性格を考える上で重要と考えている。

第3節 北青木遺跡周辺における遺跡の動向

ここでは北青木遺跡周辺の歴史的環境の項として、これまでの北青木遺跡での調査成果をもとに、芦屋川西岸から住吉川東岸にかけての地域を中心に近隣の遺跡の様相と動向についてみてみたい。

①縄文時代晚期～弥生時代前期

縄文時代晚期後半の突帯文期には、北青木遺跡、森南町遺跡、本山遺跡、本庄町遺跡の各遺跡で遺物の出土が確認され、芦屋市若宮遺跡では遺構に伴い突帯文土器が出土している。突帯文期最終段階の水走式土器は、北青木遺跡、森南町遺跡、本山遺跡で出土している。本山遺跡では第19次調査で弥生時代前期初頭のI様式古段階の土器と、木製農耕具および未製品が共伴し、大阪湾岸地域における水稻農耕開始期の基準資料とされている。弥生時代前期は、本山遺跡で掘立柱建物、貯蔵穴群が検出され、前期後半～中期初頭には芦屋市寺田遺跡で竪穴建物、貯蔵穴群が検出されている。両者は弥生時代を通じて集落の継続が確認でき、当地域における拠点集落として位置づけられる。

北青木遺跡では、第1・4次調査で前期前半（I様式前半）の土器が出土しているが、4条のヘラ描沈線などの多条化傾向を示す甕などから、本山遺跡よりも後出する段階に位置づけられる。第6次調査ではB59-B北側付近で前期末（I-4様式）の赤彩の広口壺が出土し、第7次調査B54-A、B54-B、B56-Aで前期後半～中期初頭の遺構、遺物が確認されている。今回B55-B・SK106から出土した「擬朝鮮系無文土器」（松菊里式系土器⁽¹⁾）の壺は特筆されるもので、近隣では本山遺跡の流路からと尼崎市東武庫遺跡で前期の方形周溝墓周溝からの出土例がある。松菊里式系土器は、朝鮮半島の無文土器である松菊里式土器の影響が考えられ、前期～中期初頭に北部九州から瀬戸内海沿岸を中心に分布がみられる。北青木遺跡の性格を考える上で注目される遺物であるといえよう。

②弥生時代中期

北青木遺跡では中期後半に、方形周溝墓・土器棺墓など墓域としての利用が始まり、第5次調査で検出された銅鐸埋納遺構など、祭祀空間としての側面も持ち合わせる状況となる。第5・6次調査の成果も合わせると、B46～B59-Bにかけてほぼ全域で遺構・遺物が確認される。方形周溝墓はB46・47・48-Bの一群と、B52・53-B付近、B59-A・B付近の3つのまとまりが確認できる。B47の方形周溝墓は木棺墓4基、土坑墓4基の埋葬施設、B59-Bの方形周溝墓では木棺墓4基、土坑墓3基の埋葬施設が確認された。両者は共に複数埋葬であり、組合せ式木棺の棺材が遺存していた。棺材はB47がコウヤマキ製、B59-BはST303がヒノキ製の他はコウヤマキ製であり、ST303の性格は一考を生じる。棺の形態はすべて小口板が底板上で組み合わさる、福永伸哉氏の分類II型（福永1985）に相当する。

B47方形周溝墓ST203やB59-B方形周溝墓の木棺は内法長1m前後の小型棺であり、特にB59-Bはすべて小型棺である。これらは小児棺ともみられるが、これまでに小児棺のみで構成される周溝墓の例は確認されておらず、今回の調査でも新たなデータを得ることはできなかった。周辺の様相を含め、今後の課題である。また、B46では中期の方形周溝墓を後期の円形周溝墓が切って築造している。B53-B方形周溝墓の溝（SD101）でも中期（IV様式）の広口壺と後期後半（VI様式）の甕が出土しており、周溝の形状と埋土の堆積状況にB46との共通点が見

られることから、同様に中期の方形周溝墓を後期の円形周溝墓が切る築造の可能性がある。

B47の方形周溝墓の溝（SD201）からは、中期後半（IV - 4様式）の複合土器1点が出土した。鉢と脚部が複合した器形で、神戸市内では灘区滝ノ奥遺跡、伯母野山遺跡などに類例がある⁽²⁾。

B51・B52・B54-B・B56-B・B59-Aには、穿孔した土器の埋納などがみられる。第5次調査でもB57-A北側付近で土坑への壺の埋納が確認されており、調査地一帯の祭祀空間としての土地利用が想定される。B52北側付近で検出された銅鐸（扁平鉗式四区袈裟襴文銅鐸）埋納構は、複数回の埋納行為（最終埋納はIV様式と考えられる）が想定され、付近は重要な祭祀空間であったことが推測される。

中期には、芦屋市若宮遺跡で中期前半（II様式）、本山遺跡で中期半ば（III様式）の竪穴建物が確認され、井戸田遺跡、森北町遺跡が出現する。本山遺跡は、JR 摂津本山駅南東側で中期～後期の遺物が多量に出土しており、付近に居住域が推定される。また中期には、低地部で銅鐸（扁平鉗式四区袈裟襴文銅鐸）の埋納が行なわれている。埋納地点は集落の南側縁辺部と推定され、近くには大型石庖丁や大型蛤刃石斧、砥石などの石器埋納土坑も確認された。本山銅鐸の埋納は、北青木銅鐸とほぼ同時期とみられ、両者は同一地域における平野部での銅鐸埋納例として注目される。

一方、中期以降には六甲山南麓に多くの高地性集落が営まれる。当地域では芦屋市会下山遺跡、城山遺跡や神戸市東山遺跡、金鳥山遺跡、保久良神社遺跡、荒神山遺跡などがある。いずれも大阪湾を臨む、標高100～200mの眺望の利く峻険な尾根上に所在する遺跡である。これらは中期後半（IV様式）に盛行し、後期へと継続する。その性格は「政治的、軍事的事態を如実に反映した軍事的緊迫」（寺澤2003）に対応するものとされる。ここでは詳しく触れないが、中期後半段階に起きた大きな社会変化が、高地性集落の成立、集落の動向、銅鐸の埋納などに大きく連動しており、この時期における北青木遺跡の性格には、多くの検討課題があることを指摘しておきたい。

③弥生時代後期

北青木遺跡では、先に述べたようにB46、B53-Bで中期の方形周溝墓を切って後期の円形周溝墓が築造される。同一の墓域内の墳形の変化とも受け取れ、ここには大きな変革がみてとれる。B51～B54-A付近にも溝や円形周溝墓、土器棺墓のまとまりがあり、B48-A～B50-Aの堤間湿地の状況から、後期には堤間湿地により隔てられた2つの墓域が想定される。この他、B48-A、B49-Aの溝、B53-Aの溝（SD203）などから、後期の遺物が出土しているが、居住域の存在を示すものではなく、引き続き墓域としての利用が考えられる。

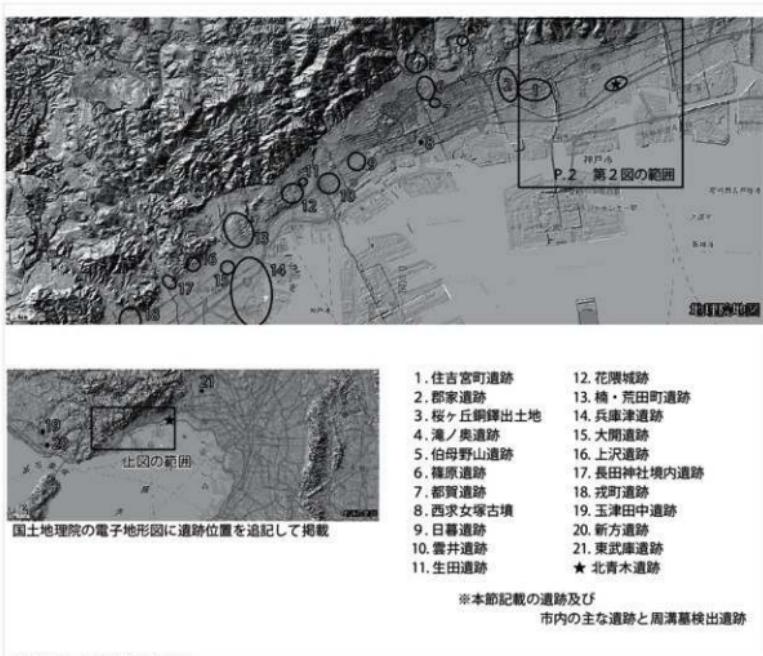
弥生時代に主体的である方形周溝墓に対して、円形周溝墓については播磨地域などの「円形墓」の卓越が、「円形優位の地域色」（岸本1998）としても捉えられてきた。しかし一方で、播磨などの中・東部瀬戸内地域については、階層差への発達が認められる北部九州とは違い、円という形状観念であること以外には、基本的に墓地構造上は方形周溝墓との差が考えられないとの指摘（寺澤2011）もある。中・東部瀬戸内地域では中期後半以降に円形墓の出現頻度が高まり、大形化する例が生じるが、西摂地域では大形化は少なく方形周溝墓との群在は知られていない。

同一の墓域の中で墳形が「方形」から「円形」へと推移する現象は、円形が卓越する瀬戸内地域との接点とも言える西摂地域の墓制を考える上で大きな課題をもつ。北青木遺跡の北東に

確認されている深江北町遺跡の円形周溝墓群は、庄内期の築造で共有する周溝を持ち、すべて単葬である。北青木遺跡の次段階に位置づけられ、円形周溝墓と単葬のみで構成される状況は両者の性格に一考を生じる。

北青木遺跡における後期の集落域については、これまでにその存在が明らかではないが、第4次調査で調査区北側の浜堤上に、後期の土坑などの遺構が濃密に確認されており、集落域は北青木1丁目北端から本山南町2丁目南端付近に存在する可能性が考えられる。

後期には芦屋市月若遺跡、神戸市森北町遺跡、岡本梅林古墳、本庄村遺跡などの各遺跡で集落が営まれ、当地域では後期後半以降に拠点集落の解体、高地性集落の消滅が進む（森岡2001）。本山遺跡は縮小し、新たな拠点集落としての森北町遺跡の存在が大きい。森北町遺跡では後期末～古墳時代初頭にかけて、集落の形成と東海・河内・山陰・吉備などの各地方から土器の搬入があり、他地域との交流を伴う新たな拠点集落としての姿が浮かび上がる。また、中期に集落として縮小傾向であった芦屋市寺田遺跡は、遺跡の東半と月若遺跡の南端付近に新たに集落の形成が認められ、付近の溝からは多量の遺物が出土している。これもまた、新たな現象のひとつと捉えられよう。



第87図 主な遺跡位置図

④古墳時代

古墳時代には第7・8次調査でB49-Bの溝、B54-Aから布留式の甕などが出土し、B56-Bにおいて、第7次調査で平安時代の溝からであるが、小型丸底壺に納められたとみられる石製管玉、ガラス小玉が出土しているものの、顕著な遺構は確認されておらず、居住域などの実態は不明である。当地域では、3世紀後半における西求女塚古墳（前方後方墳：全長98m）の築造に始まり、4世紀前半のヘボソ塚古墳（前方後円墳：一辺63m）の築造に至る、住吉川以西における造墓期間に古墳の築造は確認されていない。

5世紀後半以降、いわゆる「初期群集墳」の段階には、芦屋市三条岡山、芦屋廃寺下層遺跡で埴輪片が出土しており、付近に古墳の存在が推定されている（森岡1988）。神戸市西岡本遺跡では群集墳が確認されている。第2次調査では5世紀後半の円筒埴輪列が検出され、前方後円墳の存在が推定されており、また第1次調査では5世紀末の埴輪を有する10号墳（方墳：一辺6.4m）から、6世紀後半の横穴式石室を埋葬施設とする古墳群への変遷が確認されている。6世紀後半には、岡本梅林古墳群や鴨子ヶ原古墳群、生駒古墳など、横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が、六甲山南麓に数多く築造されたとされるが、その多くは開発に伴う消失により、内容の分かるものは少ない、芦屋市城山・三条古墳群は、ミニチュア竈形土器の副葬などから、渡来系集団との関連が指摘されている（森岡2002）。

古墳時代には芦屋市寺田遺跡、月若遺跡が古墳時代を通じた集落遺跡であり、中期～後期には芦屋市三条岡山遺跡、寺田遺跡、神戸市域では住吉川西岸の郡家遺跡、住吉宮町遺跡が盛行する。

⑤飛鳥時代～平安時代

北青木遺跡における飛鳥・奈良～平安時代は、B52～B53-BおよびB55-B～B57-A付近に遺構・遺物の分布のまとまりが確認される。ただし、B54-B～B56-Bは浜堤の高まりとみられ、後世の耕作等に伴う削平を受けており、弥生時代～平安時代の遺構が同一面で検出されている。

奈良～平安時代については、特にB55-B～B57-Aに濃密な遺構の分布がみられる。B56-Aでは、調査区中央の東西幅6m程の範囲に、炭混じりの砂質土の堆積が認められ、火の使用を伴う整地の可能性がある。SK120には表層の硬化面の下にさらに壁面が一部硬化する箇所もあり、繰り返し火が使用された可能性がある土坑である。隣接するSK119からも奈良時代の土師器竈、須恵器が出土しており、奈良時代の遺構と考えられるが、これら一連の遺構の性格は検討を要する。また、奈良～平安時代には濃密な遺構分布が認められ、浜堤上での土地利用と進出が想定されるが、瓦や綠釉陶器などの出土から、一般的な集落とは異なる性格が考えられる。

古代律令制下、北青木遺跡の所在する一帯は摂津国兎原郡に属した。住吉川西岸の郡家遺跡は、「郡家」の地名から兎原郡衙の所在地に比定され、奈良時代の掘立柱建物が検出されている。また、大型掘立柱建物が検出され、「和同開珎」などの銭貨や円面鏡が出土した芦屋市津知遺跡と、掘立柱建物群が検出され、「驛」、「大垣」などの墨書き土器や駅長宛の木簡などが出土した深江北町遺跡は「草屋駅家」の存在が有力視されている。奈良時代前半には芦屋市芦屋廃寺が造営され、金堂基壇と考えられる遺構が確認されている。付近には芦屋廃寺と同様の瓦が芦屋市寺田遺跡、津知遺跡、神戸市深江北町遺跡で出土している。また、芦屋市三条九ノ坪遺跡における「壬子年」銘木簡、寺田遺跡で「大領」、「小領」墨書き土器が出土するなど、古代山陽道に沿うこの地域では、官衙的な要素の高い遺跡が集中する。飛鳥～奈良時代には芦屋市月若

遺跡、寺田遺跡で掘立柱建物が検出されている。また、小路大町遺跡の奈良時代前半の祭祀遺構へのヒヨウタンの埋納、馬鎌の出土は、農耕に伴う祭祀例として特筆されるものである。

平安時代は芦屋市寺田遺跡、三条九ノ坪遺跡、神戸市本山中野遺跡、魚崎中町遺跡などで掘立柱建物が確認されている。

⑥中世以降

中世以降は遺構・遺物共に、極めて希薄であると言わざるを得ない。顕著な遺構は確認されておらず、耕作溝が複数箇所で確認されることから、耕地としての土地利用が想定される。

平安時代末～鎌倉時代における近隣の遺跡の状況は、芦屋市月若遺跡、寺田遺跡、神戸市森北町遺跡、西岡本遺跡など、六甲山地から派生した丘陵端部の遺跡で、掘立柱建物が検出されている。寺田遺跡では12世紀後半頃の中国産黄釉鉄絵盤が出土し、出口遺跡では中国製青磁碗、土師器小皿、鉄刀を副葬した13世紀の木棺墓が確認されている。扇状地扇端部および海岸に近い臨海部での集落遺構についてのデータが少ない現状であるが、中世の遺跡は、六甲山麓からの傾斜変換点付近から扇状地扇央部にかけて立地する傾向が窺われる。

註

- (1) 中村1995による。また「擬朝鮮系無文土器」については、森岡秀人氏から多くのご教示を得た。
(2) 複合土器については、森岡秀人氏・黒田恭正氏から多くのご教示を得た。

参考文献（「第3節 北青木遺跡周辺における遺跡の動向」項）

- 浅岡俊夫編『神戸市東灘区 西岡本遺跡』六甲山麓遺跡調査会 2001
石島三和『北青木遺跡第6次調査』平成20年度 神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2001
井尻 格編『小路大町遺跡 第4次調査 発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2003
大手前大学史前学研究所「公開講座「摂津の弥生文化」の記録」『大手前大学史前学研究所紀要』11 大手前大学史前学研究所 2017
川上厚志・井上麻子編『北青木遺跡第7次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2014
岸本道昭「播磨の周溝墓一円形優位の地域色－」『小神辻の堂遺跡』龍野市教育委員会 1998
近畿弥生の会編「考古学リーダー10 墓制から弥生社会を考える」六一書房 2007
口野博史ほか「伯母野山遺跡の研究－齊藤英二氏寄贈資料の整理報告を中心として－」『神戸市立博物館研究紀要』21 神戸市立博物館 2005
黒田恭正「出口遺跡 第6次調査」平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2005
黒田恭正編『楠・荒田町遺跡 第54次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2014
神戸市教育委員会編『本山遺跡第12次調査の概要』神戸市教育委員会 1991
神戸市教育委員会編『芦屋市山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録－総集編－』 芦屋市・芦屋市教育委員会 2008
新宮町教育委員会編『新宮宮内遺跡』新宮町教育委員会 2005
新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史 歴史編I 自然・考古』神戸市 1989
菅本宏明編『北青木遺跡発掘調査報告書－第3次調査－』神戸市教育委員会 1999
須藤 宏編『神戸市東灘区本山南町 本山中野遺跡第三次発掘調査報告』神戸市教育委員会 2009
谷 正俊編『深江北町 第12・14次調査 埋蔵文化財報告書』神戸市教育委員会 2014
丹治康明・須藤 宏「森北町遺跡」平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1992
千種 浩編『北青木銅鐸』神戸市教育委員会 2012
寺澤 喬「大阪湾沿岸地域における弥生時代遺跡群の展開とその社会（上）『古代学研究』72 古代学研究会 1974
寺澤 喬「大阪湾沿岸地域における弥生時代遺跡群の展開とその社会（下）『古代学研究』73 古代学研究会 1974
寺澤 喬「弥生時代後期低丘陵性集落の位置づけと高地性集落論」『三井園原遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 2003
寺澤 喬『王權と都市の形成史論』吉川弘文館 2011
寺澤 喬『弥生時代国家形成史論』吉川弘文館 2018
富山直人「西岡本遺跡 第3次調査」平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1996
中居さやか編『本庄村遺跡 第9次調査 発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2003

- 中居さやか編『森北町遺跡 第20次調査 発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2004
- 中村 弘「擬朝鮮系無文土器」『東武庫遺跡』兵庫県教育委員会 1995
- 白谷朋世編『平成8年度国庫補助事業（2）芦屋市内遺跡発掘調査報告書』芦屋市教育委員会 2014
- 兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史 考古資料編』兵庫県 1992
- 前田佳久「大坂湾北岸地域の弥生集落—神戸市域を中心として—」『みずほ』35 大和弥生文化の会 2001
- 丸山 漢編『縄文時代のこうべ』神戸市教育委員会 2015
- 南 博史編『神戸市東灘区本山遺跡発掘調査報告書』財団法人古代学協会 1984
- 森岡秀人「古墳時代の芦屋地方（下）—近年の遺跡調査をふりかえって—」『兵庫県の歴史』24 兵庫県 1988
- 森岡秀人「弥生時代集落研究の新動向（VI）一小特集『兵庫県南東部における集落の様相』によせて—」『みずほ』35 大和弥生文化の会 2001
- 森岡秀人「摂津・八十塚古墳群と堺原郡蘆屋郷・賀美郷周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』 関西大学文学部考古学研究室 2002
- 森田克行『摂津地域』『弥生土器の様式と編年 近畿編II』木耳社 1990
- 山下史郎編『北青木遺跡』兵庫県教育委員会 1986
- 山下史郎編『深江北町遺跡』兵庫県教育委員会 1988
- 山本雅和編『深江北町遺跡』第9次 理成文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2002
- 若林邦彦「近畿」『考古調査ハンドブック12 弥生土器』ニューサイエンス社 2015
- 若林 泰・齊藤英二「伯母野山弥生遺跡—神戸市灘区蘇原高地性遺跡出土遺物状況—』神戸市教育委員会 1963

出土遺物の編年観は下記を参考とした。

- 森田克行『摂津』『弥生土器の様式と編年 近畿編II』木耳社 1990
- 寺澤 喜「畿内古式土器の編年と二・三の問題」「矢部遺跡」奈良県教育委員会 1985
- 森岡秀人・竹村忠洋『摂津地域』『古式土器の年代学』財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター 2006
- 古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成1』古代の土器研究会 1992
- 古代の土器研究会編『古代の土器2 都城の土器集成1』古代の土器研究会 1993
- 古代の土器研究会編『古代の土器3 都城の土器集成1』古代の土器研究会 1994
- 黒田恭正「神戸市域に於ける弥生時代中期の土器編年試案」
- 『袖・荒田町遺跡第54次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2014
- 黒田恭正「神戸市域（六甲山南麓地域）における弥生時代第V様式～布留式並行期の土器様相」
- 『森南町遺跡発掘調査報告書－第1・2次調査－』神戸市教育委員会 2005
- 釋宮正「東播磨地域における弥生土器編年」「弥生土器集成と編年－播磨編－」
- 大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号 大手前大学史学研究所 2007

その他の参考文献

- 新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史 歴史編I 自然・考古』神戸市 1989
- 清水晴男『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』柏書房 1995
- 本庄村史編纂委員会『本庄村史 地理編・民俗編』神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ』本庄村史編纂委員会 2004
- 財团法人大阪府文化財センター『瓜生堂遺跡1 近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う理成文化財発掘調査報告書－考察・分析・写真図版編－』(財)大阪府文化財センター調査報告書第106集 2004
- 今回みられた祭祀坑出土の遺物について参考となる資料を検索していた際に『瓜生堂遺跡1』の報告書にたどり着いた。様々な視点で方形周溝墓の在り方が検証されており、たいへん参考になった。
- 小林正史編『モノと技術の古代史 陶芸編』吉川弘文館 2017
- 村上恭通編『モノと技術の古代史 金属編』吉川弘文館 2017
- 徳澤啓一・河合忍・石田為成「弥生土鍋の炊飯過程とスス・コゲの産状」
- 『土器研究の新視点～縄文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理～』
- 大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第2号 大手前大学史学研究所 2007
- 『鉄道ピクトリアル'97・7月増刊号「特集》阪神電気鉄道』鉄道ピクトリアルNo.640 鉄道図書刊行会 1997
- 『鉄道ピクトリアル2017・12月臨時増刊号【特集】阪神電気鉄道』鉄道ピクトリアル No.940 鉄道図書刊行会 2017

最後に

今回の調査により連続立体交差事業に伴う阪神電鉄高架橋部分の調査が終了し、多くの成果が得られた。第5次調査以降、付近が祭祀空間であったことに加え、弥生時代中期～後期には墓域となり、墓域としての機能が見られなくなった後も、古墳時代前期頃までは水際での祭祀が行われる空間であったことが判明しつつある。また奈良～平安時代の古代の遺構・遺物のまとまりは、深江北町遺跡など古代山陽道沿いに立地する官衙関連の遺跡からも近い海辺や内湾部縁辺に、職能集団などが存在したと推測させる状況を示すものと考えている。

検出遺構群と同時期の居住域が未だに発見されていない状況から、現状で集落域の復元は難しく、どの程度の距離感があるのか定かではないが、居住域に近い海辺・水辺を葬送・祭祀空間とし、ことあるごとにやって来は祭事を執り行ったのではないかと考えており、それらを想像させる資料が得られたものと捉えている。

北青木遺跡を含め、深江北町遺跡、本庄町遺跡、小路大町遺跡など近隣の遺跡において、砂嘴（砂堆）、湿地状堆積（潮汐・溝）、河川河口部の状況など、弥生時代前期～古墳時代前期頃の海岸部の地質、土地形状の形成過程が、増田富士雄氏による地質学の見地から解析された点が非常に大きいものであった。

本事業により東西約650mの範囲における北青木遺跡の様相が確認できたが、調査区の南北幅はおよそ9mに過ぎず、また北側で実施されたライフライン敷設に伴う第5・6次調査での調査区幅も十分に遺構の内容を判断できるものではなかった。今後は南北方向での遺跡の様子、浜提と浜提間湿地の状況の把握、居住域が特定されるようになれば、集落域が復元され、かつ芦屋川一住吉川間の遺跡の消長、推移が想定できる状況になり、この地での人々の活動の様子が明らかになるであろう。今後の周辺での調査による成果の蓄積に期待したい。

第7次調査の後に完成なった下り線高架橋の人工の日傘のもと、今回の調査区両側では着々と進む上り高架橋工事の橋脚は上に伸び、発掘調査区は下へ下へと下がりながら、新旧、約2,000年の時を隔てた対照的な景観の中で調査を遂行した。神戸市内の市街地部においてこれほど距離の長い範囲において調査が行えることは近年、ほとんど稀なことであり、改めて関係各位に謝意を表したいと思う。



写真17 調査地と周辺

写真図版



B55-A



B45-B



B53-A



B54-C



B56-B



B55-A



B55-B



B56-B



B56-B



B52



B56-B



B55-A



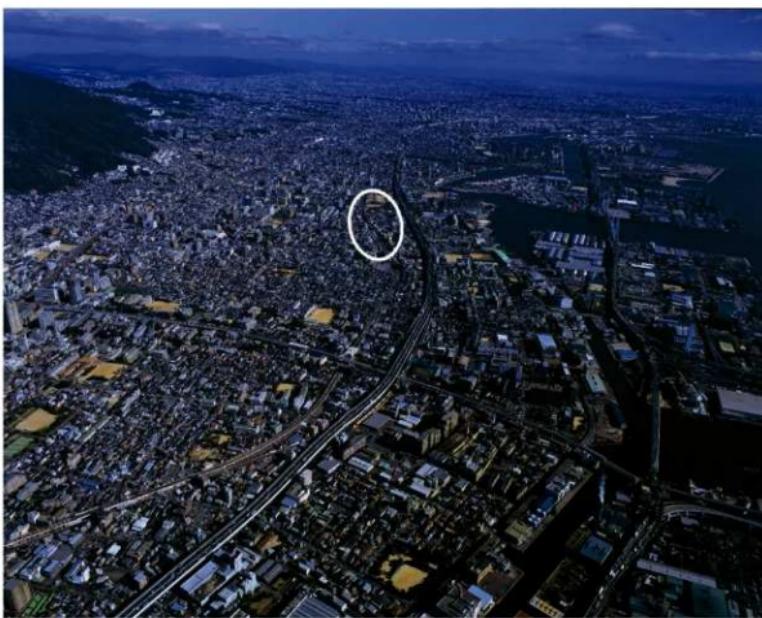
B52



B52



大范围撮影



1. 調査地遠景 (○の範囲中央の「く」の字の部分が阪神電鉄本線と調査地：南西上空から)



2. 第7次調査 B47調査区 方形周溝基全景
(東から)



3. 第8次調査 B47調査区 方形周溝基全景
(東から)

カラー写真図版 2



1. B46・B47調査区 周溝墓出土の土器



2. B52調査区 祭祀土坑出土の供献土器



3. B50-C・B51調査区 溝・土坑出土の供献土器



4. B53-A～B58-B 調査区 奈良～平安時代の遺物



写真図版 2



1. B47調査区 方形周溝墓全景（東から）



2. B47調査区 SD201下層遺物出土状況近景
(南から)



3. B47調査区 SD201上層遺物出土状況（南から）



4. B47調査区 SD201下層遺物出土状況（北から）



5. B47調査区 方形周溝墓
ST205～208検出状況（東から）



6. B47調査区 方形周溝墓
ST205木棺材検出状況（東から）



1. B48-A 調査区 西トレンチ全景（北西から）



2. B48-A 調査区 SX01検出状況（北西から）



3. B48-A 調査区 SX01
遺物出土状況近景（西から）



4. B48-B 調査区 全景（東から）



5. B48-B 調査区 漆の堆積と浜提検出状況
(北西から)



6. B48-B 調査区 SD301最上層遺物出土状況
(北から)

写真図版 4



1. B49-A 調査区 全景（発検出状況）（東から）



2. B49-B 調査区 全景（東から）



3. B49-B 調査区 漆木製品出土状況（南西から）



4. B49-B 調査区 漆土器出土状況（西から）



5. B50-A 調査区 全景（東から）



6. B50-B 調査区 全景（発掘状況）（東から）



1. B50-C 調査区 全景（東から）



2. B50-C 調査区 SD01遺物出土状況
(西から)



3. B50-C 調査区 SD02 SX01遺物出土状況
(南西から)



4. B51調査区 全景（西から）



5. B51調査区 SK302遺物出土状況
(南から)



6. B51調査区 SK302全景（南から）

写真図版 6



1. B52調査区 全景（東から）



2. B52調査区 SK104・105全景（西から）



3. B52調査区 SK106全景（東から）



4. B53-A 調査区 全景（西から）



5. B53-A 調査区 SD202上層遺物出土状況
(南西から)



6. B53-A 調査区 SD202下層断割り状況
(南西から)



1. B53-B 調査区 全景（東から）



2. B54-A 調査区 全景（東から）



3. B54-B 調査区 全景（東から）



4. B54-C 調査区 全景（東から）

写真図版 8



1. B55-A 調査区 第2遺構面全景（東から）



2. B55-A 調査区 耕土層下 鋤溝検出状況
(南西から)



3. B55-A 調査区 SP113基礎石検出状況
(東から)



4. B55-B 調査区 全景（東から）



5. B55-B 調査区 SK106遺物出土状況
(南西から)



6. B55-B 調査区 SP132基礎石検出状況
(南東から)



1. B56-A 調査区 第1遺構面全景（東から）



2. B56-A 調査区 第2遺構面
西端被熱部（南から）



3. B56-A 調査区 第2遺構面
SK119・120検出状況（北から）



4. B56-A 調査区 第2遺構面
焼土塊検出状況（南から）



5. B56-A 調査区 第2遺構面
SK119・120遺物出土状況（北から）

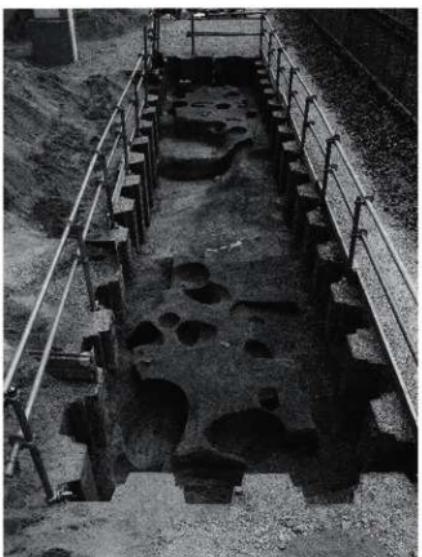


6. B56-A 調査区 第2遺構面 焼土塊近景
(南から)



7. B56-A 調査区 第3遺構面全景（東から）

写真図版 10



1. B56-B 調査区 全景（東から）



2. B56-B 調査区東半 遺構検出状況（南から）



3. B56-B 調査区 SK109石出土状況（西から）



4. B57-A 調査区 全景（西から）



5. B57-A 調査区 遺構（SP126・128など）
検出状況（南から）



6. B57-A 調査区 SP121石出土状況及び
土層断面（南から）



1. B57-B 調査区 全景（東から）



2. B58-A 調査区 全景（東から）

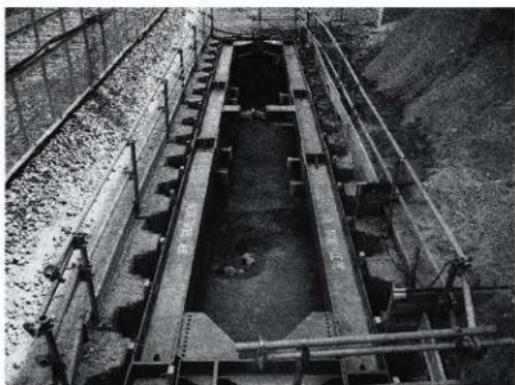


3. B58-B 調査区 全景（東から）

写真図版 12



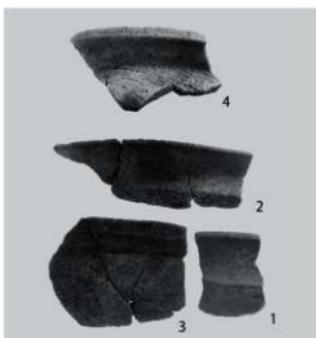
1. B59-A 調査区 全景（西から）



2. B59-B 調査区 全景（西から）



3. B60調査区 鋤溝検出状況（東から）



1. 846調査区 出土土器



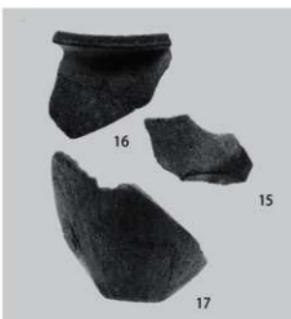
2. 847調査区 方形周溝墓出土土器



写真図版 14



12



15

17



13

1. B48-A 調査区 出土土器



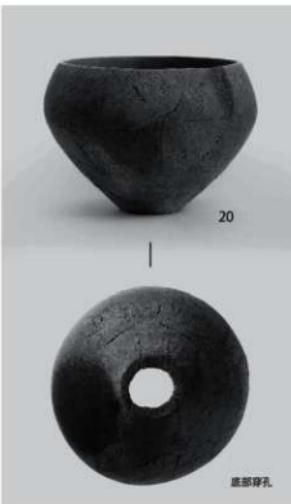
14

2. B48-B 調査区 出土土器



18

3. B49-B 調査区 淩出土土器



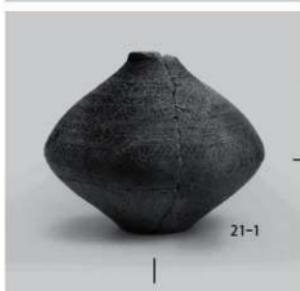
20

底部穿孔

4. B50-C 調査区 SD01出土土器



19

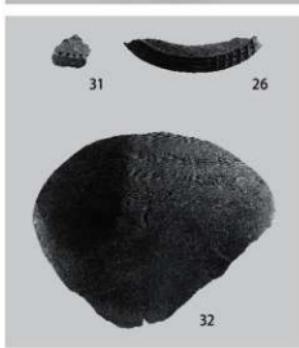


1.B50-C 調査区 SD02出土土器



2.B51調査区 SK302・SX302出土土器

写真図版 16

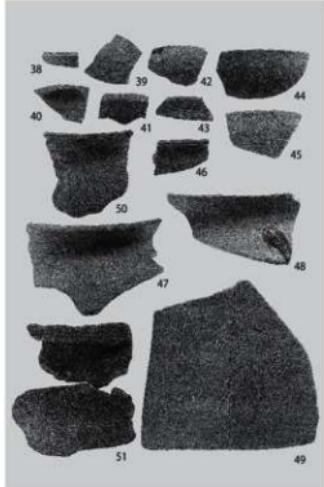


B52調査区 SK104・105・106出土土器

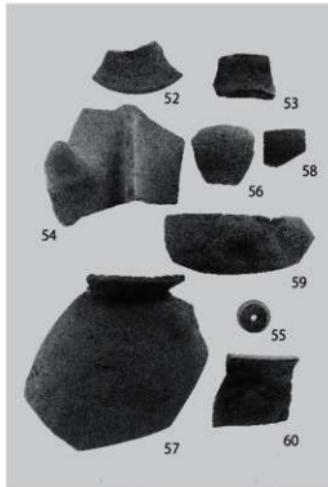


1. B53-A 調査区 SD202下層 出土土器

2. B55-B 調査区 出土土器

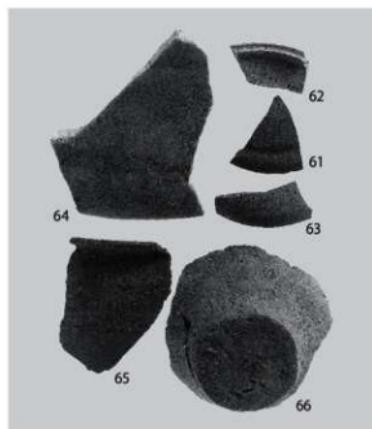


3. B56-A 調査区 第1遺構面 遺構出土土器

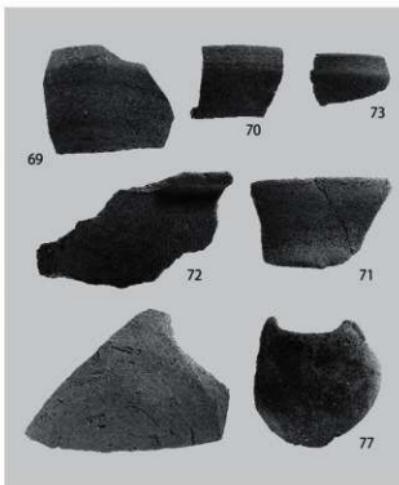


4. B56-A 調査区 第2遺構面 遺構(被熱部) 出土遺物

写真図版 18



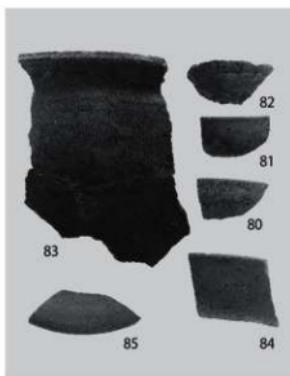
1. B56-A 調査区 整地層及び浜堤面出土土器



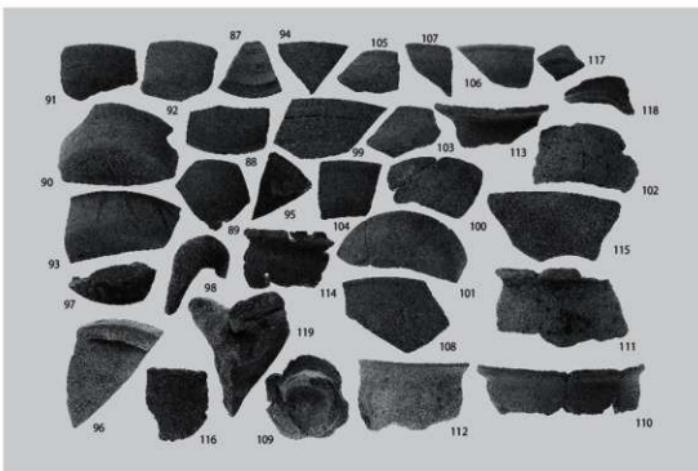
2. B56-B 調査区 出土遺物



1. B56-B 調査区 浜接面出土土器 (SX103)



2. B57-A 調査区
遺構 (SK116・120・124・SX102)
出土土器

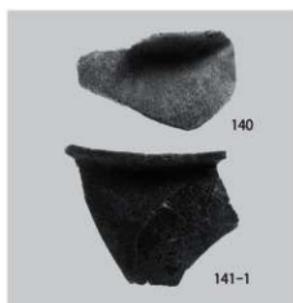


3. B57-A 調査区 遺物包含層出土遺物

写真図版 20



1. B58-A 調査区 SD101出土土器



3. B59-B 調査区 出土土器



2. B58-B 調査区 出土遺物



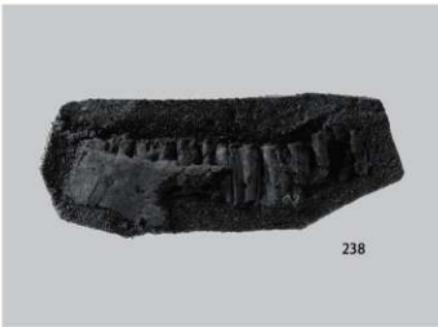
4. B47調査区 方形周溝墓 ST205出土木棺材



1. B49-B 調査区 洗出土 木製品

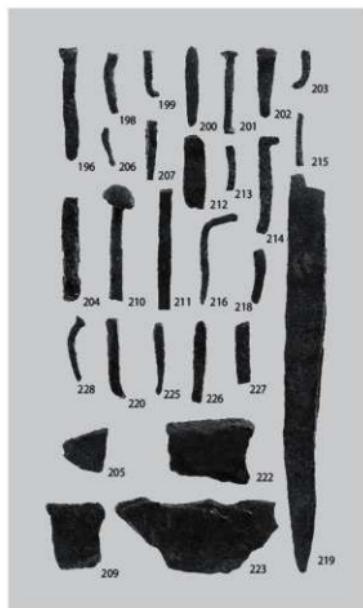


2. 852調査区 SK104出土 ウマ上肢骨

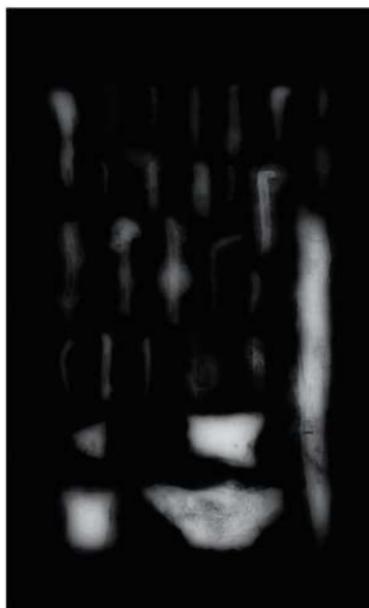


3. B53-A 調査区 SD202出土 ウマ下顎骨

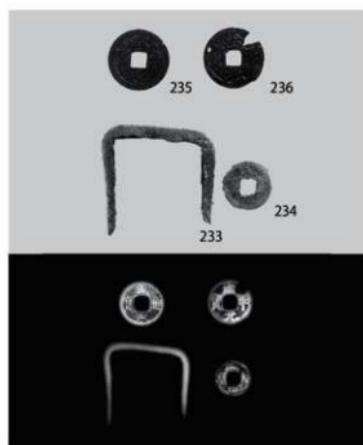
写真図版 22



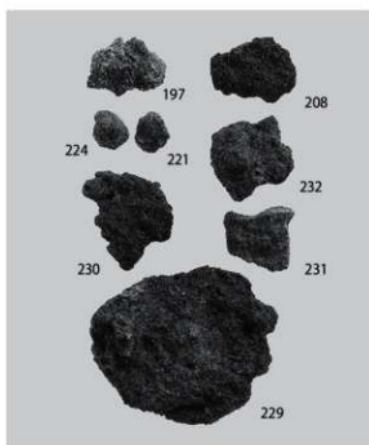
1. 第8次調査出土 鉄製品



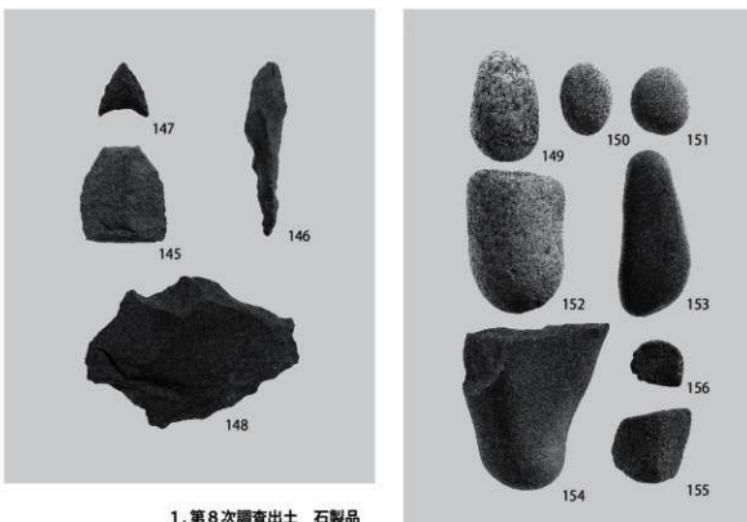
2. 鉄製品 X線透過写真



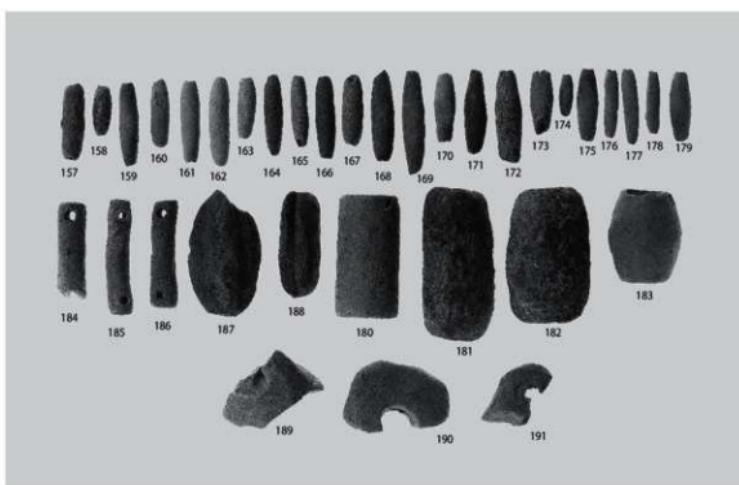
3. 第8次調査出土 銅製品及びX線透過写真



4. 第8次調査出土 鉄滓



1. 第8次調査出土 石製品



2. 第8次調査出土 漁撈具（土錘・鉛壺）

報告書抄録

ふりがな	きたおおぎいせき だい8じ はくつちょうさほうくしょ							
書名	北青木遺跡 第8次 発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤井太郎(編)・阿部功・中村大介・丸山真史							
編集機関	神戸市教育委員会							
発行機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL078-322-6480							
発行年月日	西暦 2018年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
きたおおぎ いせき 北青木遺跡	ひょうごけん こうべし 兵庫県 神戸市 ひがしながらく おおぎ 東灘区 青木4・5丁目	28105	1-35	34° 43' 17"	135° 17' 19"	20160411 ~ 20160809	960 m ² (延べ 1,430 m ²)	阪神電気 鉄道本線 住吉・芦屋間 連続立体 交差事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
北青木遺跡	集落址	弥生時代～近世	方形周溝墓・円形周溝墓 溝・河道 土坑・井戸状土坑 柱穴・ピット			弥生土器 チヤート片 須恵器・土師器・灰釉陶器 縄釉陶器・黒色土器・ 瓦器・瓦 陶磁器・土鍤・繩文土器		
要約	平成23年度に行われた同事業に伴う北青木遺跡での第7次調査に引き続き、それに隣接する北側での調査を実施した。前回調査検出の遺構・遺物の広がりが確認できるなど、状況の追認が行えたほか、一部では、自然地形の作用(滲形成など)を要因とする削平の様子なども確認できた。主要な検出遺構である方形周溝墓が、新たに3～4基確認され、弥生時代中期～後期の墓域、あるいは祭祀空間と考えられる空間の広がりを検討する上で重要なデータが得られた。また奈良時代の遺構・遺物の集中する地点が追認され、隣接する「華屋駅家」に比定される深江北町遺跡との関連性を考える上で重要な資料が得られた。							

北青木遺跡 第8次発掘調査報告書

2018.3.30

発行

神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

Tel. 078-322-6480

印刷

株式会社クレアチオ

神戸市中央区新港町8-2 新港貿易会館4階32

Tel. 078-332-0515



City of Design
KOBE 

United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

Member of the UNESCO
Creative Cities Network
since 2008